



特214
326

我陣海牙

輯二第



始



は し が き

◎東洋永遠の正しき平和うち建てんが爲め、暴支膺懲の劍をとつてより茲に八箇月、我が軍は海陸空ともに敵を制壓し、着々その効果を収めつゝある。

◎我が三越應召軍人後援會は、創立以來引續き出征勇士の歡送に、留守宅の訪問に、慰問品の發送に、將又傷病者の見舞等、在郷軍人會及び國防婦人會三越分會と密接なる連絡の下に、會員一同協力、以て銃後の守備全からむことを期してゐる。

◎昨夏事變發生以來、東京三店に於ける應召者は左記數字に示すが如くである。

本店	應召者	一四八名
内	出征	一〇五名
	留守隊	二六名
	傷病入院中 (内地歸還)	六名 (事變當初よりの傷病者 一一名)



→ 府政市海上
 コ、根屋の色緑に柱の塗朱
 な華豪見一の建トーリクン
 ぬらな骨鐵、がるあでのも
 トーリクンコへ上り張板
 は穴の根屋、物キチナイの
 。るあで痕の弾爆が我



↓ 學大旦復

川谷が我、朝日四十二月十
 復の鎮灣江たし據占が隊部
 根屋、部一の舎校、學大旦
 構、ひましでん飛つふ皆は
 食が片彈もに幹の々樹の内
 當れ是て總、るあでん込ひ
 ……のもる語物を戦激の時



↑ 秋の支南

上は、こ、秋の支南き深霧
 部一の場兎養る或、外市海
 滅で闘戦の我彼は内場い廣
 軍空が我は車風、だ々々茶
 のーラベロブに共と躍活の
 とソユヒ、るあでつ廻く如
 枝小の柳に時同、音の丸彈
 。たれゆとリワフが

(信通眞寫君造京田杉)

昭和十三年三月一日



銀座支店

新宿支店

召集解除	負傷入院中 (内地歸還)	出征	應召者	留守隊	出征	應召者	召集解除	戰病死者
一名	一名	一五名	一七名	一名	一六名	一七名	七名	四名

以上

三越

本店
 新宿支店
 銀座支店

應召軍人後援會

(編者 玉井 肇 識)



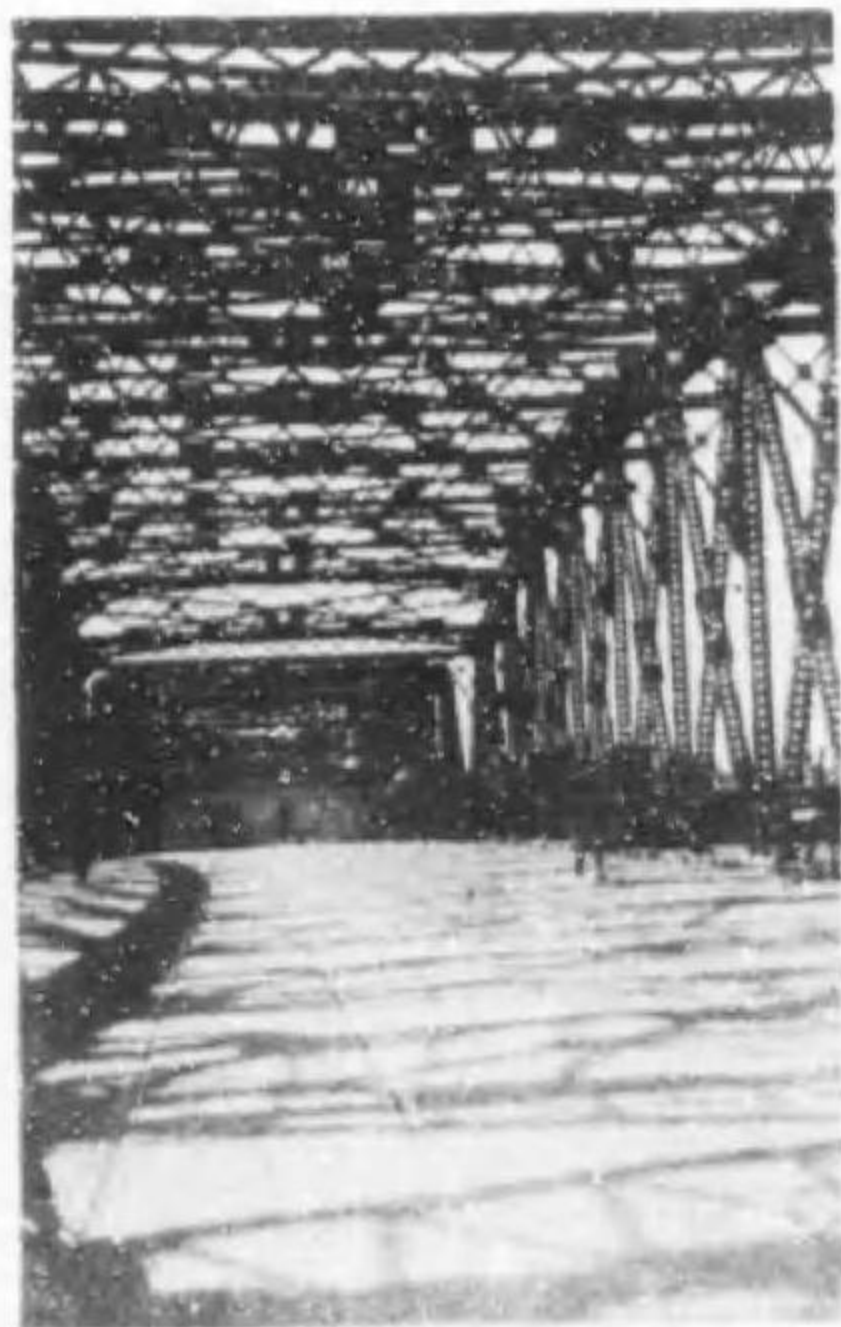


← ぶ徳を士勇の日しき過

名有・し際に變事海上の前
 廟たし死戦が士勇三彈爆な
 我び再日六廿月十・は鎮行
 棉い廣。たれさ據占に軍が
 本二が柱標くし寂に中の畑
 十和昭もれそ。るゐてつ建
 てれき記と日三月一十年二
 へて立を旗章日か誰。るあ
 。たつい

→ 臺計時の場馬競

肉が機尉大脇西の軍空が我
 競鎮灣江たし入突て以を彈
 百約はさ高・臺計時の場馬
 ずせもれ倒に撃砲が我・尺
 。るゐてへたこち持もく辛
 カチート部全は席覽觀い廣
 。たつあてし築構にうやの



← チツリブ・ンデーガ

界租英舊らか界租同共海上
 ツリブ・ンデーガるず通に
 英ほ影人いさ小の央中。ヂ
 日はに方の前手・兵備警國
 の日はに下橋。るゐが兵本
 か次が舟たてたを旗小の丸
 。るゐてい動と次ら

(信通眞寫君造京田杉)



← 跡の戦激鎮場大

夕日六十二月十年二十和昭
に手が我後の戦激大の前空
に線戦海上 鎮場大たし跡
要重たし割をクツボエ大一
。るあで點地

(影撮君毅誠瀬廣)

→ 塾女國愛

地戦激の近附路興中海上
に強頑てつ籠立に、こは敵
銃き如の巢の蜂。たし抗抵
。よれら見を痕の弾

(影撮君毅誠瀬廣)



← 宇文傳宣の日抗

たれさ記に擧や壁の處る到
浙はれこ 宇文の傳宣日抗
。るあで景風一の洲湖省江
(信通眞寫君一伍條上)

曩に戦陣餘芳第一輯を發刊したところ、出征者の家族の喜びは申すまでもなく、各方面から激賞され、分與の申込が多いので困りました。

其後、更に我が三越の應召軍人が、戦線から小閑を得て寄せられた貴重な通信を蒐集して、第二輯を編輯いたしました。

聖戦既に八ヶ月、わが忠烈なる將兵諸君の奮闘は、幾多の赫々たる戦果を収めました。が、今後も亦更に容易ならぬ御苦勞を願はなければならぬと存じます。

こゝに蒐めた通信は、いづれも眞情を語るもので、字句の間に自ら硝煙彈雨の激戦を想はしめ、讀むものをして銃後一層の責任を感ぜしむるものがあります。

謹んでわが忠勇なる出征軍人の武運長久を祈ります。

昭和十三年三月

三越本店應召軍人後援會

會長 豊 泉 益 三

戦争は國家の一大事である。應召は國民の一大事である。一大事であるだけに、これに干渉することの出来るといふことは、眞に千載の一遇、男子として上なき本懐であらねばならぬ。

明治天皇様は「弓矢とる國に生れしますらをの名をあらはさむ時はこの時」とも仰せられ、また「國につくす道に二つはなかりけりいくさのにはに立つも立たぬも」とも仰せられた。一は召されてこの一大事に參し得たものを激勵せさせ給ひ、今一つは直接戦争に従事し得ぬものを慰撫し給うての御製と拜せられる。實にや國民として國に盡すの道は、必ずしも銃とりて第一線に立つに限つたものではないと申すものゝ、この時この際、この大業に直接參し奉ることを得た人は實に羨ましいことである。

今次の日支事變に際しては、我が三越からも多數の應召者を出した。私は郷軍分會關係者として、日ごとの歡送式に列したが、勇躍征途に上らるゝ多くの同僚を送ることに、云ひしらぬ感激に胸うたるゝと同時に、また健美の情に堪へないのであつた。

今やこれ等の勇士は、北支に中支に、陸に海に、一死報國を誓つて盡忠の誠を竭されつゝあり、茲に之等多數勇士の陣中消息を蒐めて戰陣餘芳第二輯を梓に上せられた。篇々皆血と汗との結晶、飾らざる事實は所謂名文以上我等に迫るものがある。蓋し我が三越のあらん限り傳へ／＼て偉勳を偲ばるゝであらう。

まさきくて軍のにはに君ありと

知るもうれしき今日のふみかな

讀むにまづ胸ぞとどろくまのあたり

軍のにはも見るこゝちして

店にありてすぐれし友は銃とりて

世にたぐひなきますらをにして

家を忘れ命をすてゝ國の爲

仇にいい向ふをゝし我が友

店のむた讀み傳へなむますらを

血もて汗もて書けるこのふみ

昭和十三年彌生

帝國在郷軍人會東京三越分會長

渡邊新三郎

出征各地より寄せられたる、三越人の赤裸々なる書信は、一面、今次事變の經過を物語る好箇の記念たるを失はない。

戦陣餘芳の第一輯は、豫て當銀座支店の出征者にも、夫々郵送したるところ、圖らずも之に依つて初めて三越に於ける事變應召者の全貌が判り、非常に嬉しかつたといふ便りを受けた位で、出征者の爲めにも、亦まことによき企であつたと信ずる。

今や事變は長期戦に入り、戦陣餘芳も、亦今後尙第三輯第四輯を出すことになるであらう、然も輯を重ねるに従ひ、其間自ら事變の輝しき變化を見出されんことを期待してゐる。

茲に第二輯の刊行を見るに當り、聊か所感を述べ併せて編輯の勞を多とする次第である。

昭和十三年三月

三越 銀座支店 應召軍人後援會

會長 鈴木孝五郎

戦陣餘芳第一輯を拜讀いたしましたして、三越應召軍人の方々が、砲煙彈雨の戦地より寄せられたる勇しき數々の御通信に、限りなき感激と感謝の念を禁じ得ぬものが御座いました。忠勇なる皇軍は、既に輝しき戦果を、海に、陸に、空に收められ、赫々たる武勳は四海を壓して居りますが、今後長期に亘つて更に一段の御苦勞を願はねばならぬと存じます。

私ども、殊に大日本國防婦人會東京三越分會の一員といたしましても、更に銃後の緊張を期し、全員一致協力相共に戒めて、忠勇なる將兵様方の御苦勞に酬ゆるところがなくてはなりません。

今度第二輯の出版せらるゝに當りまして、貴重なる御通信を寄せられたる戦線の將兵様方に、厚く感謝の意を捧げ、尙御武運の長久を、心より御祈り申し上げます。

昭和十三年三月一日

大日本國防婦人會
東京三越分會長

古谷つる

本報表紙の寫眞は、去る昭和十二年十二月十四日、南京陥落を祝して三越本店員約三千二百名が提灯行列を舉行したる當夜、陸軍省前にて撮影したるものなり。

伊藤 孫藏 君 (受渡係)

この三週間ばかり毎日快晴が打續き、且つ暖かにて誠に暮しよく、日の過ぐるも知らぬ位であります。

今迄戦地のこととは餘りお知らせず自由を有せず、骨抜きの仕事ばかり申上げ不本意でありましたが、今回は我が伊藤隊が經過しました行動の概要を申上げます。

九月〇〇日上海上陸以來その附近で警備に就いてゐましたが、十月〇日から曹宅(大場鎮北方約一里)の攻撃に移りました。元來曹宅は人家二、三十の小部落であります。此邊は敵の第一線主陣地で且つ演習場とかいふ噂もある位、即ち敵には熟地である上に家屋、クリーク、トーチカ、鐵條網等、綿密なる計劃の下に防禦設備を施してあります。

この陣地に對し我が方は雨中蘆藻濱クリーク(曹宅の北方三、四百米に在り、幅三十米)を渡りて直ちに攻撃に移りましたが如何にせん泥土の爲め頼みとする射撃が全く不能となり、身體はすぶ濡れの泥まみれ、不眠不休の上に食は數日間毎日パン一食のみ、飲料水は勿論なく、全く肉彈を以て悲壯な攻撃前進を續けました。

敵は小銃、機關銃の猛射、迫撃砲の亂射にて、我が方は平時の演習で教はつたやうなことでは五米も前進が出来ません。

私は迫撃砲彈に二回見舞はれ、一度は泥をかぶり、一度は耳が一寸遠くなりました。小銃彈、機關銃彈が身邊二、三寸の所を

通過したのは何十回ありましたが計り知れない程で、全く當らぬのが不思議な位であります。

この苦戦は略々五日間で終り、その後〇〇日迄は天候恢復した爲め戦闘が頗るし易くなりました、殊に敵は射撃だけはよくやりますが、逆襲、突撃は殆んど致しませんから大いに助かりました。

此戦闘の初め三、四日間に一人の大隊長は戦死、二人の大隊長は戦傷、部隊長も戦死、外に大尉以下多數の死傷者が出來て實に困却致しました。

斯かる状態で、私は〇日より〇〇日まで大隊長の職を執りました。伊藤隊の生存者は私の外は(註、伊藤君は歩兵大尉)伍長以下ばかりとなり、曹宅戦の最後迄に戦死三十數名、戦傷五十數名を出し、誠に申譯ない次第でありました。

然し忠勇なる隊員のお蔭にて敵の重要な堆土、一軒家及びトーチカ等を占據し、優秀なる戦績を収めることが出来ました。

この攻撃後、伊藤隊は又第一線となつて大場鎮へ進出しましたが、同地の人家は八分通り破壊され、未完成のトーチカも數ヶ所に見受けました。

續いて蘇洲河の攻撃、嘉定、太倉の追撃にも第一線を承りましたが、恰も無人の境を往くが如く前進し、死傷も僅か數名でありました。

十一月下旬からは上海附近の警備に就き、第一線苦からは全く遠ざかりました。

加納部隊長が戦死後は新聞の戦況記事差止めがあり、内地では
情況が不明になったこと、思はれます。従つて種々の風説が飛
び、部隊長は自殺したとか或は聯隊は全滅したとか云はれたそ
うですが、部隊長が迫撃砲で戦死される時、私は二、三十米
離れた所でよく見て居りました。

支那兵は私の見た所では、一般に年若く戦闘は未熟で、手榴彈
は盛んに投げますが、突撃はいたしません。然し防禦編成は上
手になりました。或は外國將校の成案に依るものかも知れませ
ん。曹宅戦の時、若し敵が突撃し來らば恐らく吾々は全滅して
居つたことせう。

支那兵は面白いことには、毎夜時刻定めず十分乃至三十分間位
亂射し、恰も逆襲かの如く見えますが、吾々はよく之を知つて
居りますから、その亂射中でも平氣で壕内に眠つて居ります。

一昨日上海南部フランス租界との境界へ警備に参りました。租
界内は支那人で充滿して居り、城内北部にも約十五萬人の支那
人が押込めてあります。

英、佛、伊國兵の警備して居る租界以外の上海は、人家は八、
九分通り焼失又は破壊されて居り、其恢復は容易でないやうに
見受けられます。

此の手紙を書いてゐる時、南京陥落の快報が参りました。

十二月十五日

今日は朝來細雨が降り、明日の元旦が如何かと案じられます。

然も小生最初に出征の際御見送りを戴きし方々のお顔を見かけ
たことは意外と云ふよりも寧ろ奇蹟でした。

少時の間互に言葉もなき有様でしたが、やがて語る北支、聽く
大連——話題は次から次へと盡くる處なく、遂に席を附近の三
越寮に移し、特別な御厚意により夜を徹しての歡談、笑聲と
感激の裡に一夜を語り明かしました。

十日早朝〇〇上陸、同日午後天津着、半月振りに歸つた天津は
格段の繁華さを示して居りました。曾て天津襲撃の翌々日此の
地に入つた時と思ひ比べて全く別世界の觀があります。

現在の駐屯地は天津〇〇で、愈々明日から再び任務に就きます
もの、主としてこの附近の擔任で、現に皆様の御後援振を見て
來た身には聊か腕が夜泣きする様な感じ、命令とは云ひながら
残念至極な次第です。

遙か山西の高地には幾多戦友の靈が再び吾等の進軍の日を待つ
て居ります、血涙を飲むで戦友の遺骨を懐に彼の山嶽を降つた
頃を思へば——心はいつしか遠く長城線を走ります。

歸營して始めて皆様の御慰問品やら御手紙やら多數頂戴致しま
した。出京中一々御挨拶の出來ませんでした事を深く御詫び申
上げます。

十一月十一日

(註) 井出次郎少尉は昭和十二年九月廿四日、長城線靈邱
附近の激戦に於て名譽の戦傷を負ひたるも、幸ひ輕傷なり
し爲め間もなく快癒、十一月一日朝、戦友の遺骨輸送を指

兵舎の前には門松を立て、正月氣分となりました。當地方は竹
は到る所にありますが、松は非常に少なくあります。

旬日前から汽車が動き出しました。鐵道は可なり破壊されて居
りましたが、追々修理されて居ります。租界内や南市に押込め
られてゐました支那人は、數日前から出ることが出來、各所に
住民が増して参りました、然しまだ外出時間や住所に制限があ
り、食物のないのに困つて居ります。

他の部隊は南京に抗州に奮戦してゐる模様ですが、私は上海南
方一里の龍華鎮といふ小部落で警備して居ります。

此處にありません龍華寺は千五百年前の古刹で、傾きかけた高い
七重の塔と共に上海近傍の名所の一つであります。

十二月三十一日

井出次郎君(吳場係)

在京僅かに四十餘時間、過ぎし日の幾多の御高恩に對し御禮申
上ぐる違ふらなかりしに拘らず、皆様より更に加へての御配
慮、餘りにも分に過ぎたる事として唯々感涙にむせぶのみで御座
います。

歸路恙く船中の人となりましたが、持前の暢氣さから行先も氣
に懸けず、船は帆まかせと濟まして居りました處、航路は聊か
北上の氣味、〇〇直航とのみ思ひし船は、圖らずも大連に寄航
新築の大連支店に立寄るの機會に恵まれました。

揮して東京歸着、要務を果して同二日夜九時東京歸發再び
征途に上れり。この書面は當時天津着後發東せられたるも
のなり。

昨年末天津出發、幸にも濟南攻撃戦に参加の機を得、同地陥落
と共に入城、城頭高く懸る大日章旗の下、大黄河を背景に、昭
和十三年の元旦を壽ぎ申候

其後も追撃に次ぐ追撃、多忙の裡に日を過し居候 當地は連日
晴天、濛々たる砂塵の中に起伏、任務に邁進致居候

昨日は青島落ち、今日又濟寧の陥落を見、益々皇軍の武威揚が
れるを痛感致候

一月十三日

飯野 誠 君 (雜入係)

出發以來丁度今日で滿五ヶ月、轉戦に轉戦を重ね、第〇師團よ
り〇集團へ、更に〇〇部隊へ、今は又〇〇部隊へと配屬を變更
されました。

我々は重要地點或は師團本部所在の防空に當り、只今は北支の
重要都市〇〇を距る三十餘軒の地に居ります。

我が高射砲隊は今迄殆んど敵機を見ることも出來ませんでした

が、十月十四日早朝、十一機の敵飛行機と戦ひ、二機を敵地内に墜落せしめたのを初めとし、翌十五日夕は、次々と十餘回に亘り襲撃して来た敵機と戦ひ、三機を撃墜しました。

敵の夜襲も屢々受けましたが、幸ひに我が部隊は些の障りもなく、十一月九日〇〇城に入城、同地防空の任に就き、その後又〇〇部隊へ配属せられて現地に参りました。

昨今では銃砲聲にも慣れて子守唄のやうに聞えます、時には實弾の御見舞も受けましたが、現在は敵陣にも遠く、平時と同様全く静かなものです。戦地の元日は幸ひ餘り内地と變らぬ御馳走を戴きました。これは全く夢にも思はなかつた事で、先づその献立は朝食が鶏の吸物に御雑煮(餅澤山)晝飯は昆布卷、黑豆、てりごまめ、数の子、きんとんに口取など、各々紙皿に盛り、それに林檎と蜜柑と羊羹でした。

★ ★

O様 私も幸ひ出征以來、一度の病氣もせず大元氣です。オンドルでお臂を温められる室内で、敵機の來るのを待つて居ります。

C様 上海へ行かれた亮さんの手紙に、鐵砲の音が相當深刻とのことですが、高射砲の發射中彈藥を運ぶ我等彈列も亦相當なものです。

W様 貴君の心臓の強い所をなぜ送つて下さらぬか、君の心臓の強さがつくづく北支では必要と思ひます。

Y様 北支は滿洲ほどに寒からず、火事が凍るやうなこともな

い、矢張り火事では家が燃えるやうです。金植は不要なるもロソクは持つて来た方が、室が明るくて非常に天寶(支那語で頗る良いこと)、まだあるが凍り付いて書けぬ。

N様 兵一同は出征以來、内地が不景氣になりはせぬかと心配して居ります。スポーツ用品の如き、景氣不景氣のバロメーターとなるものが良成績にて、シーズンアップにならむ事を、遠く北支より祈つて居ります。

H様 北支には君の言はれるやうな、アスファルトの道路は、「トントンデーメュー」(支那語、全く無い)だ。乗用車でなくトラックですから、自然荒れた運轉をするやうになり、内地に歸つてからこんな運轉では、早速お巡りさんにしほられます。

T様 君の言はれるやう、全く大陸生活も板につき、支那人の大蒜臭いのも氣にならず、支那人の食物も喰べられるやうになりました、顔も支那人臭くなつたかも知れません。

K様 熊の湯及關の時以上に元氣で張り切つてゐる。北支は全くと云つてもよい位、雪がないのでスキーなどは出来ぬ。

一月二十日

井上幸義君 (新宿支店)

小生儀出征以來轉々として北支を馳せ廻り、一定の所にも居ら

ず、軍務多忙の儘、皆様にも御無音致し誠に申譯無之候目下京漢線順徳に〇〇と共に宿營、此處にて新年を迎へ候皆様の御年賀狀に接し、又留守宅よりの報を受け、銃後の御厚志に感泣致居候御銘々に書狀差上げ、御禮申上べきに候へども、それもならず皆様によりしく御取計ひ下さらば幸甚の至に存候

一月五日

生田秀之君 (賣場係)

この手紙が着く頃には、僕等の部隊は相當前進してらう。昨〇〇日命令によつて僕等の部隊も前線に出ることになつた、はつきりした事は解らないが、南京攻略にも参加するだらう、明日から前進又前進——強行軍で何十里かを突破するのだ。今月中には必ず戦鬪に参加するだらう、此の命令を聞いた時の氣持は、流石に緊張した。〇〇達の事を考へて涙が出て来た。然し運といふことは事實あるものだ、最悪の場合は考へない方がいい、たゞ神に總てをお委せすることだ。

十一月廿九日

昨日公用で〇〇から上海へ来た、二泊して又歸る。

一昨日の命令により結局鐵道守備をやるので、直接戦鬪に加はることは無い、然し敗殘兵が時々出るので油斷が出来ない。〇〇迄往は三泊で行軍だつた。背囊や銃は支那人から徵發した車につけて押して行つた、途中往くも還るも兵隊ばかりだ、たまに土民が日の丸の白布をつけてお辭儀をする。何處へ泊つても荒された民家、やつと寝られるだけだ、便所なんて贅澤なものはない、野天だ。水は悪く、クリークの水を沸かして飲む、馬や時には人の死骸が浮いてる水だ。上海——龍華鎮——松江と泊つて歩いた、前進するに従ひ、屍體がごろ／＼してゐる、首だけ轉つてたり……………それから〇〇に向ふ途中「敵襲」と来た、僕達は後方で、飯を食つてたが、あはて、彈丸込めした、前の方ではもうボン／＼やつてゐる、が、之は結局疑心暗鬼を生じた類だつた。お蔭でやつと悪道路を曳いて来た車を捨て、背囊に毛布をつけたやつを擔いで行軍だ、そのつらかつたこと、目がくらんで来て結局、他の隊の車に荷物を乗せてもらつて〇〇に着いた。此處は田舎だけれど相當な町らしい、ちよつとベニスの様に町の中をクリークが流れてる。泊つたのは御堂だ、板敷の上に藁、毛布一枚、それに寝るのだ、風がスースー入る、兵隊は皆感冒氣味だ。寒いので夜中に目がさめた時の氣持は何んとも云へない……………然し昨朝、仲のいい本部の將校に用事を言ひつかつて上海に行く様に命ぜられた時の嬉しかつた事……………トラックで八時間

ブツ飛ばして、上海の殘留部隊へ着いた時は涙がこぼれた。今朝は町へ出て、正金へ行き○さんに會つた、昨夕十日ぶりで風呂にも這入つた。
まだ任地は分らない。明日○○に歸り、又移動するだらう。今日正金で○ちゃんのお戦死を聞いて驚いて居る、何んとも子供が可愛想だね——。

十二月七日

伊藤 寧 君 (庶務係)

第一線部隊へも一ヶ月振りで通信の便あり、なつかしい内地からの御手紙、ほんとうに嬉しく拜見致しました。

思ひ出せば去る八月○○日動員下令、皆様に東京驛迄も御見送りを戴き、御別れして以來早や四ヶ月餘、懐かしいのは故國の空、夜毎月光を拜して東都を偲んで居ります。

さて私も十月末迄古都北京城内に在つて、警備の任に就いて居りましたが、十一月○日第一線に向け出發、行軍二十日間、約二百里を突破しました。

此の間、敵人馬の屍體、路傍に横はるもの夥しくその算を知らずといふ有様、最も激戦地たりし源平鎮及び忻口鎮にては我が軍の犠牲も○○人と聞き及びました。

山西省の主都太原を経て、十一月○○日以来、清源に駐屯、警

今泉 清 君 (銀座支店)

出征以來我が○○部隊は永定河の渡河戦を初めとして、北支大陸の各地に奮戦を續けました。

十一月四日には敵の最も頼みとする後方陣地彰徳へ一番乗りを致しました。曩きに保定を占領し續いて彰徳の一番乗りですから相當な手柄と思ひます。

まだ後方部落には、敵の敗殘兵が陣地を構築して居るので、今日も我が飛行機が空爆にやつて参りました、敗殘兵は小銃にて飛行機を射撃しますが、我が軍の○○機は悠々大空を躍進して参りますので、敵はなか／＼陣地の構築が思ふやうに出來ず、其上、野砲や重砲で心膽を寒からしめられてゐます。

渡河戦の際、○隊長殿の馬を誘導する爲め幅五〇米位の深い河を危険を冒して泳ぎました。工兵が橋を架けてくれ、ば戦争も樂ですが、出征以來十回位渡河致しました、其度に素裸體になるので夕方などは寒くて大變です、然し私は水泳が好きで水に馴れて居るせいか別に心配なしです、之も練習した効があるのだと思ふと泳げぬ者が一寸氣の毒になります。

渡河の時は出來るだけ泳ぐ事にして居た爲め反つて一番遅くなり参つたことがあります、其の時は隊伍を離れて歩兵○○部隊の中に這入つて仕舞ひ、猶も我が部隊を尋ねながら敵陣近くまで行き、砲兵部隊を見附けて駆け出した處、敵の一斉射撃を受け壕の中へ飛込んだ——敵の死屍累々たる中へ飛込んだので一

備の傍、日夜陣地の構築に敗殘兵の討伐に従事し、昨今は我々特務兵も歩哨勤務に忙殺されて居ります。

私も益々健全です、これも全く内地皆様方の御後援の力によるものと、唯々東天を拜して感謝しつゝ、一死奉公の覺悟を固め、軍務に精勵致して居ります。

私共は一昨元旦早朝野原に參集し、遠く東の空を拜して「君が代」を三唱、○○隊長殿の音頭にて天も裂くるばかりに、陛下の萬歳を三唱致しました。然し此處戰場に於ては歳暮も正月もありません、只其の日、其の日の天候良かれと祈るばかりです此の地方は頗る不便にて、民家も殆んど空家同様、婦人もおばあさん以外には見當りません。聞けば若い者は皆遠く山中に逃げ込んでゐるとの事で、この寒空にほんとうに哀れなものです。建物は幾百年になるかと思ふやうな古い物ばかりで、電燈もなく、話に聞いた昔の日本を見るやうな感じがします。島には菜葉ばかり、所構はず豚がブー／＼鳴いて居り、夜中など吃驚致します、又野犬の多いのにも困ります。

然しこの地方も遠からず平和な春が來るでせう。先達、渡邊さんのお便りにより、同隊に運動具賣場の船木信三さんが居る事を知り、以來最も親しい戰友として、御店のことなど語り合つて居ります。

一月三日夜

寸驚きました。

壕の中をぐる／＼廻つて漸く聯隊旗の下に駆けつけました。彈丸には驚きませんが、半死半生の敵の上へ飛込んだのは一生の不覺と思ひます、だが又よい思ひ出ともなりません。

十一月十二日(北支より)

今井 彌次郎 君 (出納係)

今日廣島病院に入院いたしました。

可なり興味を持つてゐた上海も、汚い燒野原で全くガツカリ致しました、故國の山々、瀬戸内海の絶景に接した時は、思はず涙が出ました。大した事も出來ず、その上白衣の凱旋など餘り感心いたしません。

近日中に東京の方へ送られるかも知れません。

十一月廿五日

明日出發東京へ参ります。

二度見られるかどうかと思ひました東京！何んだか丸で夢のやうで御座います。では皆様によく御願申上げます。

十一月廿八日

去月二十日に手術をされ、今日迄筆を持つことも出来ず、御飯も左手で戴く様な始末で御座います。只今當地は雪が一尺餘も積つて居ります。それに時々吹雪がありますので寒さも又格別で御座います、でも上海に較べれば彈丸の來ないだけでも助かります。

一月中頃又手術されますが、負傷當時よりも痛いので参ります。今回出征に當り、三越に勤めてゐると云ふ事が、どんなに有り難さを自分に與へたか、之ほど痛切に感じた事はありませんでした。何んと感謝してよいか分りません。

他の兵隊が家庭の心配をしてゐる時、自分は呑気な三越人である有り難さ、皆様の多大なる御後援、自分の幸福をしみくと感ずる事が出来ました。

正來君(助雄、出納係員)の戦死、まだ春秋に富む身で、全く御氣の毒の至りに存じます

一月一日(新發田陸軍病院にて)

石山儀一郎君(買場係)

戰地にある者は誰しもその様子を知らせたいし、又内地の様子

泉 亮君(庶務係)

當地も寒くは候へども、今は防寒具が皆整ひ居り候爲め、餘り寒いとも思はず過し居候

先日中村利器太郎様より慰問品が参り、まことに有難く頂戴仕候 戦況報告が思ふやう出来不申残念に存候

支那人の不潔なるには全く驚き候 部落は皆土の家にて窓は一箇所のみ、家の中は臭氣鼻を衝き、片隅に便所ありて蠅の製造所と相成居候 飯などは白い所のない迄一ぱいに蠅がたかり居候 敗戦國の慘狀はまことに憐れなものばかりに候

た、かひのあれ野にいこふ武夫の
ひとみは星になにかたるらむ(衛兵に立ちて)

月かけ淡き戦線にて、しばしの暇の偶感を、御笑ひ下さい。

あたし野の支那の干草に武夫の

かけしなさに花をさくらむ

みちとせの歴史をひめし大黄河

とはにさかえむ君かみるつに

風凍る廢家にいこふつはもの、

おもひは千々にふるさとの春

(月日不詳)

を知りたいのは尙更だ。出港してから約一ヶ月にもならんとするが、全く内地の様子を知る材料は皆無だ。

皆様も新聞紙上にて、戦士達が戦場で、内地の古新聞を奪ひ合ふ記事を御覽になつたことせう、あれです。

上海上陸後、この湖州まで行軍した七日間、北橋鎮、松江、金山、嘉善、嘉興、南潯鎮と重い軍装で肩腰も物の哀れな姿になつてゐたかも知れないが、兎に角落伍もせず目的地へ無事到着したことは嘘でない。

上海から湖州に至る道路は軍工路で、二、三年前に道幅を廣くしたものでらしい。各部隊がこの一本の道路を、後になり前になりして目的地へ、目的地へと前進する、そのあとから自動車走つて来る、ホコリが一ぱいだ、顔も手も汗と砂塵で眞ッ黒だ折角生えた髭もホコリで白くなる。

山はなく田圃路を毎日々々行軍だ。宿營は街の中、それも露營同様だ、この道路上でも支那軍は相當頑張つたらしく、敵兵の屍骸が處々に轉つて居る、始めはこんな有様を見て何んとも云へない氣持になつたがもう平氣だ、軍馬の死に際も時々見たが實に哀れを感じるね。

湖州は相當の大市街だ、當分此處に居るかも知れん。では皆様もどうかお元氣で………

十二月十九日

岩本正樹君(新宿支店)

天津を出發して以來、幾百里の行軍、敗殘兵の不意打に或は糧食の缺乏に、或は晝夜を分たぬ進撃に倒れもせず、此處まで來た事は、偏に諸兄の御後援の賜と深く感謝して居ります。

白河の上流を王口鎮、沙河橋鎮、舊城と行軍して任縣まで前進し、第一回の任務を無事終了、〇〇集結の爲め今迄柏郷に滞留して居りましたが、本日の命令で、自分の最も望んで居た山嶽方面へ出發します。

愈々山西省の昔陽へ行きます。

今迄は見渡す限り平地の高梁畑を進軍して、飽き飽きして居ましたが、四、五日後には省境の山脈、萬里の長城で故國の夢を見る事が出来ませう。

十月廿八日

手紙を出さうと思つても、御承知の不精者、悪いと思ひながら書けないのだ。

北支方面のことは貴兄達の方が、新聞やニュース映畫でよく御存知だ。お知らせするやうな事もなし、又あつたとて自分には書き現はせない。どつちにしても筆不精者だ。

今、太原に駐屯してゐる。敵砲兵々舎にゐるが到る所暫壕で、中に死骸が蠟人形の様になつて重なつてゐる。

闇の誇つただけあつて、城内もなか／＼相當なものだ、兵舎も所々にある。

戦場の駐屯はのんびりしたもので、今の處不足は内地米が喰へず、毎日支那團子とボロ／＼の南京米、醬油も味噌もなく、鹽で暮してゐるが、食ふや食はずだつたことを思へば、それでも有難い。こんな具合だから、駱駝でも、驢馬でも、羊でも、何んでも食つてしまふ、それに就て闇が得意になつてゐた何萬圓とかする種羊で、陸軍でも目を着けてゐた羊を、知らないで食つて仕舞つたといふ話もある。

戦争でなくてはやれない事だ。

世の中に戦争の跡の部落ほど、凄惨なものはないと思ふ。荒れ果てた家屋の間などに轉がつてゐる死骸に喰ひ付く犬の群を見れば、實に何とも言へない、惨の極だ。

十日ばかり討伐に往つて来た。別に御知らせする程の手柄もないが、相當機關銃では脅された。小部隊でどうやら分捕つた機關銃が隊への土産だつた。機關銃といつても三八式歩銃位の重さで新式のチェッコ製、今まで惱まされたのは、この機關銃と迫撃砲だ。

一ヶ月程前に、誰か頭骸骨を銃の先にぶら下けて来て、今でも宿舎の前に飾つてある。

河北省追撃の時、又山間部落を追撃の時などを願ふと、よくも生きてゐると思ふ、人間もなか／＼此の世とは縁が切れならしい。然しいづれば上等兵になつて白木の箱で歸るかも知れな

汽船も往復する様相成、軍の酒保も設けられて段々不自由なきやう相成候

蘇州附近にては支那の子供等が、新聞、玉子、たばこ、南京豆等を籠に入れ、馴々しく我々の間を賣り歩き居候

昨今は内地の兵營生活と同様に一週一回の外出日も有之、日本人經營のおでん屋、しるこ屋へ参ることが唯一の楽しみ候去る十二月〇〇日南京〇〇鎮を出發、〇〇日に蘇州着、正月の祝杯を擧げ候

上陸以來の艱難辛苦も今は夢の如く感ぜられ候

一月十九日

萩原清四郎君 (外賣係)

思ふだに忙しい十二月、逆襲に逆襲を繰返し肉迫して来る前主に對して、大三越の皆様は元氣一杯、親切可憐を振りかざして勇躍應戦——商戦今や酣に、到る處に於て白兵戦が展開してゐる事と存じます。私達も數度の激戦に幸ひ微傷だも負はず元氣旺盛、北支の野に征馬を進めて居ります。願へば永定河の敵陣を突破してより彰徳に至るまで二百有餘里、苦闘と涙の戦友愛に感激と興奮を一瞬に織り交せて、進撃又進撃を續けて来た自分達であります。

い。

生きて歸るにしても、此の太原の鐵道では部隊の輸送は出來ない。東、石家莊か、北、大同まで七十里乃至九十里の行軍だ。戦線に出て、恩賜の氷砂糖四回、酒二回、煙草は一回一函です。天津、太原間、我々の急進、長距離行軍は我が輜重隊の新記録と云はれ、殊に柏郷、昔陽間の難關、長城山脈を突破したのは、〇〇部隊でも我が一中隊と二中隊だけだ。全く文字通り千仞の谷で、内地の谷川嶽の一ノ倉を思ひ出す。手紙を書きながら、内地の事を思ひ浮べると、元氣な貴兄の顔があり／＼と現はれて

「正樹！しつかりやれ!!」

と言はれそうだ。安心して呉れ、元氣でやつてゐる。お蔭で十二月一日から補充兵では分隊中自分だけ、どうやら一等兵になつた。

一月四日

服部光成君 (賣場係)

大場鎮、南京の戦闘にも参加致すことを得、頗る愉快に存居候現在は蘇州に駐屯致居候。當地は降雪もなく、日中は内地よりも暖く存ぜられ候

支那街にては理髮其他の商店も開業致候、上海南京間の汽車、

戦争ならでは味へぬ尊い思ひ出を後に殘して、目下北支第一線に在る私達の近況を御一報申上げます。

十月四日彰徳城を占領してより此處に對陣一ヶ月、敵陣を三千米前方に望むで緊張の日を送つて居ります。暗い塹壕、連日の銃聲、歩哨に斥候に、最前線の私達の日常勤務は相當に多忙です。

彰徳城内も陥落當時と異り自治政府等も設立せられ、行人の動作も行人の賣聲も明朗北支を謳歌するが如く、平和の裡に治安は維持されつゝあります。

私達一兵士でさへ、無辜の支那民衆が敵ではなく、暴戾なる支那軍が敵なのだといふ感を深くさせられて居ります。

寒さも愈々加はり大陸的氣候の朝夕は相當なものです、然し我々には完全なる防寒被服あり、遠く北滿の雪中で鍛えた肉體あり、酷寒何ぞ、いざ來れと待つてゐる現在であります。

前面の敵を攻撃するは何時の日か？

充分なる休養により闘志滿々、一線部隊の兵士達は張切つて居ります。

彰徳城外、此處〇〇村に於ける支那農民は、自國の軍隊に食料を奪はれて食ふに食はれず、私達に食料を求め有様、敗戦國ともなれば斯くも悲惨なものかと、木枯の音を聞くにつけても一層哀れを催し、樂土日本に生れた喜びをしみじみと味はされて居ります。

十二月八日

本多大介君 (通係)

動員下令以來三ヶ月、戦線に立つてより一ヶ月餘、お蔭様にて至極元氣よく無事に過して居ります。

此の間、敵を急追して百数十里、崑山、蘇州、武進(常州)金壇と幾多の堅壘を突破、數日にして敵の首都南京を陥落せしめ、十三日朝、北風に日章旗を翻しながら城壁に突入、我が〇〇は軍の一番乗りをなして、北陸健兒の意氣を示しました。

此の時我が將兵の喜びは眞に譬へやうもなく、皆眼に涙を浮べて天地に轟く萬歳を叫びました。

今宵月光に冷く浮び出でたる首都南京は、哀れ戦禍の痕も無慘に見るもの、眼を傷ましめて居ります。

過ぎし日を顧れば、幾度か砲煙彈雨の中を潜り、打續く雨中の進撃、寒風吹荒ぶ夜半の行軍、或は敵前の太湖を渡り半身を零下何度の水に浸して突撃し、殊に南京近くの敵兵舎占領の際は砲彈の飛來物凄くその破片を受けながら、よくもこれ迄來たものと全く不思議な位です。幸ひ當時は耳に軽い傷を負ふたのみで、南京總攻撃にも参加し得ました事を深く感謝して居ります。又或る時は、報告に赴く途中、敵に狙はれ盛んに射撃されましたが此の身には一彈も的ならず、完全に任務を果した事など實に不思議と思つて居ります。

陣地に道路に累々たる敵の屍體を飛び越えて遮二無二奮進猛撃する時は、全く自分の生死など考へる隙もなく、恐ろしさを超

皆さんには其後お變りありませんか、

村串君(甚吉、新宿支店)も、入隊されたそうですね、

死地を脱すると、店や東京からの便りが、いやに戀しくなつて仕様がな。

十六日に任務を終えて、天津の宿舎に歸りました。第一線へ往つて來ると、種々面白い事があります、支那兵を三人殺して見たが、戦地での人殺しは大した感じもないね、然しチョット痛快です。

彼等が劍(青龍刀)を振り廻しても、日本兵なんか斬れるものでないね、可笑なもんです。

敵の屍體は山となつて居ます、此の間で御飯をたべたんですよ、イヤもう一回で澤山!この次の戦争の時は、子供に頼みますよ。天津に居ては何も面白いことはありません、食堂も日本人のやつてゐるのは非常に高い、癪にさはる程高いです。唯隊の酒保のビールは安いが、この頃それも餘り飲みたくなりませんでした。支那酒!あの強いのを時々飲みます、日本酒はいつも冷………過日一人で佛租界を歩いてゐたら、(道を忘れたのです、此の時は、どうせ一度は死ぬんだなど、考へながら歩いてゐたので、………おかしくて、まだ死ねないとも)佛蘭西の兵營の前に出てしまつて、衛兵と問答したが、悲しいかな、ほんの少ししか佛語は話せない、メルシー、オールバールで匆々に別れて來ました。

晝は今でも暑い、夜は寒くなる、さりとて着る物もない、可

越して反つて愉快を感じます。そして後から堅固な敵陣を見て、どうしてこんな處へ無事に突入出來たかと、自分ながら不思議なのに感心します。

かやうな状態で我が將兵の姿など土と埃で服の色までも變り、苦闘の有様がまざくと見られますが、戦後その汚れた手で、飯を食ひ煙草を喫むのは又何とも云へない味があります。

入城以來、城内の殘敵整理や警戒で忙しく、漸く本月初めて筆を採る暇を見出しました。

數日後には又移動、〇〇鎮に向ふ豫定でお正月は行軍中武進(常州)あたりかと思はれます。

今は砲聲も聞えず静かな戦場となりましたが、支那は未だ自覺せず長期抗日を策して居るとのこと、吾々は益々緊張、盡忠の念を強くして、次期の戦闘に充分責務を果す覺悟で居ります。當地は昨今天氣良く、雪は降らないとは云へ寒風骨をつんざく様です。

先日入城式の時、二十九番の米元忠男君に遇ひました、又家具の坂本(二郎)君は同中隊でいつも話相手になつて居ります。廿九番の唐津(敏雄)君も元氣です。

十二月廿二日

(此手紙は報知新聞特派員により届けられたるもの)

堀江 傳 君 (新宿支店)

哀想なはこの子で御座いと云ひたいところ………

〇〇君へ——小言を云ふ者が居ないので、羽を延ばして居るだらう、歸つたら又小言をいつてやるよ、

何! それまで三越に居ないかも知れない? そんなこと言ふなよ………

では皆さん御元氣で、手紙を下さい、待つてます。インクも無くなつた、鉛筆で亂筆失禮!

十月十九日

堀田 右八郎 君 (庶務係)

小生負傷は十一月十九日夕方にて、二十日第二野戦病院に入院致しました。

それ迄幾度か激戦に次ぐ激戦に参加し、上海附近の戦線に於ては九死に一生を得、今日迄よくも生延びて居ると不思議に思はれる位です。

十一月二日朝より約二十時間の行軍、〇〇港にて〇〇部隊と交替、十三日朝攻撃の命令あり、約三時間の交戦にて敵は不思議にも退却、その機に乗じて進撃を開始し、道なき田畑の中を、連日の雨にぬれながら不眠不休の追撃、第二日目には煙草も食糧も絶え、玄米、芋、大根、人参などにて一時を凌ぎ、休みなしに追撃しました。途中小戦闘ありしも何れも撃退、敵の足の

早いこと、追撃する我々實に困難致しました。

我が一に對し十の敵兵を相手に、見事次から次と占領しましたが、第一線に在つては何處へ向つて居るのか少しもわからず、只命令通りに行動するばかりです。

南京に向つて進撃の途中、江陰砲臺を占領し、南京後方から揚子江向側へ渡河、敵の退路に出ましたが、小生不幸にも負傷いたし、残念ながら第一線の戦友と別れなければならぬこととなりました。

處は江陰砲臺の手前で約二日間の交戦でしたが、右足關節部に負傷、歩行出来ず、擔架にて後方に送られ、二十八日〇〇團、三十日〇〇團、十二月六日上海へ、途中は舟や自動車にて輸送されました。

十三日内地歸還を命ぜられました。此時南京陥落の提灯行列を見て實に残念でなりません。

翌十四日看護婦長殿の出動を待つて、種々御願ひせしも、出来兼ねるとの事にて、十六日まで延期し三度も御願ひせしも、遂に軍の命令と申され、致方なく乗船、〇〇日〇〇着、二十四日姫路へ送られました。御蔭様にて経過良好、昨今は歩行も自由となり、近く退院出来ること、命令を待つて居ります。

支那は未だ猶醒めず、長期抗戦とか云つて居りますが、戦争も未だ終らぬと思ひますから、再度第一線に加はる決心で御座います。

一月四日夜（病院にて）

ぜられました。

鐵道従業員は皆兵士にて、列車には機關銃を備付け、食糧その他を運搬して居ります。

此附近には殘敵猶相當に多く、一兩日中には小生等も機關銃を擔つてその威力を發揮する事かと思つてゐます。

小生等の宿營する中隊本部の屋上より、〇〇方面を望めば陣地を構築する敵の姿が見え、血湧き肉躍るを感じます。

昨日は銃を搬送して約千二百米前方に出ましたが、降雪の爲め見透しつかず、歩兵の警戒兵のみを残して宿營地に歸りました、そして何時でも出動出来るやう、巻脚絆をはいたまゝ、急造の寢臺に横臥して居ります。

今日は雪もやんで、薄日がさして居ります。此分では愈々明日あたりは、初めて機關銃射撃が出来るかも知れません。

當地の寒さは二、三日來降雪はありましたが、風がないだけ、東京より暖かいやう感ぜられます。食料品は携帶糧食の他は悉く當地方にて徴發せしもの、此町は山間に在りながら、附近一帯は坊主山にて燃料もなく、又各家の釜場を探しても木炭さへなく、古机を燃して暖を取り、炊事にも一切家財を壊して焚いて居ります。

それ爲め此便箋にも煤が落ちて黒くなるので、口先で吹き書いてゐる始末です。

一月廿一日

富塚松三君（銀座支店）

全軍の將兵も、皆様の銃後の護の聲を聞く時、寒さもなく、辛苦もなく、更に後顧の憂もなく、充分な働が出来ます。内地の皆様のお心勞に對して深く深く感謝して居ります。

諸姉様方も賣出し期間中は嘸お疲れの事せう、定めし好成绩を挙げられたこと、遙察仕ります。

私等は第一線部隊の編成を解かれ、只今は〇〇の警備に就いて居ります。

北支の明朗化も日増しに進展しつゝ、あると聞き、喜んで居ります。

今後とも、東洋平和、皇威宣揚の爲め一層努力の覚悟、よろしく御指導下さるやう御願申上げます。

十二月廿九日（平漢線高邑にて）

尾島耕象君（銀座支店）

小生上陸以來、一人の敵にも見え、先月〇〇日より去る〇〇日迄南京の北方滁縣にて、警備に就てゐましたが、〇〇日津浦線を汽車にて北上、〇〇にて守備、〇〇部隊の第一線配屬を命

大城鎮英君（受渡係）

先月お便り差上げました頃は、上海開北路の北西にある王家宅といふ處に居りましたが、其後眞茹無電臺の東方二杆迄進み、翌日又少し逆行、更にその翌日から急に前進又前進、南翔を過ぎ右折して嘉定をも過ぎ、夜を日に續いで行軍、雨中ツルツル、迂る小路や田畑を越えて太倉縣の〇〇に着き、此處に約四日間滞在しました。餘りの急前進にて食糧の配給が不能となり、鶏豚、南京米、芋等で二日間位過しました。

宿營は壊れた支那人家に藁を敷き、その上に寝るので馬のやうです。

それから又命令によつて逆行し、雨の降しきる中を泥土に足をとられながら羅店鎮、大場鎮を経て、もとの眞茹無電臺近くの〇〇に四日間を過し、更に又〇〇まで戻りました。

軍の移動中は甘いものが一切得られませんので、二日間も宿營すると、兵士から將校までがまるで子供のやうになり、羊羹など買つたべ、時には髭面の男ばかりが揃つて角砂糖をかちつて居ります、これは全く糖分缺乏から来る自然の要求でせう。部隊は今又〇〇方面へ大移動中ですが、荷物を護る爲めに各隊から十四、五名位の病人或は足を痛めた者を上海附近の一定地に殘留させて居ります、私はその殘留兵の中隊責任者として共に残つて居ります。

それは上海市政府の近くで、全部隊では〇〇名以上も残つて

居りますが又近く移動致します。

以下は寄せ書を下さつた皆様への御返事です、御名前が判明せず、書落しがあるかも知れませんがお許し下さい。

T H 様 上陸以来幸ひ元気で、足に任せて行軍してゐます。

T 様 留守宅を御配慮に預り有難う御座います。

S S 様 お蔭様でまだ感冒一つひかず頑張つて居ります。

S G 様 支那兵と戦つて殺した味はト安心といふ處ですが、敗残兵を殺す味は酔でもなめる様に思はれます。

M 様 上海、南翔、嘉定、南京も陥落、皇軍萬々歳、

S S 様 本日南京陥落祝賀の東京朝日新聞の記事を見、遠く

上海市政府の青家根を越えて……………三越の窓から出た無数の國旗を懐かしく思ひました。

(註、東朝掲載の寫眞は三井銀行の窓の旗なるも三越の窓からの如く見えしならむ)

S K 様 日毎に落ちる敵陣地。

K 様 内地を出てから三ヶ月、湯にも入れず、支那人家の

藁の上で馬のやうな宿營、是れも祖國の爲め……………

I 様 中隊一の歳嵩だが中々元氣ですよ。

A 様 戦は着々として好調、聖恩に答ひつゝあります。

S Z 様 この頃は元氣過ぎて、日焼した顔に髪が延び、少々肥つたので人違ひされそうです。

T N 様 ニュース映畫や新聞紙上では小生の顔は、とてもわ

かりません、寫眞を送つても嘘と思はれる程です、髭では中隊長になりましたからね……………

U 様 もう此頃は戦ふにも敵が居なくなりました、病氣にでもならぬやうに致しませう。

Y 様 頂戴した千人針が今では冷えぬやう腹巻となり、病敵豫防になつて居ります。

外皆々様 年末御多忙の折柄、小生は南支で日焼した鬚ッ面をあちら、こちらと忙しくつき出して居ります。

十二月十七日

渡邊源吉君 (庶務係)

御案内通り御送り下された小包、昨二月二日受取りましたから御安心下さい。

早速戦友にも分け、喜びを共に致しました。お蔭様で殺風景な陣地も、久振りに和やかな氣分に浸る事が出来ました。

實際戦地にて戴く慰問品程、嬉しいものはありません、今日は東、明日は西と流轉極まりない私達の身にとり、情ある慰問の品を戴くことは、何と御禮申上げてよいやら詞がありません。

北支に正義の駒を進めてより約半歳、悲喜交々の中に昭和十三年の新春を迎ひました。

銃後の皆様の御祈念、神に通じましてか、私は渡支以来幾度か

心下さい。

私共の毎日の勤務などお知らせ申上げたいなれど、部隊命令にて堅く禁止されて居りますので、お知らせ出来ない事を、誠に残念に思ひます。

皆々様、時節柄一層御身御大切に……………

二月三日(チ、ハルより)

加藤利三郎君 (出納係)

我が部隊は九月〇日南口に到着、最初の任務は兵站部の警備でした。

生れて始めての戦地勤務のことゝて、その第一夜の前哨は非常に緊張しましたが、無事に翌朝を迎へ、其の後は馴れるに従ひ度胸もすはり、軽い氣持で勤務が出来るやうになりました。

南口は北京を北西に距る十七、八里の小驛で、三方に岬々たる高峯連り、一方が廣漠たる平原で遠く北京に續いております。

我が部隊の到着時は戦後猶ほ日も浅く、一般住民の家屋までも彼我の砲撃、爆撃の爲め見るも無慘に破壊せられ、支那人の姿は殆んど見當らず、敵兵馬の屍體が到る處に横はつて臭氣粉々鼻を覆はしめるものがあり、如何にも激戦地らしい状態でありました。

支那の名物何んぢやいな……………と問はれたら、私は即座に次のや

彈雨の中を潜りましたが、幸ひ負傷もせず、又堪えられぬ湯の爲め、泥水さへ口にしましたが病みもせず、元氣で今日を迎ひました。

去月中、戦友九名がチフスの爲め没しましたが、これ等人々の慰靈祭が一月十日に舉行せられました時、我が身に比べて、敵彈ならぬ病魔の爲め斃れた、可愛想な戦友の冥福を祈りつゝ、一掬の涙なきを得ませんでした。

これ等の中には、一人子もあり、如何に両親が嘆き悲しんで居らるゝことかと思ふと、じつとして居られぬやうな氣持になります。

正義日本の爲め、敵將蔣介石を單身乗り込んで、打捕つてやりたいやうな念に驅られます。敵も長期抗戦を以て、日本に立向ふとか、東洋平和は誠に前途遠遠の感が致します。

然しながら私も國家の干城として、戦場に在る以上、屹度皆様の御期待に添ふやう、一死奉公の覺悟であります。

二月三日(北支より)

脇 春次郎君 (銀座支店)

先般中愚母死去に付尙又愚子出産當時も一方ならざる御厚情に預りまして、誠に有がたく、呉々も御禮申上げます。

御蔭様にて私も至極元氣よく軍務に勵んで居りますから、御安

うに答へませう。

水不足に蠅の密集、野糞の山——實にその不潔さは内地では、とても想像が出来ません。

支那人は軀を洗ふといふことを忘れてゐる、垢で埋つてゐるには一驚しました。

煙草は實に安い、口附は一つもなく兩切十本入が、どれでも五錢、定價がないのでとても懸引があります。

此處に駐屯中、我が部隊より一名戦死者を出しました、支那兵に狙撃されたとのこと、私が立哨中、目前でその屍體を焼却しましたが、家族のことなどを思ひやり暗然となりました。

南口より北へ三里、墜道の入口に八達嶺といふ部落があります支那兵が南口戦から敗走中、このトンネル内に機關車八輛を脱線轉覆せしめ、我が軍の前進を妨害したとのこと、これが爲め二十日近くも列車不通となり、前線への輸送は自動車又は馬による輻重車の力に待つより外手段なく、我が軍は實に死ぬ様な勞苦を重ねて、この機關車を撤去したのであります。

兵站部に戻つた輻重隊の兵士達が、一週間も煙草にありつけず、けつそりした顔に煙草をねだる有様は實に氣の毒でありました南口警備約二週間にして、それより約二十里先の沙城驛に於て鐵路の警備に就き、此處も五日間にして宣化に着任したのであります。

宣化は察哈爾省有数の都市で日支の戦火より免かれたのでありますが、日本軍の侵入により商店も殆んど營業せず、何となく

私も愈々元氣にて其任に邁進して居ります。
十二月十日

加納 幸藏君 (計算係)

上海と南京の地圖を御覽下さい。

現在南京の南十二里程の處〇〇に居ります、明日南京へ移動します。氣候は春の如く長閑です。十二日迄は南京攻撃の砲聲が聞えました。此處は縣城のある田舎町で、殆んど砲彈や爆彈で破壊されて居ります。

野戦病院には南京攻撃軍の勇士〇〇〇名が入院して居ります。柳川中將を軍司令官として、上海の背後を衝くべく抗州灣へ上陸した部隊は、金山、嘉善、嘉興、湖州、廣徳、溧水などを攻略して南京へ入城しました。上海より百餘里、坦々たる街道を攻め上りました。其後を我が部隊は敵の死骸を踏みこえて行軍しました。

是より先、金山衛攻撃は案外あつさりいつたので、我が部隊は暫く不要になり、お蔭で一ヶ月も船内生活をし〇〇砲臺の傍にも停泊、十一月〇〇日上海の虬江碼頭に上陸して初めて支那の土を踏みました。

揚樹浦に一泊、佛租界へはいれないので迂迴して南市へはいりました。

荒廢した氣分は否めません。

今後何時何處に出動するか薩張り分らず、内地からの通信も昨今漸く手に入る程度で、新聞もなく現地の様子さへ皆目見當がつきません。

支那民家の土間にランプを据えて、ここまで書き終ると丁度人員點呼になりました。

何卒三越の皆様方にも、加藤は元氣一杯で働いて居るとお傳へ下さい。

では！これで失禮致します。

九月廿五日

加藤 確治君 (庶務係)

皆様相變らず御元氣にて、銃後の三越をお護り下さる由、此上もなく喜ばしく存じます。

戦地にては手紙の輸送も思ふやうにゆかぬと見え、私共今日になつて一度に澤山のお便りを戴きました。かやうな次第で、この葉書も來年になつて御手許に届くかも知れませんが、御許し下さい。

こちらの雨は降り初めると、どうしても半月位續かないと止まないで随分困らせられますが、此頃は毎日晴天です、そうして日中でも耳の落ちるやうな涼しい風が吹いてゐます。

佛租界は電燈がついてゐるのに、日本人街の方は燈火管制で眞闇です。月初めに一部は〇〇へ、我等百名餘はトラックを連ねて南京街道を北へ一百里〇〇に來たわけです。

途中は激戦の跡も生々しく、支那兵の屍體が澤山路傍に横たはつてゐました。

百里の間は全部田ばかりで有名な南京米の産地です、水利の便がよく家々の裏から舟で行ける様になつてゐて、南船北馬と云ふ意味がよくわかりましたが、その反面にはこのクリークの爲めに我が軍の苦戦の程も思ひやられます。

十二月十五日

〇〇日始めて虬江碼頭に上陸いたしました。

揚樹浦に一泊、佛租界通過不能の爲め大迂迴して南市に到着、國立の中山醫院跡へ第一回の病院を開設し、楓徑鎮、嘉善の戦鬪に於ける負傷者を收容しました。

十二月〇日、先發隊〇〇名に加はり、金山、平望鎮、下泗安に各一泊、四日目に溧水着、第二回の病院を開設して、南京攻撃に参加した第〇〇團の傷者を收容しました。

十二日夜半、南京陥落の爲め入城の命を受け、先發隊は十三日朝出發しました。小生は十七日に南京へ乗込み、中央政治學校にて第三回の病院を開設しました。生々しい戦鬪の中にて衛生隊不足の折柄、最初に開設した豫備病院なる爲め、野戦病院よ

り送致される患者引きもきらず、我が部隊員八十餘名にて〇〇
〇餘名の患者を收容、不眠不休にて活躍致しましたが、軍醫も
看護兵も手が廻らず、不幸永眠した患者もありました。
其のうち軍醫部長、軍司令官、師團長等の御見舞もあり、〇〇
〇日には残餘の部隊到着、漸くほつと一息つきました。この頃
より漸く病院船との連絡もつき、患者の後送も出来る様になり
ました。
南京城内にて新年を迎へ、ほつとする暇もなく、三日夕刻兵站
病院と交替、四日引繼、五日早朝トラックを連ねて上海へと出發
し、途中無錫に一泊、一ヶ月振りにて又上海南市に参りました。
今度は病院を開かず命令を待つて居ります。凱旋か？新方面へ
進出か？不明です。
南京では酒保も不充分で煙草にも困りましたが、上海では不満
足ながら差當り食料品にも困らなくなりました。
(一月十七日着信)

加久田謹治君 (庶務係)

當地は昨今零下五度位の日が続くかと思ふと、陽光麗かな小春
日和も續き、北支戦線の兵士に比較して、如何ばかりか幸福に
恵まれて居ります。

一ヶ月餘に亘る〇兵站部〇〇廠警備も、去る三日無事交替とな

どのやうな長期抗戦にも、飽迄應戦、東洋永遠の平和の爲めに
所期の目的を貫徹すべく、斷乎たる決意を以て軍務に精勵致し
て居ります。

一月廿五日

私も御蔭様にて皇軍の一員として、元氣よく軍務に精勵致して
居ります故、乍他事御安心下さい。

本日は舊正月のこと、て、當隊に收容致して居ります捕虜兵達
は、各自各様に紛裝致し、音楽につれて面白き手振り身振りの
踊を、私達に觀せ喜ばせて呉れました。初めて觀る異國の踊に
皆大騒ぎにて見物致しました。

只今は當地方も、治安は維持され、勤務もそれほどではなく、
毎日異状なしの日を繰返して居ります。

寒さの折柄皆様の御壯健を、遠く戦地より切に御祈り申上げま
す。

二月一日

貝瀬守一君 (新宿支店)

十一月廿四日附の御慰問品、一月十一日有難く拜受仕候 早速
開封致候處御念入りの品々にて、厚く御禮申上候

り、只今は大隊本部附として勤務致して居ります。
此處は南市〇〇〇の跡とて高層な建物に諸設備も完全し、只今
の處餘り不自由も感じません。

南市は大同政府成立以來、城内は勿論、廢墟と化した街々にも
陸續として歸來する避難民多く、日毎に賑かになつて参ります。
此處より自動車にて佛租界を通過し、上海日本人街まで約二十
分を要します。最近では〇兵站部の命令により將校一名、兵四
名にて一週間に二回位巡察に参ります、そうして日本人街の最
も股賑を極める地域に於て兵士の軍紀、風紀を嚴重に取締つて
居ります。

此邊は事變前と更に變りなく、戰捷氣分横溢し、寧ろ以前にも
優る繁華にて、各商店も内地以上に繁昌して居ります。

かゝる繁華の中にも、相變らず血腥いテロ事件は、未だ其跡
を斷たず、先日約五十名の捕虜を私共五名にて引卒、柳川路
新工事業中、私の傍に居りました日本人通譯が、何處からと
もなく狙撃されて首貫銃創を負ひ、一發の下に倒れました。

直ちに憲兵隊より出動、取調を開始致しましたが、佛租界方面
より射撃したものでなく、流石に此時は驚きました。

昨日舍衛兵を一晝夜勤めましたが、隣接建物に〇〇隊〇〇隊が
前線より到着し、軍馬の嘶き、勇壯なる軍靴の響などで夜中の
歩哨もなかく賑かでした。

私共は何れも銃後の御熱誠を痛感致し、安心して皇國の爲めに
働けることを無上の喜びと致して居ります。

目下來安縣にて警備致居候 部隊は各所に〇〇隊又は〇〇隊つ
警備に就き居り、前進は一時停止致居候

來安縣は城壁に圍まれたる小都會にて、我が軍の入城するや、
歡迎頗る良く、商店も只今は大部分開業致居候 我が軍の經理
室其他には、百姓が野菜類、肉類など澤山に運び居候 去る十
日には東京日々新聞社の自動車が初めて此地に参り、大勢の兵
士が之を取圍みて「何かニュースはありませんか？」と問ひか
け居るを見候 〇〇本部は今迄四十餘日の追撃戦にて何も届か
ず居候が、昨今は毎日手紙と慰問品が多數に到着致居候

津浦線は北支方面より、機械化部隊は濰縣より前進、我が部隊
も亦約四十里北方に進出致候 兩方の連絡も近きこと、存候

一月十一日

午前三時、攻撃命令下る。準備完了、出發、折柄降り出した雨
の中を前進する。間もなく棉畑の中を散開して敵に肉迫し、追
撃又追撃。午後十時宿營。

翌くれば又前進追撃、雨は連日連夜降り止まない、揚子江沿岸
の田畑、畦畔は膝を没する泥濘となり、而も粘り着くので行軍
の困苦は募るばかり、軍馬はばた／＼と倒れる、馬を扱ふ兵士
の悲痛な叫び聲が、彼方此方から聞える。荷物を積む馬がそ
の儘クリークの中に倒れ、或は泥田の中に埋まり込むで、如何
とも動かなくなる、「全く支那兵よりも困るのは雨だ」と兵が嘆

息しながら訴へる。
敵は退却の際、必ず橋梁を落して逃ける。之が爲め、深いクリークは渡るに渡れず、僅か二、三百米前進するに半里も一里も廻り道をせねばならない。直線三里位の道を行軍するのに十里以上も歩くことになる。

逃ける敵を追撃して、夜半一時頃漸く宿營し、まどろむ間もなく三時に出發したこともある。斯うしてゐる間にも、飯は炊かねばならぬし、全く寝る暇とては一時間もない。

右の敵を攻撃すれば、今度は左の敵と、少數の兵力を以て次から次へ攻撃前進しなければならぬ、殊に敵は塹壕に、鐵條網に、更に前方から、側方から、又高地から、盲滅法に射ち出す、地形上からしても、我は不利の位置に立たねばならぬことが多い。斯かる状態だから、勢ひ犠牲も多くなるのは、眞に残念である。

十二月〇日凹凸に石を敷いた街道を、軍靴の音も勇ましく行進する一隊は、今や鎮江を後にして揚子江を渡るべく、渡船場へと急ぐのだ。

街の家々は砲弾や空爆により打壊され、或は焼け落ちて見る影もない。右方には數條の黒煙が上り、左方も紅々と盛んに炎焼中だ。

前方十數戸の家も滅茶々に破壊され、屍體や電線や電柱などが散亂してゐる。坂道をだら／＼降ると、立派な三階建の家が、

今日の宿營豫定地水口鎮も間近になつた。行軍は六軒となり七軒となり、遂には駆け足となつて敵陣に突込む。此處も大抵の家は焼失して宿營する場所もない位、狭苦しい物置のやうな穢ない家に大勢でゴロ寝をした。

いざ飯炊きとなつても井戸がない。クリークの水は相變らず枯く濁つてゐる、仕方がないので田の水を汲み取つて来て飯を炊く。副食物は何もない、鹽をつけて食ふ、藁の上に疲れた身體を横たへて、いつの間にか眠つて仕舞つた。

午前三時……敵の夜襲だ！

皆跳ね起きて飛び出す。朝飯など炊く所ではない。小銃、追撃砲の音が盛んだ。

敵は橋といふ橋を皆落して退却した。追撃、追撃、〇〇部隊は敵の正面に、我等の部隊はその右側に出で、敵の退路を断つた。

とす。
早曉より夜半にかけて數日間の連続行軍で、皆全身綿の如く疲れてゐる、然し敵を全滅せよと止まずの氣概は凄い。數へきれぬ程出来た水疱に痛む足を踏張つて前進する。

敵の側面に進出した時、一弾、黒煙を立て、炸裂する、續いて又一弾……我が大隊は地形を利用して敵に肉迫し、更に散開して攻撃を續ける。山の稜線の一つ又一つ越える、敵弾は益々猛烈に飛んで来る。

此の時二、三間右の方で敵弾が破裂した、と同時に自分は右腹を強か撲たれた感じがしたが、あとは痺れてゐる、アやられたな

少しも戦禍を被らず、一枚の硝子も破れずに、實に落付いて建つてゐる。そうしてその室内からは、朗かなピアノの音が洩れて来る、見れば英國々旗が朝風に翻いてゐる、……之は全く何んとも云へぬ戦場の異風景である。

第四次の補充を終えてから、揚子江を渡つて揚州に向ふ。

道路の兩側には、敵の屍體が恰も散兵の如く無數に轉つてゐる。鐵帽、銃、手榴彈、追撃砲までも此處彼處に散亂してゐる。

多くの家屋は焼け落ち、灰燼となつた家の端で、老婆が焼残りの釜で、飯をたいてゐるのも哀れだ。揚州から六合へと進む。途中は坦々たる平野で、一面に青い麥畑だ。

行けども行けども畑は盡きない。山の稜線から稜線まで、一里か二里を過ぎれば又廣々とした畑だ、その中を進む勇ましい我が軍の姿はさながら畫の如く、我ながらこのよい景色を十六ミリにでも収めたらと思つた。

やがて廣漠たる大地に日は暮れて、牙え渡る月光に、夜の景色は亦格別だ。遙か前方には敵が火を放つたのか、數條の火炎が上つてゐる。

行けども行けども道は盡きない『此處はお國を何百里、離れて遠き滿洲の……』勇ましい軍歌が聞えて来る。

いつしか背囊の重みも忘れ、皎々たる月光の下、軍歌に和して進軍する光景は、實に千金に値する。

……と思つた、横腹を撫で、見れば、服には指の遺入る位の穴があいてゐる。然し幸運なるかな、全く僅かの負傷で其儘前進を續けた、後から看護兵に藥をつけて貰つて、猶も前進、夜中敵陣を襲撃して遂に之を退却せしめた。

身にしみる寒氣に、山の中で一夜を明かした。睡眠不足で疲労が加はるばかり、行軍中ともすれば倒れやうとする者もある始末だ。

翌早朝又出發、漸く津浦線沿線の八里點に達した。更に二里を行軍して、夕刻滌縣に入城した時は、何んとも言ひ知れぬ喜びが湧いて來た。

川名 浩君 (仕部長 附)

去月八日突如命令あり、上海を出發抗州攻略に向ひ、往復百五十里、五十日間、殘敵掃蕩も終り、〇〇日無事又上海に戻るこゝとが出来ました。その間、寒氣と泥濘に悩まされ、各地で敗殘兵と交戦致しました。

元旦は抗州市に於て迎ひ、遠く故國の方を拜し、天皇陛下の萬歳を高らかに唱へました。

上海を離れると、内地よりの音信は全く断れ、本日五十日間の書簡及び慰問品等を渡されました。

一月廿五日

後方通信が出来るとの事で、漸く支給された、たつた三枚の葉書……

小兵も至つて元氣、御安心下さい。上海の西南方二十里ばかり〇〇市の焼跡、東京の大震災後の様な處に、もう十日位居る。二、三日すれば前進だ。此地を後の部隊に渡して南京迄八十里もあるか。まだ樹木の葉も緑に、天氣なら内地の十月下旬頃の暖かさだ。

此處まで来る八日間の行軍は毎日雨と悪道路、泥の塊の様になつての難行軍、こゝで二回瓶の中の湯に這入つた。上陸以來一回も這入らないものもあるよ。

二、三日、庶務の松本源藏氏に逢つて、出納の者が上海で戦死したとの事を聞いた。

(註、これは正來助雄君の戦死にして、今井彌次郎君は右手拇指に負傷せり)

上海と云へば今井君だが、事實とは思へない、ほんとうですかと聞いても手紙も貰へない、全く不便だ。事實とすれば實に残念だ、俺が二人前やる、俺の刀はよく斬れるぞ。

これから又露營の草枕を続けるのだ。糧秣補給更になし、全く經理官は御苦勞だ、毎晩十二時前には寝られない、寝ると云つても唯のゴロ寝、これで身體がよく持つ、全く不思議だ。端書が手に入らないので年賀状も出せるかどうか……悪しか

のを御目にかけます。

中華民國已到了存亡的關頭！

中華民族要誓死爲自由而戰！

要國家不亡祇有一致抗戰！

誓雪國恥！誓復國仇！

精誠團結！萬衆一心！

人人負起救國的責任！

救國不分老少！不分男女！

服從革命領袖、最高統帥！

小勝不可驕矜、小挫不可灰心！

爭取最後的勝利！爭取中華民族的獨立自由！

軍事學校とも見らるゝ建物の入口には

忘母恩勿忘九・一八奇恥大辱

と大書してあり、

國家存亡在此一戰

等各所の壁に物凄く大書してあります。

小學校の教科書國文、地理、歴史等、何れも排日的美文麗句が羅列してあります。斯くして小學生に先天的に抗日を注入してありますから、之が矯正は非常に永引くことかと存じます。

この外運動場、學校、集會所等、苟も人の集合する場所に於ては、國家總動員の抗敵氣勢を擧げ、軍事的に團結し、以て強力なる軍隊の養成、後援の強化を計つて居た有様が窺はれます。孔子を祭る寺院「至聖先師孔子神位」を中心に、古代偉人を祀

らす。

(十二月十九日着信)

當地は先づ東京よりも暖かいと申してもよいかと存じます。外出に外套を着るのは雨の日位のもです。去る十二月廿九日に三、四寸雪が積りましたが、その後引續き毎日曇天にて幾分冬らしく思はれます。

二月ともなれば「過了二月漸々熟了」だと、土地の人々は申して居りますから、日本の嚴冬二月頃當地では漸次暖かくなるらしく、この點は北支や滿洲に居る軍隊に比し非常に恵まれて居ります。此處湖州は太湖中央の南方に位し、人口十萬餘の町です。但しそれは戦前のことで、現在は一萬も居りません。皆郷下(在)へ避難して居ります。

然し近頃は毎日歸來する者頗る多く、人口の増加も驚くほどですが、町の食物は殆んど食ひ盡された爲め、物價高騰し、七里も十里も遠方から野菜、鶏卵、鮮魚等を賣りに来る有様です。尤もその鮮魚たるや、何れも不味くて駄目です。(白魚、草魚、蝦、鯉、鱒等で、白魚は鱒に似てゐる爲め軍隊では支那川鱒など申して居ります。草魚は鯉にそっくりで、頭部が胴位大きく髭がなくて丁度日本の鯉のやうに頭も尾も同じ位の大きさです。鱒は支那鱒など、云ひます) 次に彼等の排日抗日標語、これは浙江省吳興縣抗敵後援會のも

る寺々まで軍事教育場となり、又學校其他個人の家まで殆んど我が空爆を逃れる爲めの地下避難所を設けてあるには驚きました。

近頃上陸以來初めて電燈の下で暮せるやうになつたと思つたら敵の飛行機がちよいと悪戯をするので、今日から燈火管制をして居ります。大した事はないが警備隊からの註文で、必要以外の燈火を消して居ります。

上海、南京間の食料は殆んど費消し盡したといふも過言でない位で、爲めに夜分敗殘兵が町へ出て来て食物をあさつて居ります。軍の倉庫へも泥棒が這入る位で、戦線より相當離れた地點までも食料が缺乏して居ると見えます。

遠く郷下から野菜を船に満載して来て、市場へ賣らうと思つたら、其の市場は皇軍の馬繋場に變つて居つたなどのナンセンスもあり、勿論彼等は支那軍大勝の新聞を見て来たものらしく思はれます。南京近くでは臨時傭の兵隊さんが一寸用達に往つて居る間に、自分の本隊は撃退され、それを知らずに我が軍の占領した暫壕へ歸來するものなどあり、又皇軍が焚火をして暖を採つて居る處へ、こそくやつて来て同僚と思つて火にあつて居たなど、まるで嘘のやうな話もあります。

一月十六日

金子三郎君 (吳興係)

何にしろ毎夜の夜襲で、晝間寝て置かないと、夜間敵の手榴弾でつぶされちまふから、手紙を書く時間も節約して居るんです。それで前便のやうな變てこな分割郵便をでつち上げちまいました。

我が土肥原部隊の平漢線は、もう随分穩かになつちまいました。まだ南京方面は相當なものらしいですね。簡単な戦況ニュースが一ヶ月に一度位はいるので、我々も少々位は知つて居ます。我々の仲間も相當にやられてゐる、殊に補充隊では僕と一緒に來たばかりの人も、二名戦死しました。

我が○小隊は北支の戦鬪に未だ戦死者を出さない小隊です。年中後方にばかり居るのかと云ふと、さうでもない、彰徳城南門攻撃の際なんか、尖兵小隊で中隊の先頭に立ち、負傷者も出さず、却て後から來た○小隊で負傷者が出來たやうな譯です。

只今盛んに銃砲聲が聞える。一里位の所らしい、今晚位は來ないで済んでくれるやうに、神様へ御祈りをしてゐませう。今夜寝られないと明日が辛いから……夜間は逆も緊張してゐるけれど、晝間はほんとうに呑氣な所です。

住民も段々なつて參りました、今迄何處かに隠れてゐた女子供、若者等も日一日と多く歸つて參ります、北支の明朗化も時日の問題のやうです。敗殘兵にはもう大した事は出來ません、又我々がさうはさせません。

先刻の銃砲聲は河北省と河南省境の河畔、河南省側にある村落に、約一千の敵が來襲、今○○隊が交戦中とのニュースがはい

した。○隊長の話では部落民が來て匪賊が三百人程居るから直ぐ來て呉れと云ふから、討伐に行くのだ、行程は三支里（一支里は六町位、六支里で日本の一里になる）位との事だ。山を越え谷を涉り、どん／＼前進するばかり、もう日本里程の二里位來た筈なのに、鼠一匹も居ない、人家などはすつと遠くの方だ。それでもまだ前進だ、水の涸れた谷川を一里位進むと今度は山に懸り、之を越えたら又谷だ。

もう皆が厭になつてしまつたが、命令だから仕方がない、月明なので時計を見ると、もう午前一時だ。やがてその附近で一番高い山へ登り出した、山ならそんなにひげを取らないぞと、元氣を出して登る、途中五、六回休んで二時半頃やつと頂上に着いた。

何んだか變だ、通譯が盛んに尋ねて居るが、案内の支那人、なか／＼はつきりしない。

そのうちに一寸した崖の所へ來たら、案内の支那人二名ともヒラリと飛び下りてどん／＼行方不明……

高い山の頂に残された我々こそ、いい面の皮だ、仕方がないだら／＼と轉んだり起きたりしながら下山、月も西に傾いてしまひ、途中何時匪賊にやられるかと。びく／＼もので、朝の六時漸く宿舎へ辿り着いた。

足は痛むし、腹はへるし、よくも歸つて來られたと思ふ位だ。正午まで眠つて又出發、十二里の道を行軍して、途中苦力の御世話になりながら、武安へ夜半の十二時頃へたばり着いた。

りました。我が小隊も又今夜は眼を丸くして居らなければなりません、一里半位の所ですからね。

猫（註、金子君の綽名）も戴いた樂譜を見てバスを出しながら鐵砲を抱えて歩哨に立ちます。

カサツと音がすると二十分間位、無念無想の境地でその方を睨め、一生懸命、鼻をかいて居ります。

十一月廿七日

我が大隊は師團命令で、西方山地へ討伐に行くことになつた。

十一日の午前一時、武安○隊本部前に整列して出發、五里位の豫定がどうしてなかく、目的地に着かない、朝食を済ませ、晝食も食べたが、まだ行軍だ、もう歩くのが厭になつて來た。夕刻四時頃、漸く河上の小部落（河南省武安縣南容村）に着く、これまで十里餘、やれ／＼と汗に濡れたシャツを着換へる所ではない、飯の仕度や寢床の用意だ。寒いのでぶる／＼震へながら飯を食ひ終る。

今日の行軍は河沿ひを來たので、石ころの上ばかり歩いたから、とても疲れた。分隊員十名よく重なり合つて眠に就く、午後六時だ。

暫くすると、小隊長が飛んで來て、みな起きろ！と云ふ、眼をこすり／＼起上つた、まだ夜の八時半だ。直ぐに銃と彈丸を持つて整列、靜かに足音のしないやうに出發

こうなると全く歩いて居るのでなく、よろけて行くのだ、内地なら早速何かに乗つてしまふのだが、此邊では何もなし、落伍すれば生命はない、泣きツ面に蜂だ。

歩兵は戦鬪がなければほんとうにつまらない。例令少々でも彈丸の音がすれば何とか元氣も出て來て動けるのだけれども……先づこんな具合で武安も無事らしいが、月末には黄河の方へ攻撃前進するらしい。

（二月十八日通信の一部）

春日 修君（吳場係）

南京陥落の節は、擧店一致の大提灯行列を催され候由、當地にては日増しに歸順せる支那民が特有の爆竹を鳴らし、古風なる樂器にて囃し立てつゝ、高脚踊り、それに續きて小學生を先頭に旗行列等有之、皇軍は部隊行進を以て夫々城内に集結し、萬歳を三唱して慶祝の意を表し候

昨今の戦況に就ては祖國の皆様の方が、却てラヂオや新聞紙上にて詳細御存じと思はれ候間茲に少々脱線致し、鬚鬚の兵隊さんの或る一日を御報告申上候

朝七時（内地とは正に一時間の差）起床、麥畑にて點呼、遠く祖國の空を仰ぎて遙拜、軍人勸諭捧讀、體操、朝食をれより特種勤務者の外は警備に就きながら演習又は行軍にて一日を終る

日支親善の一例を挙げれば……
我が軍の炊事場に苦力二人和上と貴子、和上の娘にて當年九歳の春之(母親なき一人娘)が私共が土塀を背にして洗濯をして居ると、自分の上衣を持参して盥(之は支那の瓶鉢)の中に浸し、日本式洗濯の眞似をする。

(通常支那婦人は纏足を外股にし、川邊にて碇の如く叩いて洗ふ)

餘りのいちらしさに之を手傳つてやり、屋根に登つて樹の枝から枝へ繩を張り乾くやうに吊してやると、小さな手を前に合はせて謝々と禮を言ふ——國際洗濯風景!

残飯を與へると非常に喜んで、それに白菜を入れ鹽で調味したお粥を拵え、内地の井より大きいのに入れて路上で立喰ひをする、御婦人でも同様、一寸珍景です、そして量は二杯から三杯是亦驚入ります。

賣子、ホ、デー(結構の意) トントンマイデー(皆賣る)

兵隊、カンカン(見せろ) ホワイラ(悪い悪い)

賣子、ブーホワイラ(ホ、デー(悪くはないと辯明する))

兵隊、トオルセン(いくらだ)

賣子、スウコ、イモセン(四ケ一毛錢、内地の十錢)

兵隊、シヨウト、シンジョウ(少し進呈)

賣子、ボコベント(駄目々々)

など、立去る様を想像して下さい。四ケ十錢は餉のない支那満頭のことです、内地の玄米パンのやうなもので形が鍋獨樂の

様です。

物資缺乏の當地に於ては、盛んに買喰ひをする。

この満頭屋の主人が眼病で困つて居るのを知つた戦友が、何處かで拾つた支那眼薬を與へたら全快して、以來數回に亘り二、三十錢位の満頭を持参する、斯様な律義者もゐる——日支親善は眼薬から!

十二月十九日(北支より)

つはもの、若水汲むや大黄河

黄河河畔に立ちて濟南入城の機を待つて居ります。

本年も相變らず御願申上げます。

元旦

元旦より歩哨に立ち、洵に意義ある新春を南支の一角に迎へて、遙かに祖國の空を仰ぎ、謹てみ年頭の祝詞を申上候

只今河南省彰德(私共が第一回の補充兵として始めて戦闘に参加、占領したる地)より約〇里離れたる部落に、新設の〇〇〇と砲兵隊の警備に任じ居候

銃砲聲の裡に日夜立哨し、時に便衣隊、敗殘兵等を捕えて萬全の警備に餘念無之候

彰徳城内は親日系の支那人が日増しに歸順し早朝より呼聲も高

く行商致居候 彼等は商賣上手と云はれ居り、ねつくく何時までも頭張り通して賣る様は大いに我々も學ぶべきかと存候

城内駐屯の皇軍兵士は、支那松(葉が三本ある松)と馬糧の葉にて注連飾りを拵へ、國旗を立て、お正月を迎へ候 御馳走は腕自慢のお手製料理にて、一同舌鼓をうち嬉々として疲勞も忘れ居候

又近日中に山嶽地帯に向つて前進する豫定に御座候

十三年元旦

唐津 敏雄 君 (食料品 賣場係)

現在は上海より三十里の常熟に居ります。十一月〇日上海上陸真茹より蘇州河を渡つて敵を追撃、我が部隊は〇日午後四時七寶鎮を占領致しました。

敵の逃足の早いことは、全く新聞の報導以上ですが、皇軍の追撃も亦頗る速く、夜間追撃中に逃ける敵兵が我が軍を支那軍と間違ひ「快來々々」(早く來い)など、叫びながら並んで前進、夜が明けてから吃驚して逃出すといふ面白い事もありました。

〇〇日七寶鎮を出發、又元の道を通過して崑山に向ひ追撃しました。我が隊は南京入城まで常に翼側部隊で、道路もない所をクリークに並行して進むので、地圖の上では一里か二里の所を、七、八里も前進しなければならず、崑山に入る前日には、僅か

幅五十米位のクリークの爲め、眼前に町を見ながら、一番乗りは他の部隊にしてやられました。

此の日は渡橋中一本橋が折れて全身水浸しとなり、その夜は裸體で寝ました。

〇〇日崑山出發、蘇州に向つて進撃、十九日蘇州に入城致しました。

超えて〇〇日太湖畔の洞杭橋と云ふ部落に到着、此處にて常州の背後をつくべく、太湖横斷の準備を致しました。

〇〇日、敵前上陸の用意も怠りなく、午後八時乗船、翌午前三時半頃太湖を横斷、對岸の洋溪鎮附近に上陸しましたが、水邊約一千里の間船も通れぬ程蘆が繁茂してゐる爲め、全員水に飛び込み、首までもつかつて、午前七時半頃、漸く丘の上に登ることを得ました。

この上陸は全く成功で、敵は虚を衝かれて驚いたらしく、遂に陣地を捨て、逃げ去りました。

〇〇日は和橋に至り敵の退却するのを迎へて全部やつつけました。

十二月〇日土橋を通過、午後三時半南京の東方約五里の地點で敵の第一線と對峙しました。〇日午後五時半より移動開始、終夜行軍を續け翌午前九時、漸く南京の城壁の見える地點迄進出しました。

此處から南京城迄約一千里、愈々激戦の幕は開かれました。我が部隊は地雷を避けながら紫金山からの側射を浴びて前進、

十一日夜半には中山門と光華門との間の凸角に到りましたが、クリークと城塙の爲め前進すること能はず、不得止十二日中は渡河準備をなし、夜間より攻撃に移り、遂に十三日未明南京城内に入ることを得ました。

此の間、支那米と支那味噌にて飢を凌ぎ、一日八里——十里の前進を続けましたが、幸ひ身體には異状もなく、思ふ存分に働くことを得ましたのは、全く神佛の加護と皆様の御力に據るものと存じます。

十二月〇日南京出發、一月〇日現在の地に到着、初めて日本米にありつき内地からの御便りにも接する事が出来ました。早速手紙を差出すべきでしたが、中隊の炊事係長を命ぜられ、毎日二百人位の食事を、罐詰や乾物ばかりで作り、五人の分隊員と共にキリ／＼舞をやつて居りますので、遂々失禮致しました。

此頃は漸く二つの釜で四斗の飯を炊くのも一人前になりました。一食の味噌汁には十五キロの味噌を使用しますので、なか／＼大變です。

一月十四日夜

粕谷菊松君（庶務係）

謹而非常時下に迎ふる新春を壽ぎ奉る

果しなき平野、揚子江の流域、南京の對岸、來安縣水口鎮の一角より遙かに貴家の萬福を奉祈候

戰捷國の軍隊が敵地深く駐屯して、翻騰たる日章旗の下、威風堂々と迎ふる新春を御想像被下度候

小生出征以來御蔭を以て數度の戦闘にも無事今日あるは、實に銃後諸氏の熱誠なる御後援に據るものと深く感謝罷在候

一月元旦

神長忠二君（新宿支店）

かくて三日の明治節には、早朝、輸送指揮官號令のもとに、一同君が代を齊唱、皇居遙拜、聖壽の萬歳を三唱、御祝ひの赤飯を戴きました。

〇〇島内に二日間碇泊し、愈々目的地向つて前進、六日夜よりは波浪も相當高く、船内の歩行も泥酔人のやうでした。

七日朝杭州灣に至り、多數の僚船と共に碇泊し、遙かに敵地を望む。翌早朝、友軍の飛行機二、三編隊にて上空を警戒せるもの、如し、やがて陸地より黒煙濛々と立昇る、敵陣に火災を起せしものか。今日は風強けれど快晴です。

昨日は寸暇を得て、石井隊長に呼ばれ、船長を始め船員指揮の方々の前で、大膽にも揮毫しました。それは「八風不動吹」と「萬歳神盛丸」と揮毫したのですが、「八風」の方は船長室隣の

會議室の壁間に懸けて下さるそうで、入隊以來初めて書道を満喫することを得て、道の有難さを今更の如く感謝致しました。上陸も間近と思ひます。ではこれで……折あらば早々敵地の状況もお知らせ致します。

十一月八日朝船中にて

十一月廿六日、上海〇〇碼頭に上陸、以來市政府南方近く滞在、十二月三日出發、日夜強行軍を續けて、百三十餘里を踏破、十二月十四日南京に入城、無事任務を果して、今は上海と南京の間〇〇に於て任務に就いて居りますから、御安心下さい。川俣清司君（新宿支店）應名の葉書を、昨日現地で拜受しましたが、今日同君は當隊に來られました、奇遇と云ひますか、同じく本部附となり、今日より起臥を共にすること、なりました。

（一月中旬着信）

川俣清司君（新宿支店）

太湖の南西にあたる長興といふ町まで、上海から行軍して参りました。

途中は、僅かに爆破を免れた民家に宿泊し、或は露營に一夜を明かすなど、困苦そのものでした。本隊は遠く南京まで攻め入

り關東健兒の名を轟かせました。私も感冒一つひかす元氣益々旺盛で、軍務に精勵して居りますから御安心下さい。累積せる支那兵の死體も、今では一寸も氣にかゝらず、平氣で食事も不寝番もやつて居ります。

十二月廿一日

新春の御挨拶を、こゝ南支の戦陣より差上げるのは、洵に感慨無量で御座います。

〇〇殿には其後溢る、ばかりの御元氣にて、越年なされた事と御慶び申上げます。

私も中隊本部附になつてゐるので、お正月料理も十分戴き、しるこや雑煮、さては口取料理まで、内地のそのやうに三ヶ日を送りました。

戦争も漸く終局に近づいたらしく、私達も本部隊と同一地域に宿營中です。格別の御配慮を戴いてゐる小生の兄とも、直ぐ近所とて再三會出來、先づ上々吉です。

一月四日

新聞記者氣取りで出征した僕も、戦局が稍々小康を得て來ると、ネタが盡きてしまひ、遂内地が戀しくなります。人情風俗相似通つた支那に居ることはさして苦勞でもなく、如何なる長期戦

にも堪え得る自信ができました。
小生の部隊を御知らせするのが遅かつたせいか、どちらからも音信をいたさず、淋しさ一しほですが、内地で考へる程に決して心配したものでなく、暢氣であるので、髭も延びた。各所に統制のとれた治安維持會が出来てゐるので、つまらぬことは出来ぬ。軍紀の厳しいこと内地と毫も變りなし。内地も今頃は大雪でせう。こちらも厚氷が張る、朝は眞白な霜です。

終日行軍に疲れた身體に、十七日の寒夜の月光を浴びながら、一農家にて……………

(一月三十日着信)

金子 織 吉君 (庶務係)

拜啓 一別後は御無音にて申譯ありません。

御蔭様にて無事軍務に服し、只今〇〇方面の戦闘に、元氣で働いて居ります故、他事ながら御休心下さい。

皆様によりしく御傳言の程を、

草々



御身御自愛の程を、

十月三日

金子織吉君は昭和十二年九月九日應召して、勇躍戦地に向ひ、上海に上陸以來奮戦又奮戦、遂に十月六日小宅附近攻撃の際、敵弾の爲め江南の花と散れり。
此の間、應召以來一ヶ月を出でずその通信は、この葉書のみなり、依て同君戦歿後、战友より三越國防婦人會に宛てたる書信及び當時の隊長吉田大尉より遺族に寄せられたる書翰を録して以て同君の冥福を祈る。(編者)

早速ながら皆様の眞心籠めて御送り下さいました金子君宛慰問の小包昨日拜受致しましたが、残念ながら同君は既に君國の爲め日本軍人として名譽の戦死をされました。
然し戦場の慣しで御返送も致し兼ねますので、分隊員一同にて謹んで處分、金子君の御靈前に御供へ致しました故、右御諒承下さい。
同君の最後の模様もくわしく御傳へ申上げたのですが、發表は未だ許されませんが、萬に一つ吾々分隊員の内一名にても武運を全ふして凱旋の曉には必ず御訪問申上げ、當時の有様を委しく御話申上げる考で居ります。唯一言皆様に申上げることが、金子君の最後は實に立派で日本軍人として耻かしからぬのみならず、吾々分隊員も深く感謝し誇として居ることでありませぬ。

(昭和十二年十一月三十日着信)

上海派遣軍 伊東本部隊

吉川 新治 萩元俊太郎 窪島 忠一
小柴 三郎 海老澤好太郎 鈴木和三郎
小濱 好二 深井 政雄

はなからんと存候

昭和十三年一月十日

伊東部隊〇〇部隊〇〇隊々長

陸軍歩兵大尉 吉田 勝一
現認者 陸軍歩兵少尉 牧野 英二

横尾 八郎君 (銀座支店)

此度は皆々様の御厚情溢る、數々の慰問品御送り下され、厚く感謝致候。直ちに战友と分け合ひ、東京からの味の便りをお互のお腹に案内仕候。

小生儀お蔭様にて、相變らず元氣よくヤセ馬に鞭ちながら、出征當時の誓ひの如く、任務遂行に努力致居候間御休心の程願上候。

何分我が隊は第一線將士の如く、朝に一壘、夕に一城と華々しく又勇まじき話は無之、去月、分遣隊(本店竹腰、小坂橋兩君あり)が敵機より爆撃を受けたる(但し我が軍に損害なし)外に、〇〇事にて〇〇國〇〇と一觸即發の事態を招來し、彼我の砲口より火を吐かんとする迄に至りし位の事にて、鐵道警備隊の如く黙々として任務を遂行、前線に對する無言の援助が本務に有之候。

然し乍ら當隊としては、特別任務を帯びて皇軍の戦闘力に影響

織吉殿戦死なされ候は昭和十二年十月六日午前八時頃にして、時恰も當大隊は吳淞クリク渡河、小宅攻撃の際に御座候。小宅は名にし負ふ蒋介石をして、日軍二十萬を喰止めんと豪語せしめたる程の堅壘にして、之を守るもの又敵の精銳に候へばその攻撃は全く死闘と稱するも過言に無之、今事變中最も激烈を極めたる戦闘にして、其の悲壯なりしこと到底筆紙に盡し難きもの有之候。
同君は終始一貫、砲火炸裂、雨と飛來する敵彈下に在りて勇猛果敢能く健闘せられ、その態度全く涙ぐましきもの有之候。不幸敵彈の爲め江南の華と散られ候も、その最後は實に壯絶極まるものに有之候。同君日頃の行動と共に我等战友一同の哀惜措く能はざる處、今茲に當時を回想、小宅占領の喜びだに知らずして逝いたる君を偲び泪の止まるを知らざる有様に御座候。それにつけても前途猶有爲なる織吉殿を喪ひたる御家族御一同様の御歎きは察するに餘りあり、御慰め致すべき言葉も無之候。つて御良人様の死は驚て來らんとする東洋永遠の平和の爲め、征旅萬里、皇軍の一員として護國の人柱と化したるを惟ふ時、眞に男子の本懐と申すべく、御家門の榮譽又之に過ぎたる

する兇惡極りなき〇〇菌と戦ふこと五十餘日、殆んど完全に之を制壓致し、今や特別任務も終了、本來の任務に還り、榮えある傷病兵の收容治療に従事罷在候
十一月二十八日

昭和十三年を迎ふるに當り、小生は三十一日から元旦にかけ衛兵勤務にて、寒空の下、銃を小脇に抱へながら、終夜病院の警備の爲め彼方此方と巡視致しました。白衣の勇士達が良い年を迎へるやう祈りながら……。

元日の朝、太陽の昇るを見て、
初日の出果しなき野の彼方より
さし昇る太陽と、南北支に翻る日章旗とを對照して、
太陽は宇宙の護であり、日の丸は東洋の鎮であり、世界平和の護符である、
と云ふ氣持を強めました。

然し猶赤き蒙古風は何時止むべくとも見えす、油断は出来ません。開院式の勅語に畏れ多くも「終局の目的を速に達成せよ」と仰せられました、戦友一同新春と共に更に決意を新にし努力して居ります。
では北支より遙かに東方を拜し、皆様の御健康をお祈り致します。

(二月中旬着信、天津より)

漸くのことと對岸へ着き、抜く手も見せぬ突撃に、流石の敵もとうとう逃げ出しました。
渡河成功の喜びと、部下を失つた悲しみと……この時部隊長の眼には涙が一ぱいでした。

一月廿一日

南京攻略の成つた時、東京はどんなに賑かだつた事でせうね。自分等も南京城頭高く日昇旗の揚つた時には、戦友一同抱合つて、天皇陛下萬歳！を叫んだね。

然し後を振り返つて見ると、戦友の屍體が彼方にも此方にもあつたので、思はず涙が出たよ、全く戦友のお蔭で一番乗りが出来たんだ。

部隊長も一番乗りの喜びよりも、部下を亡くした悲みが大きいと見えて、只うなだれ、傍に居る將兵も皆黙つてゐたね、實にしみりしたよ。

十日から攻撃が始まつたんだ。十日の午後五時二十分、城壁に日昇旗を建てるのに、とても決死的だつたよ、城壁に辿りつくまでに一人斃れ、二人倒れ、決死隊が四度目にやつと成功したんだ。

我が部隊は前進し過ぎて、後方の敵と前方の敵の間に挟まれ、一時は全滅かと思つたね、然し幸ひにも十三日には、水を飲むで城内に入ることが出来たんだ。

米 元 忠 男 君 (食料品 賣場係)

十月一日上海に上陸、吳淞より第一線陣地に向つて前進、初めて前線に出ましたのが十月六日でした。

この時初めて敵のトーチカ陣地をまのあたりに見、砲銃彈の物凄いや音を聞き、兎に角、生れて初めてですから、實に生きた氣持は致しませんでした。

自分は夜大隊本部に在つて一睡も出来ませんでした。本部と申しまして、穴を掘つて天幕を張り座つて居るのです。

砲彈は前後左右に落下し、幕舎の上をヒューンと小銃彈が飛んで行きます、戦友一同の顔の色はありませんでした。かくして友軍の攻撃のすばらしさに、流石の敵もかなはじと後へへと下りました。戦の終つた後を見て……思ひ出すとぞつとします。蘇州河敵前渡河——部隊長の命令で、戦友一同互に言葉交し、死んだら家へ通知を頼む著、死んでも骨は取らんでよいと云ふ者など、實に悲壯な有様でした。

十一月三日午前十時を期して渡河準備です。友軍砲兵は一生懸命、渡河を援ける爲め撃つて呉れます、工兵隊は煙幕を張つて呉れました、一寸先も見えませんが、敵は益々猛烈に射ち出します。

「やられた！」「やられた！」と、どの舟からも聞えて來ます。たつた五十米しかない河幅が、この時ばかり二百米も三百米もあるやうに思はれました。

實際その時ばかりは死ぬと思つたね、砲彈は雨のやうに滅茶苦茶に落ちて來るんだ、自分の横に僅か五米位離れて二人居たのが、自分は微傷だも負はず、その戦友二人は死んで仕舞つた、自分はしばし茫然としたね。

十三日午前七時、部隊は軍旗を先頭に、入城した時は實にうれしかつたね。
嗚呼、南京も我が手に歸したかと思つて、うれし涙が止まらなかつたよ。

十日間休養してから、去る〇日より警備地に在り、次期作戦の準備でなか／＼忙しい、でも彈丸が來んから大分肥つたね。では皆さんによろしく。

一月廿三日

高 野 寅 次 君 (食料品 賣場係)

目下〇〇大隊醫務隊として活躍中、
砲聲！銃聲！空爆！火災！焼けつく鐵兜……

戦雲愈々展開、雨……雨だ！正に彈丸の雨だ！
上海の慘狀は實に想像以外なり

八月二十一日

當地の戦況は既にラヂオ、新聞等により御承知の如く、上海戦

勃發以來二ヶ月に餘る難戰苦闘も空、陸、海、皇軍將士の徹底的肉彈攻撃により、昨二十七日の拂曉を前に敢行された總攻撃にて、見ごと數十倍の敵軍を殲滅し、記念すべき大捷を博しました、これは全く畏くも 大元帥陛下の御稜威と、皇軍將士の決死的奮闘と、銃後に在る無邊の力との三拍子一致の結果なることを信じて居ります。

曉を破る旭日に映えて此處彼處に掲げられた日章旗の翻騰として輝く様を見ては、鬼と言はれた部隊長を始め、私達も抑へ切れぬ涙が頬を傳はるのでした。そして嗚呼、上海は遂に我が手に歸したのだと異口同音に喜び合ふのでした。

今や上海も明朗化し、共同租界は大日章旗の下に平和の姿を現はして居ります、未曾有の市街戦に遂に凱歌を上げ、泣いて喜ぶ陸戦隊員の胸中を御察し下さい。

十月廿八日

燈火管制の爲めロソクの灯で手紙を書いて居ります。

高田憲政君 (賣場係)

御無沙汰致しました。

北安鎮〇〇隊に入隊以來早くも一週間、軍務繁多の爲め、夢中で過ごしてしまひました。

當地は零下二、三十度、痛い程寒いですが、室内はペーチカと

當地北安鎮には滿洲の軍隊も居ります、先日其の兵舎を見學に参りましたが、實に良く訓練されて居り日本の軍隊その儘です、起床から就寝まで號令は皆ラッパです、上に立つ人々には日本人の方が多いやうです。

唯一つ違ふのは食事です、滿軍は二食で朝夕だけです。私等も只今年末の舍内巡視やら檢閲で多忙に過して居ります。

十二月廿八日

〔註〕高橋君は滿洲國安東省寬甸縣に於て現役服務中なりしが十二月一日更めて召集せられ新任地北安鎮に移れり。

高橋源次郎君 (計算係)

銃後に於ては、斯程までに統制ある機關を設け、戰地に在る我々を御鞭撻下さるにも拘らず、何等御期待に添ふべき行爲もなく、誠に愧しき次第であります。

出征に當り胸に誓つた一念は、今も尙ほ變るものではありませんが、微力今日に至るまで、報ゆる何物もなきは返すくも残念でなりません。

承る處によると上海戦線に出征せられた方々の中には名譽の戰死傷者もある由、これ等の人々に對しても、微傷だに負はず元氣である自分を、申譯なく思つて居ります。

自分には特筆大書すべき事柄もありません、せめて戰闘經過の

いふストープの親方みたいなものあり、非常に暖かいです、それが爲め銃が汗をかいて、拭いてやるのに一ト苦勞です。

今日は日曜日、朝から休養、酒保へも行き、「あんまき」なるものも食ひました。軍隊の酒保にウエストミンスター(註、英國製紙卷賣)があるなど、一寸豪勢ではありませんか、辛いこともありません。普通の日はコマ鼠——と云つても、自分は鈍重な方ですから、コマ牛位の所でせう——の様走り廻らねばならず、並大抵ではありません。然し男ばかりの世界：はつきりしてゐて面白いです。

着類などは官給が十二分で、持つて來た私物品も、徒らに整理の繁を増すばかりです。

二月六日

御寛恕願ひます。

高橋富士雄君 (圖場係)

今年も早や餘す處四日となり、御店も嘸かし眼の廻る様だと思ひます。

小生も益々元氣にて軍務に精勵致して居ります。當新任地は日中零下三十五度前後の寒さです。當地に來まして早や二十餘日になり段々寒さにも慣れて來ました、今迄の最低温度は零下四十五度で、凍傷患者も時々出ますが實に恐いものです。

大要なりと記して御返事に代へたいと存じます。

先づ九月三日〇〇に上陸し、六日北京郊外〇〇に於て英氣を養ひ、十日〇〇鎮にて戰期の熟するを待つ中、九月十四日正午、愈々全線に亘り總攻撃の命あり、勇躍、敵の第一線陣地たる永定河畔へと進出致しました。

恰もこの地方は四十年來の大雨の後を享け、大行山脈の谷々より流れ落つる濁流は滔々として渦を巻き、頗る困難なる渡河戦を演じながらも漸く敵を撃退しました。

翌十五日には第二線陣地たる拒馬河に到達し、永定河よりの餘勢を駆つて一氣に押し渡る心算でしたが、なか／＼思ふ様には参りません。

拒馬河の陣地は敵も特に意を用ひ、半永久的な構築を施したらしく、その堅固さは支那軍と雖も侮り難き防備振りでした、その上名の如く馬も渡れぬといふ河を前に、我々を一步も近づけまいと物凄く一齊射撃の連続でした。

これが爲め少なからざる損害を受けましたが、もとより討つも討たるも戰の常と覺悟して、工兵隊より鐵舟の供給を受け、十七名が一組となり之を擔いで河端まで運び出し、煙幕を張つて強行渡河を敢行すべく準備しました。然し河まで舟を運ぶ僅か百米位の間に三名が傷き倒れ、残る十四名が舟に乗り込むで對岸に着いた時は、完全に戰闘を續けられる兵は僅々八名となつて仕舞ひました。

茲に於て自分も一切を觀念し、遮二無二前進しましたが後に續

兵とてはなく、部隊とは連絡を断たれて全く敵の重圍に陥り、四面皆敵の中に十數時間……

此の間、突撃すること二回、之は往年滿洲事變出征中にも一度も試みたことのない突撃でした。

分會より戴いた日章旗を纏に、夜目にも味方と分るやう、又「寶木」「國本」(聯隊所在地)の合言葉に敵味方の混淆を避け、第二回突撃の直前には月明を便りに貴重品、裝具全部を砂中に埋没し、死後の用意たる手帖に

「十五日午後九時決死突撃を敢行せんとす、萬事休す」と記し、心置きなく準備して猛然突撃に移りました。

然し天佑か、奇蹟か、僅かに靴の踵を撃抜かれたのみにて、微傷だに負はず生きてゐる自分を確認した時、全く起死回生の靈藥を飲んだ心地が致しました。

翌十六日午前三時、漸く一方の血路を開き、辛うじて部隊と連絡をつけ、中隊に復歸したのは未だ夜明け前で、味方の陣地にも死屍累々として、洵に悲惨な有様でした。

聯隊長が、畏くも軍旗の處置を命じ、既に焼却の準備までしたのも此の時でありましたが、翌日遂に「長期抗戦」を豪語した敵の堅陣を抜き、息をつく追もなく、敗敵を殲滅すべく急追しました。

桑婁舖、南義安、東釜山等々の戦闘を経て、敵が最後の主要陣地たる大冊河に肉薄したのが二十一日でした。此處に於ても拒馬河に劣らぬ激戦を展開しました。

桑婁舖、南義安、東釜山等々の戦闘を経て、敵が最後の主要陣地たる大冊河に肉薄したのが二十一日でした。此處に於ても拒馬河に劣らぬ激戦を展開しました。

過ぎ來し方を顧みて、誠に感慨無量なものがありません。

現在は河北の最南端に進出し、黄河を指呼の間に望みながら腕を撫で、居ります。

十二月三十日

この餘勢で正定、石家莊を陥れ、尙も敗退する敵を急追する中、北白路で敵の大部隊に遭遇し、壯烈なる戦闘を交えました。○

○隊は此敵を包圍して退路を断つべく夜中に移動し、○○隊と窮鼠の勢とやらで敵もなかく奮戦しましたが、大勢は己に決

しました。各隊一齊に突撃敢行、殲滅的打撃を與へました。渡支参戦以來これが第四回目の突撃でした。この戦闘には泥濘甚しき爲め車輛部隊、自動火器は参加しませんでした。

尙この敗残兵を元氏附近に追ひつめた頃、漸く野砲隊が到着しましたので、柳林(敏、食料品賣場係)が居るか尋ねました。處、未だ來ないが間もなく來る筈との事で聞けば彼も元氣だとのこと、逢ひたかつたが遂に逢はずに、よろしく頼むで尙も前進しました。

此附近の戦闘中。私の隣に居た初年兵が鐵兜を射抜かれて「ウーン」と唸つた儘倒れたので、せめて遺言でも聞いてやらうと「どうした」と聲をかけたら「やられたッ」と言ふので、繻帶をしてやらうと思ひ鐵帽をとつて見ると中の戦闘帽も穴があ

敵は河北の要地保定を守るべく必死の抵抗をなし、金城湯池のやうな陣地から、盛んに射ち出すので全く面も向けられませんでした。

前にも述べた如く四十年來の大豪雨で、河水氾濫、到る處泥の海と化し、随分困苦を嘗めましたが、之も押しの一手で乗り切り、保定へ……保定へ……と前進しました。

此の間、「涿鹿の野」で有名な涿州平原の殲滅戦や、滄州平野の激戦にも敵を撃退又追撃、九月二十四日遂に保定城頭に輝かしき日章旗を掲げることが出来ました。

それより更に南下して、正定、石家莊を攻略すべく前進を続け、十月七日滹沱河の線に到達、前の三河とは比較にならぬ程、彪大堅固な陣地に據る敵と對峙すること四日、飛行機と砲兵の協力を得て、愈々明日は總攻撃と極つた前晚、敵はこの陣地を捨て、逃走したので激戦の豫想を裏切られました。かくして薄氣味悪く滹沱河を渡り、猶ほも敵を急追して遂に十月十一日、敗

退せる敵と北白路に會戦、元氏附近に於て之に決定的大打撃を與へ、十月十五日順徳城を陥れることが出来ました。永定河より此處まで丁度一ヶ月を費して漸く辿り着いた次第であります。

現在では、北支にも既に新政權が樹立せられ、破壊から建設へと一般民衆も一生懸命であります。

明後日は意義深きお正月を陣中に於て迎へんとし、今迄過去を振り返る隙もなかつたものが、この手紙を認むるに當り、沁々と

いてゐる。テツキリやられたナと思つて更に戰帽を脱がしてやると彈丸の破片がコロリと落ちたが血が出てゐない、變だナと思つて頭を一廻り撫で、やつたが血が附かないので「大丈夫だぞ」と頭部を押してやつたら「そうですか」と元氣な聲をして首を上げたが「まだ頭がグリーンとしてゐます」と云ふので大笑ひをしました。

この男は鐵兜を二回射抜かれたが、微傷も負はない幸運兒です。斯くして敵の最後の足場たる順徳をも陥れ十月十五日入城致しました。

それ以來は京漢線を南下、鐵道を警備しながら沙河、臨洛關、夢の枕で名高い邯鄲に夢も結ばず更に南下し、只今は黄河を前に控えて、昭和十三年の新春を迎へんとして居ります。

こんな元氣で正月を迎へられやうとは夢にも思はず、多難なりし十二年を顧みて誠に感慨無量です。

十二月三十一日

竹腰金三郎君 (賣場係)

北支征戰約一ヶ月半にして殆んど五省を平定し、先般新政府の樹立と共に、政治、財政、交通其他の文化施設も、漸次日本風に整備されつゝあり、其結果見るべきものが多々あります。有識階級の極めて少數人は別として、殆んど大多數が自國とい

ふものに無關心である支那人の心理は一寸諒解に苦しみます。保定占領、上海征定、南京陥落、濟南平定と打續く祝日に、手に旗を持つて踊り狂ふ支那人には、國家もなければ又國民もないのでせう。若し日本人であつたら……と思はせられます。昨今氣温は零下十五度内外で屋外に五分間も居ると耳や手足が疼くなり、一町位離れて居る洗面所から兵舎までの間に、タオルが棒の様に氷結致します。

早朝市街を通ると、寝る所のない苦力又は中毒患者（阿片、モヒ）が一夜の内に凍死し棒のやうになつて横はつて居るのを處々で見受けまゝす。少し御叮嚀なのになると塀に立てかけてあるのを見受けます。全く支那でなくては見られぬ所です。

九月〇〇日渡支してより間もなく特別任務の爲め塘沽に勤務して居りましたが昨年を以て任務終了、十二月下旬より移動を開始し、一月四日北京に到着、新任務に就くこと、なりました。

北京は流石清國の都たりし土地とて、宏大華麗なる皇居を初め史蹟が多数にあります。

到着後、日猶ほ淺く詳しい事は存じませんが、唯、渡支以來、山と緑の樹木、藍色の水を見たことのない我々が、北京に来て初めて内地の風景に接したやうな氣持になりました。北京は一名「森の都」と謂はれてゐるさうです。

高い處から見ると市内は外城及び内城と二重に支那獨特の城壁を以て圍らし、主要箇所には城門があり、樹々の間から屋根が見えるなど五ヶ月振りに見た斯やうな景色には驚くの外ありません。

尙も進んで眞茹無電臺、南翔、嘉定、太倉の攻略に参加、湖州、杭州も攻略、常に我が部隊は最高の戦績を収めて現在に至りました。

昨年十二月十日より十三年一月二十日迄の戦闘は、實に百五十餘里に亘りました。お正月は杭州市の西湖畔、支那風景の隨一と云はれる處にて迎ひました。

其後海岸線を幾日となく行軍、金山衛城や杭州灣方面の殘敵を討ち、尙上海の對岸なる浦東の殘敵をも討伐し、今は南市近くにて警備旁休養をとつて居ります。

上海市及び郊外の汽車は、友軍の手にて運轉し、一日五、六回も、北停車場より南京に往復して居ります。又軍工路には大型バスも運轉され、交通は日一日とよくなります。

日本人街は既に七分通り歸來して各商店も活氣を見せて居りまゝす、カフェー、料理店、理髮店、浴場等は、軍人にていつも満員です。

二月五日

武田三郎君（銀座支店）

熱誠溢る、御聲援、御鞭撻の御書面拜見いたし、誠に感激の思ひ出が盡きません。此上は愈々粉骨碎身、以て盡忠報國の誠を致し、銃後御一同様の御期待に副ひたき念願であります。

天津は事變前萬餘の邦人あり、事變後の最近はその倍數以上に増加しましたが、北京は日本人がまだ少いさうです、然し此處も近時最大重要地となりましたので、これから増加することとせう。

第一線將士の如く華々しき戦話もなく誠に残念で、前線に進出することを希つてゐますが、之ばかりは如何ともする能はず、一番地味な兵站勤務の上に軍機漏洩による書簡の點檢が嚴重の爲め戦争話は止めました、悪しからず御許し下さい。

一月八日

田邊森一君（新宿支店）

戦友達も我が三越の行届きたる戦士に對する取扱ひを非常に喜んで居ります。又上海派遣軍の我が部隊に送り來る慰問品には、三越のマーク附の品多く、自分も我がことの様喜んで居ります。

上海に上陸するや否や、敵正規兵二名を捕虜とし、〇〇しました。我が部隊は進み進んで幾轉戦、吳淞クリークの激戦に、第一番の戦功部隊となりましたが、自分も此の戦には決死的任務を遂行しました。更に戦史以來の大激戦地大場鎮に於ては、又々我が部隊は一番乗りを致しました。

出發以來既に四ヶ月、北京に近き豐臺に下車してより現在地迄、行軍三百五十里、その間敵を攻撃すること六回、雨飛する彈丸の中を猛進する毎に命はなきものと覺悟して奮戦しましたが、御蔭様にて生命には別條なく助かりました。

忘れられないのは、去る十一月十二日河北省成安の手前、南小留の激戦です。行軍して午後六時同地に到るや、直ちに〇〇大隊の一小隊は夜間攻撃を命ぜられ（通信班六名、小生も加はる）大隊長の指揮の下に前進しました、多數の敵は支那家屋特有の土壁の中に隠れて猛射を浴せ、我が隊は非常なる困苦をなめ漸く敵前二百米迄進みましたが、之れ以上は全く前進不能となり、止むを得ず壕の中に食糧もなく二夜を過し、僅かに戦友と煙草を分け合つて喫みながら、友軍の増加部隊を待ち、漸くにして突撃、これを占領することが出来ました。この戦闘で大隊長は戦死、外〇〇餘名の死傷者を出し全く御話以上の凄まじいものでした。

去る十一月二十日より十二月〇日迄、山東省臨清の守備に當り、更に師團司令部の命令にて、河北省黃河沿線の敵を攻撃することとなり〇日出發、朝城、觀城の敵を追ふて之を占領、〇〇日邯鄲に到着致しました。

今では南京も陥落し、戦争も一段落の形となりましたが、我が〇隊は京漢線順德方面の警備に就くこととなり、近日汽車にて出發の豫定です。

此邊は今迄雨と雪が一度しか降らず、實に雨量の少ない地方で

す、寒氣も相當で水筒の水も凍る程です。何處を見ても廣漠たる平野で、多くの棉畑も戦鬪の爲め、收穫することが出来ず、枯れ果てた儘になつてゐる、何處へ行つても家は破壊され、又所々に散亂する敵兵の屍體には野犬がたかつてゐるなど、實に慘憺たる光景です。

十二月廿四日

慰問品として、何よりなものばかり澤山に頂戴いたし、厚く御禮申上げます。今迄戦鬪の爲め甘いものに不足したせい、久しぶり振りにておいしく御馳走になり、内地へ歸つたやうな感じがいたしました。

目下戦鬪も一段落となりましたので、我が〇〇部隊は平漢線高邑の警備につく事となり、去る〇〇日現地に到着いたしました。寝具やストープなども配給され、久々で暖かく暮せます。

お正月も間近になりましたので、陣中の御馳走配給を今から楽しみに、全く子供心となり、子供の父ちゃんとは思はれぬ生活を致して居ります。

十二月廿八日

土屋 政君（庶務係）

ですが、第一線以下の將兵は克く不自由を忍び黙々として働いて居ります。

最悪の條件のもとに最高の戦果、最大の作業能率を擧げることこそ、ほんとうの軍人精神であると思ひます。

今日は十二月五日、お店でも年末賣出しでお忙しい事と思ひます。此手紙も年内に届きますかどうか……

十二月五日

硝煙の臭も生々しい戦鬪の跡もだん／＼薄れて、此處北支も、追々明朗性を取り戻して來ましたが、彼等得意のゲリラ戦法とか云ふ小癩な小刀細工をやらかします。通信妨害をしたり、鐵道の枕木を焼いたり、兎に角共產軍の親玉閻錫山の生れた土地だけに、土民なども相當抗日意識が熾んな様です。宣撫班が貼つて歩いたビラ、日本軍佈告などを破つて歩く蟲ケラも居ります。尤もこんなのは兵隊の居ない村落などばかりです……

日本が聖戰の目的は東洋の和平にあることは、多言を要しない處なるも、永年育まれた共產思想や、國情、人情などの相違から、解釋も亦自ら違ふのでせう。

日本の眞意を悟り、日支が圓滿に提携出來るのは何時のこととせう。願はくば新五色旗の下、王道樂土の一日も早く建設せられんことを願ひつゝ、自分等兵は一意軍務に勵むで居ります。

此處、山西省の大高原にも嚴寒がやつて參りました。

「三寒四溫」と謂はれる通り、この邊は酷寒が続いたかと思ふと、復暖かな日が來ます。これを繰返してゐるかと思ふと、突然三日四日と吹雪が續きます。正太鐵路〇〇驛附近の橋梁修理中に、三日間降られた時の寒さは忘れられません。

只今は同蒲鐵路〇〇鎮驛の通信手として勤務に就いて居ります。此處は山西の首都太原の北方〇〇杆の地帯、海拔千米に近い大高原を、大同、太原間の運轉が我々〇〇隊の受持區間、華々しい戦鬪がないだけに物足りなさはあるが、然し自分達の鐵橋修理、列車運行に依つて、第一線部隊の作戦が圓滑に進捗すると思へば、勞苦若ならず、嚴寒何んぞの意氣に燃えて居ります。

〇〇島上陸以來の行動は別に大した事もありませんが、石家莊、太原間の正太鐵路の復舊と同蒲鐵路の復舊運轉、これだけです。こゝ言つて仕舞ふとそれまでですが、自ら警備し、自ら作業せねばならないだけに、技術隊の惱みも少なくありません。

大陸の眞赤な、ほんとうに血のやうな眞赤な夕陽が殘雪を染めて沈んでから、午前七時夜の明ける迄の緊張し切つた氣持、同じ張りきつた氣持でも、早慶戦最後の一點などは異り、想像だにもつかぬ十三時間です。

湯泉では野村光平君と遇然な機會に恵まれて逢ふことが出來ました、お互に其の奇遇を喜び合ひ後日を約して別れましたが、同君も元氣で精勵されて居ります。

廣い戦線のこと故、日用品や甘味、煙草等の缺乏には全く參り

一月廿二日

根本一郎君（雜貨係）

〇〇港より御用船〇〇丸にて上海に向ふ。

四千噸餘りの貨物船、船室は人と馬と一緒で豚小舎と同じです。一坪に五人座敷敷いて毛布にくるまる、蘆一枚に二人半の割合で立つにも寝るにも不自由の上なし、實にお話になりません。我々の寝てゐる所は天井の高さ三尺位、ちよい／＼頭をぶつけます。

朝八時頃より玄海灘にかゝる、風強く波高く前後左右にもまれる、船酔で元氣なく甲板にも出られず寝たつきり……

夜、黃海に入る、暴風雨となり動搖更に甚だしく、船酔の苦しさを初めました、海の暴風は實に物凄く、映畫で御覽の通りです。

翌日支那海に入る、天氣晴朗、波靜かに始めて甲板に出る。我が御用船の前後に戦鬪艦、巡洋艦が護衛してゐるので心強く感じました。我が戦艦より水上機の飛立つ姿を見て、既に戦地に入つた感を深くす。揚子江より上海に上陸の途中で、初めて敵の空襲に遇ひました。

上陸後〇〇警備機關銃隊付を命ぜられ、當分江灣鎮に宿泊、此處は屋敷のある家一軒もなし。

江灣鎮より廟行鎮に入るまでは、頭の中は唯眠ることと食ふことだけ、敵が来るなどは少しも考へませんでした。

一度敗残兵に襲はれましたが、彼等は直ぐ逃げてしまひました。僕は乾パンをかちり乍ら遠く逃げてゆく敵を眺めてゐました。水にはとても苦しむのである、揚行鎮に入る前だった、途中で井戸を見附けた時の有難かつたこと——われ先にとがぶりぐりと飲むのだが、何んだか臭いので、中をよく見ると支那兵の屍體が浮いて居る、驚いたが誰れもやめやうとしませんでした。見渡す限りの高粱畑を毎日々々歩いて行くのも實にたよりないものだ。雨が降ると何處が道路だか分らない泥濘になる。

何の家でも日の丸の旗を立て、お茶や湯の接待をして呉れる、初めは毒でも入つてゐるんじゃないかと思つたが、今では何を食べても飲むでも平氣になりました。

近い内に第一線に加はる事が出来るかも知れませんが、どうせ来たからには第一線で華々しく戦つて見たい。

(十二月十一日着信)

内藤 一年君 (庶務係)

只今は揚子江北方十里の地點〇〇を警備中です。

四圍は江北の大原野にて、毎日のやうに降る雪に、平野は一面

慶賀に不堪所に御座候

旬日に亘りて大場鎮の西、馬家宅附近に展開されたる激戦に、多くの戦友を失ひたるも遂に其目的を達し、更に休む間もなく各地に轉戦、去月末大舉して蘇州河方面へ強行軍の途中小生は全く歩行不能に陥り、戦友に助けられつ、診斷を受け候處、脚氣と申渡され後方にて安靜治療せよとの事に再び戦友の肩にすがりて其儘野戦病院に入り加療致居候處去る七日内地歸還の命に接し候

然し自分は飽く迄も本隊と行動を共にし堂々凱旋致度旨を訴へ、當所に於て治療方を再三願出で候も遂に容れられず、不本意ながら想出多き上海を然も征途半ばにして、口惜し涙に咽びつ、八日上海を出帆、一路母國に歸還し十六日原隊に到着仕候御話申上ぐるも恥かしく苦衷御推察下され何卒御許容の程を深く御願申上候

その後日一日と経過良好にて歩行も稍自由と相成候間乍他事御休心被下度候

昨日「戦陣餘芳」御惠送に預り深く御禮申上候 頁を重ねるに従ひ、出征者各位の御奮闘を思ふにつけ今回自分の胸甲斐なき白衣の歸還を何んと御詫申上げてよろしきか、考ふれば考ふる程自然に落涙を禁じ得ざる次第に御座候

十二月三十日(仙臺陸軍病院より)

の銀世界と化して居ります。

本日附近の敗残兵の掃蕩を終へ、無事歸還致しました、もう敗残兵も日本兵の姿を見ただけで逃げ出す有様です。熱誠溢る、銃後の皆々様の御援助により、皇軍將兵は何の憂慮する所もなく、奮闘を續けて居ります。

不肖小兵も東洋平和の礎の一人として、無事御奉公致して居ります、どうぞ御安心下さい。

(二月十六日着信)

中村 泰雄君 (花小鳥賣場係)

十月一日、上海敵前上陸以來、幾多の猛攻撃により敵の心膽を寒からしめ、行くとして勝たざるなき皇軍の威力を發揮して、或はクリークに或は膝をも没する水壕中に、敵の迫撃砲、榴彈又機銃に惱まされながらも克く少兵を以て敵の大部隊に肉迫し逃げ惑ふ敵陣中に突入して、一人二人と數へる餘裕もあらばこそ、鬼神の如き早業に敵を殲倒し行く時の痛快さ——眼に入るものは只敵の姿のみにて皇國の爲め無念を晴らす一途の力——全く神業にも等しきこの力の前には、如何なる敵も双向ふことさへ許されず、今や北、中、南支とも皇軍の爲めに平定せられ、抗日作戦に狂奔せる敵の首都南京にも日章旗の翻へるに至り、かくして東洋永遠の平和に近づきつ、ある事は國家の爲め誠に

中村 芳藏君 (銀座支店)

蜿蜒として南京を圍繞する城壁の彼方に、雄大な雲を曳く紫金山も、漸く茶色の膚を現して、當地もすっかり冬の姿となりました。

昭和十三年の新春を敵の首都南京に迎へて、想を遠く故國の空に馳せ、楽しい内地の正月の事など語り合つてゐる折柄、この素晴らしい御慰問に接し、居合はせた戦友達にも御厚情を願つて、その喜をとみに致しました。

入城以來、早くも一ヶ月近くなりましたが、皇軍の徳政に治安は全く回復して民心も漸く落着き、平和の陽光は燦として、翻く日章旗の上に輝いて居ります。

國際避難民區より、各自の住居に戻る者も多く、荒らされた街頭に三々五々、支那婦人の姿も見えて、漸く往時繁華なりし首都の面影を偲ばせて居ります。

水道も通じ、電燈も點く近代ビルの文化生活は、今迄長い間葉小舎や露天で生活したのに比べて、全く有難い感じが致します。歩を城外に移せば、今も尙、激戦の跡は其儘にて、敵の死屍は累々として、クリークを埋めて居ります。

漫然、敵の構築陣地を歩行すれば、地雷の洗禮を受けることもあるとか、平穩なりとて、決して油断は出来ません。

内地は戦捷祝賀に湧立つて居るさうですが、嘸かし賑やかなこと、存じます。行軍中はもとより、南京入城後も、新聞が手に

入らぬので世情も判りませんが、斯かる際、故國の通信や新聞は全く有難くうれしく思はれます。

一月十一日

寒い大連に参りました。

去る一月〇〇日南京を出發、陸路上海に到着し、汽船にて此處へ参りました。

滞在僅か一日、白皚々たる市内を大急きで見物し、再び北支の奥地へと出發します、多分、山西省太原へ向ふのではないかと存じます。

大連三越へ立寄り、支店長殿を始め皆様方に御目に懸つた時は、内地へ歸つた様に嬉しう御座いました。

大連支店の出征軍人後援會より、結構な品を戴きました。

出發の積込み等で多忙の爲め、簡單ながら近況お知らせ申上げます。

二月一日

中村喜三郎君 (吳入係)

再び部隊長の命令にて、山岳地帯を行軍し太原に向ひました。そして無事歸隊致しましたが、途中で敗殘兵にも出會はず、殘

念でした隊へ歸つて見ますと、佳交會からの小包や御手紙が澤山来て居ました。皆様から激勵の御言葉に併せて色々御親切に預り、誠に嬉しく、有難く御禮を申し上げます。

皆様の御蔭により、部隊長殿より表彰状三枚、〇師團より一枚を賜りました。それに此度我が部隊にて最初の進級者が、十二月十五日附にて五名發表されましたが、私も其の中の一人に入る事が出来ました、これも全く皆様の御力添へと深く感謝致して居ります。

私は太原より歸隊後、六日目より急性咽喉炎にて入院致し、病院で正月を迎える始末で、甚だ残念でした、四日間は四十度の高熱が下りませんでした、部隊長を始め戦友の看護により、漸く熱も下りて快方に向ひ、只今は足馴らしに少々づ、運動もし、あと四、五日で退院出来る事と喜んで居ります。

元氣になつて再び御奉公が出来ます、どうぞ御安心下さい。

一月十一日

長澤吉三君 (受渡係)

朝鮮龍山驛通過の際は、京城支店皆様から、多大の歓迎と激勵の御言葉を拜受致しました。

遠く東京を離れて、此地で、こんな素晴らしい歓迎を受けますことは、感謝の外御座いません。

村上富一君 (洋入係)

御便り有難く拜見致しました。

懐かしい故國を離れてから既に一箇月を経ました。皇軍の士氣は益々旺盛で、日夜空爆、野、山、重砲の物凄い攻撃を續け、遂に上海、南京間の鐵道線路を占領しました。

今や蘇州河を挟んで一大決戦中であり、これも遠からず皇軍の手中に陥る事とせう。

小生幸ひにも本日迄無事、支那の氣候風土殊に不潔極まる支那家屋内の起臥にも慣れ、健康そのもの、如く奮闘を續けて居ります、とは言へ、常に第一線を往復して敵陣の中を潜る身、もとより生還は期して居りません、一死奉公あるのみです。

區らずも現役中にこの事變に臨みて出征の榮譽を得、職務上直接銃をとること能はざるも、日々戦線に於て充分に我が腕を振ふことの出来るのが嬉しく、心ゆくばかり活躍を覺ける覺悟で居ります。

何卒各位御健在にて、店の爲めに御盡力下さるやう御祈り申上げます。

十一月三日

久しぶりにお便り致します、何んだか私にはそんな氣がします。昨一月十一日、出征以來初めて便りらしい便りが貰へたのです。

第一線に於て、奮闘を重ねた兵士が、時々交代に参ります、そして其激戦の様子を聞かしていただきませんが、それは言語に絶する辛酸にて、有名な軍歌「討匪行」を思ひ出されます。それに引換へ、自分等後方勤務に従事するものは、全く汗顔に堪えません。

當地の氣候は誠に凌ぎよく感ぜられます、名物の高粱畑もすっかり枯れ落ちて、一目廣漠たる北支の大平野に、朔風吹き荒ぶ時季が訪れんとして居ります。戦火に遇つた街々には、漸く近頃住民が衣食を求めて戻つて來ますが、全く可哀想なものです。

十月二十四日 (北支より)

黃塵朔風に舞ふ支那大陸の戦線に於て、皇軍を祝福するが如き新年の輝かしき旭光を拜し候

吾等は整理して、東の方 宮城に向ひ遙拜仕候 異郷の空にて迎ふる、新らしき太陽、新らしき大地、實に萬感交々至るもの有之候

北支戦線も殆んど征定され候へども、尙各所に出沒する敗殘兵を掃討致居候 小生等も近く〇河附近の〇〇地に前進致す様子にて、只今待機中に有之候

一月十五日

それもその筈、永い間の追撃前進、陣地變更の連続でしたから。私からは暇ある毎に手紙や葉書を書いて出したもの、返事の來ない霧の中へ出すやうで、最近手紙を書く元氣もなくなつたのです。

處が一月一日の晩、金澤の未知の人から、出征以來初めての慰問袋を一箇貰ひ、それが又私の出征前に金澤から出したもので「極暑激しい云々……」の文句だが、その慰問品がどれだけ私等を喜ばせた事か知れません。

昨日、積り積つた我が隊への郵便物がトラック三臺でやつて來た、私等の驚喜如何ばかりか、お察し下さい。Kさんの十一月廿四日附及び仕入各位の懐かしい忘年会の宵のお便り、〇〇さんの綺麗な寫眞、十一月十一日附のお葉書も頂戴いたしました。昨日全部で二十二通、皆様の小包も確かに頂戴致しました、嬉しくてうれしくて……早速その便箋と封筒を使用して居ります。

これからは手紙も書けるし、返事も國から來るだらうし、張り合があるやうになつて來た。

今は戦場の苦しかつた數々も、ほんとうに楽しい思ひ出の種となり、まだ電燈のない此の家に（アパートらしい家に〇〇隊入つて居る）ランプの燈の下で笑ひ合ふ、面白い話、辛い話は何れお土産と致しませう。

外交方面のことはどのやうになつてゐるか、私等は知る由もありませんが、今はこれ迄の戦闘に失はれた兵力を再び完全にし、

異地の草枕に夢を結び、本月〇〇日任務完了して上海に歸り、警備に着きました。

小包八箇、手紙五十八通、〇〇會の書留も入手しました、御書狀三通、誠に有難く感涙に咽び拜讀、厚く御禮申上げます。

近頃は彈丸の音もせず静かですが、二日置きに歩哨に立ちます。去る二十日から廿二日までの殘敵掃討は、寒ふる中の行動で、身を斬る寒風、實に想像以上でした。

一月二十七日

戦地にて、慰問袋を開く心地は全く寶箱以上です、戦友までも大喜び、多謝あるのみです。

又留守宅にも、種々御配慮下さる由、何卒各位によりしく御傳へのほど願ひ上げます。

郵便物は我が〇隊到着のもの、全師の三分の一強にて、東京人の如何に多いかを物語つてゐます。その爲め、上海の倉庫は郵便物山の如く、従つて前後して到着すること多く、閉口致して居ります。

十二月〇日當地出發、敵を追撃又追撃、四十五日間、一日一食の南京米に命をつなぎしことも多く、元旦を杭州にて迎へ、續いて浦東方面の殘敵を掃蕩し、人馬ともに無事、元の任地に復歸致しました。

一月二十五日

何時如何なる場合にも、直ちに出勤し得らるゝやう準備も完了して居ります。

いつも身體の弱かつた私も、今年は珍らしく好調です、勿論弓のやうに張つた精神の緊張と、私の有する責任感のせしめるものと、生意氣ながら自負してゐる次第です。

常熟は左程に寒くはありませんが、近くに相當大きな湖がある爲め、朝夕の風は冷たく、クリークにも氷が張つて、朝、食器等を洗ふ時は之を破つて洗ひます。

一月十二日

村串 甚吉君（新宿支店）

自分も至つて元氣にて、只今支那隨一、風光明媚の地杭州に於て新春を迎ふる事と相成候

杭州は蔣氏新婚旅行の地とか、内地の箱根芦の湖の如く、連山を前にしたる大都市にて、補装道路も完備し、中華民國獨特の風流なる建築物も多く有之候

十二月三十一日

愛馬と共に益々元氣です、御安心下さい。

殘敵掃討の任務を以て、去る十二月〇日出發以來、轉々として

上原 正直君（受渡係）

小生も幸ひ今日迄元氣一ぱい、北支戰場にて軍務に精勵、新年も當地で迎へること、存じます。應召以來最早や四ヶ月、其の間の出來事や戦場の模様等、小生一生の思ひ出として深く心に刻まれ、末々までも話の種が盡きぬこと、思ひます。

去る二十日陸軍戸山學校軍樂隊が當地へ參り、午前中は將兵慰問の爲めに奏樂、午後は支那民衆慰安の爲めに演奏され、小生は二回とも拜聴することが出來ました。

その時大阪毎日新聞のニュース映畫の撮影があり小生もカメラに納まりました、どうぞニュースを見られたら、軍樂演奏の場面で觀聽者をよく見て下さい。

十二月二十五日夜

行軍中萬年筆が負傷した爲め、鉛筆書きで亂文御許しを乞ふ

嚴冬の北支とは謂へ、もうすつかり慣れて、左程寒さも感じなくなりました。

一昨日はフワリ／＼と落ちて來る雪の中に歩哨勤務、防寒服も銃も眞白になりました。

昨日小包が來てゐるとの知らせに、取るものも取敢えず、本部へ駈付けければ、尊い品二つ、戦友と共に分け合つて心から感謝

の言葉をもらすのでした。

今はもう班員一同、一心同體となつて、誰の許に來た手紙でも小包でも、互に讀み合ひ、又分け合つて楽しく軍務に精勵して居ります。

遠い北支より銃後皆様の御健勝を祈ると共に、心から皆様の尊き御心盡しに感謝の意を表しペンを置きます。

一月十八日

生 方 博 君 (庶務係)

我が部隊は、德縣(註、津浦線、河北、山東省境附近)に宿營して居りましたが、黄河大鐵橋が敵の手によつて爆破され、逃げ遅れた敗殘兵約二ヶ旅が、黄河の手前に散在して居るので、他の部隊と共に之が討伐の爲め兵員の輸送に参加致しました。幾度かの戦闘中、吳橋の討伐は最も激戦でありました。正月を目前に控へて前進命令あり、轉進又轉進、數日にして黄河の堤防に程近き地點に達しました。

第一線部隊は勿論、我が部隊も多く夜間無燈火にて行動し、急速に兵員、彈藥、材料、糧秣の輸送を行ひました。

偵察によれば、對岸には頗る堅固なトーチカ、散兵壕が連り、敵は今猶多數の苦力を使役して、盛んに陣地を構築中で、一歩でも堤防上に出れば、射撃せられるとの事でした。

この時、附近の鵠山上で、我が警備隊の萬歳の聲が湧き起り、靜かな朝の空氣を震はせました。

各自の努力で、濕地も何んのその、一時間餘にて車輛の引揚げを了り、一同期せずして萬歳を絶叫致しました。

前進部隊は各街道から押寄せ、新設の軍橋は蜿蜒として隊伍が續いて居りました。我々は道もなき畑地を横斷し、濕地を警戒しながら、難行四時間にして漸く宿營部落に戻りました。

夕方別行動の兵も無事歸還しましたので、吐蘇酒、餅とごまめ、お頭付、きんとん、昆布巻、數の子、黑豆等、十種の御馳走が出て、分隊全員、小隊長も共に賑やかな酒宴が、夜更けまで續けられました。

翌二日は砂塵を蹴つて百五十軒も走りました。其夜の命令で愈々黄河渡河と決定、明日は一路、濟南へ前進です。

三日は元旦以上の快晴、〇〇〇輛の自動車は午後二時渡河開始、私の車輛は午後二時十五分、黄河中央濁流上を通過致しました。その夜は城外〇〇學校内に宿營しました。思へばこの三日間は私達にとり、誠に忘れられぬ記念すべき三日間でした。

井出少尉殿(次郎、吳服賣場係)も同じ學校内に宿營され、面會致しました、非常に御元氣でした。

(二月五日着信)

野 津 浩 爾 君 (廣告係)

來るべき渡河戦に、最少限度の犠牲で成功させやうとする參謀の苦心の程が察せられます。

黄河の向側には山東の名城濟南がある。赭土の曠野に數ヶ月、砂塵を浴びながら行動して來た兵士達が待望の名城濟南です。

〇日の夜、突然起る銃砲聲、山東の山嶽に反響して、暗黒の空に物凄く轟き渡りました。愈々敵前渡河戦が開始せられたのです。我々は部落に在つて、友軍の成功と武運長久を、暗の中で祈りました。

夜明には、渡河に成功した我が主力は既に相當奥まで前進して居りました。我々は後方から渡河部隊に對し、矢繼早に軍需品の輸送を開始しました。

黄河鐵橋の爆破現場を目撃しましたが、鐵片飛散、附近には敵の戦死體多數に散在し、野犬が横行して居りました。この鐵橋を完全に修理するには、約三年を要するとの事です。

我が工兵隊は、早くも軍橋架設に總動員です、我々自動車隊も亦、總動員で架橋材料の輸送に活躍致しました。かくして二日目には立派な軍橋が出来上り、各部隊の濟南入場で混雜致しました。

一月元旦、我が部隊には未だ渡河の命令がありませんでした。

前々日出動の際、我が小隊の自動車二輛が、濕地に陥没したままになつてゐるのを引揚げる爲め、私は元旦の午前三時起床、二車輛と十餘名を指揮して、堤防上を走ること二時間餘、漸く山東の連山に太陽が昇り始めました。

豐臺には一泊せしのみにて、北京に出懸け、北京にも三時間居りしのみにて汽車に飛乗り天津へ、一泊の後又豐臺に歸還、二泊後保定に進出を命ぜられ、五、六時間で行ける道程を、軍用列車輻輳の爲め丸二日掛りにて、十月〇日午前二時保定着、同四時半頃迄種々打合せをなし、眠る間もなく午前七時發、午後二時定縣に到着致候

この朝寢坊が午前五時半より夜九時過まで、あとは帳簿整理等の爲め午前一時頃漸く床に入る始末に候

昨〇日第〇師團に糧秣交附を終り、今日は猶其の後の現場整理に苦力二百人を使用し活躍致居候。疲勞困憊、其の極に達し全く氣力のみにて保たせ居候

此處に來る列車中、保定に近づくに従ひ支那兵の屍體漸く多く、凄慘目も當てられぬもの有之候も、流石に日本兵の屍體は見當らず候

當定縣は全くの支那町にてランプすらなく、此手紙も蠟燭の灯にて認め居る始末に候

道路の隅々は不潔にて臭氣鼻を衝き、便所の不潔さも全く御話の外にて候。屋内の床は勿論アンペラなるもオルドルの設備ありて冬營には持つて來いに候

住民は割合に軍隊に好意を有し、野菜類を買ふべく城内に出懸けしに「進上」と言ひ乍ら快く呉れ候。先日兵士が豚を買ひに行き五十錢支拂ふに受取らず、却つて一角(十錢)を喜んで受取りしとの面白き話も有之候

此附近は戦地気分横溢し、敵飛行機の襲来も毎日にて○○、○
○の如きは相當の被害有之候由、我々の方も警備手薄の爲め毎
夜拳銃と軍刀は枕許より離さず床に入る有様に候

十月八日

皇軍の一員として皇國の爲め

大元帥陛下の御爲めに、東洋和平の痛たる蒋介石政權打倒てう
國家的使命の達成に、及ばずながら一臂の努力を致して居りま
す。

第○○第○○を以てする黄河作戦に伴ふ糧秣の輸送、太原方面
への防寒被服の補給に我々○○は、今、大多忙を極めて居り
ます。

太原方面に通ずる正太線鐵路は永年太原に頑張つた閻錫山が、
作戦上敵の來襲を考慮して狭軌にしてありますので、平漢線の
機關車、貨車は、全然其の用を爲さず、僅に敵が逃亡の際、遺
棄して行つたボロ機關車、無蓋貨車を使用して居りますので、
輸送能率夥しく悪く閉口して居ります。

石家莊も朝夕は防寒帽の必要を感じるやうになりました。

町も避難民が大部分家に歸り活氣を呈するやうになりました。
製粉工場を始め各工場は續々と軍の盡力により仕事を開始して
居ります。原料、食料品、賃銀を軍から與へ、主として軍需品
を製作せしめて居ります。そして經營者に逃げられて職に離れ

鐵道も一月中には、内地から完全な機關車が参りますから、兵
隊や糧秣の輸送も充分に出来るやうになる事と思ひます。

何れ近日中に又大同方面に前進するとのことでありませぬ。

十二月廿六日夜十一時

倉橋彦男君 (銀座支店)

只今は忻縣と稱する人口一萬、太原より數十里離れた町に位置
し、鐵道の警備、農民部落の檢索、敗殘兵の討伐等を行つて居
ります。

最初、石家莊より行軍して此地に到る豫定の處、道路破壊して
通過困難なる爲め、大同を廻り忻縣まで六十餘里を行軍して昨
年十二月○○日到着致しました。途中は零下十七、八度より二
十度位の寒氣にて、部落に宿營せんとするも、家は皆焼拂はれ
て人影さへなく、燃料も亦缺乏し全く閉口致しました。

御承知の通り、此處は○○兵團、大奮戦の地にて、道路の兩側
には、敵人馬の屍體累々として山をなし、冷凍魚の如く凍結し
て居ります。

共產軍の堅固なる陣地には驚きました、これを見ては○○部隊
○○名の犠牲も決して多いとは申されませぬ。

山西の居住民も漸次親日化して参りますが、宣撫班の手不足に
て全く平穩に歸したとのみは申されぬ有様、鐵道線路の破壊、小

危く路頭に迷はむとして居た支那人達は喜んで馳せ参じ、然も
彼等の最も欲する生命の保證までしてあるので、熱心に日本軍
隊の爲めに働いてゐます。

支那の宣撫にはこれ以上有効なる手段は無いと思はれる程で
す。

十二月九日

野村光平君 (庶務係)

私の部隊は只今太原に居ります。

御承知の通り正太鐵路は單線なる上に、機關車が不完全で、貨
車三輛以上を連結する事が出来ません爲め、糧秣の輸送は思ふ
やうに出来ず、山西の都に居り乍ら毎日南京米と粟の交ぜ御飯
を食べて居ります。

南京米でも毎日食べられ、ば結構で、行軍等の際は一日や二日
位、何にも食べられない事も珍らしくありません。

或る時、行軍中、一日半ばかり食事をしませんでしたので、皆
血眼になつて山中の穴藏を探しましたが、米や芋などは無く、
やつと人參を見付け出した時は一同大喜びで、それを馬のやう
に生でかぢり乍ら行軍したこともありませぬ。

先日一回だけ日本米を食べた時の美味しかったこと、全く忘れ
られませぬ。

部隊に對する夜襲等、今月に入りて四回あり、五里ほど離れた
る地點にては、敗殘の兵力を集中し、長期抗戦の準備を致し居
ると聞きました。

忻縣に於ては青年を集め、日本軍將校が教官となりて、日本語
による訓練を實行すべく、目下準備中でありませぬ。

一月十七日

八木米作君 (雜入係)

私儀至つて、頑健にて先月初旬錦州より北支○○へ前進いたし、
今日に及んで居ります。

此處は根據飛行場のこと、て敵機の來襲もなく脾肉の歎を洩ら
して居りましたが、愈本日命令が下り、更に南方○○へ前進い
たすこととなりました、一同元氣頗る旺盛、只今出發準備中
であります。

○附近には太原方面の敗殘兵が相當居るとの事ですから、こ
れからはなか／＼面白い事と思はれます。我が部隊は主として
山西及平漢線方面の友軍と協力、作戦も豫定通り進展し、着々
敵を黄河の線へと壓迫して居ります。

北京が約○軒位の所にありますので、時々連絡の爲めに行きま
す、なか／＼立派な市街で歐米各國の軍隊が駐在して居ります
が、唯支那兵だけが居りませぬ。

當地の氣温は東京附近と大差ない様に思はれます、到着以來一回も降雨なく勤務には大變樂です。
折角皇國に捧げた身體、病氣にならぬやうに注意致して居ります。

十一月十五日

四、五日前に〇〇飛行場より更に四十キロばかり西方に根據地を移動致しました。

前と同様、飛行場附近の民家に分宿して居ります。部隊は依然として、軍前面の敵情偵察並に殘敵の爆撃に従事して居りますが、太原陥落を期として大戦場の失くなつた北支那では、もう大したこともありません。餘す所は山東の政略のみであります。其の方面の作戰に参加するか、どうか、今の處不明であります。

過日南京陥落の報に、石家莊の街には「慶祝南京陥落」のフーチが到る處に建てられて居ります。支那人が先に立つてやつてゐるのですから、どうかと思はれます。支那の國民性と南京政權の特異性を物語つてゐるとでも謂ひませうか、仕方がないからかも知れませんが、一般部落民は我々に好意を寄せて居ります。

氣候も南方へ来た故か割合に寒くなく、唯、水が非常に悪いので生水は絶対に飲めません。

大きな樓門の遍額(大きなものは横三十尺、縦十尺位)が、半分失くなつてぶらりと下つて居ます、樓壁は野砲の弾が命中しても、ビクともしないで屹り立つて居ります。

石家莊の町には城壁なく、大した立派な建物はないのですが、支那人が多く歸つて来て商店も開かれ賑かになりました。太原城内は未だ日本人ばかりで、夜などは氣味の悪い位靜かです。

十二月十九日

當地は割合に暖く風も餘り吹かず、行動には樂です。

内地の如く霜柱は見られませんが、地表面五、六寸まではバラバラした土で、風が吹くと之が黄砂となつて舞上り我々を苦しめます。五、六寸以下を掘るとカチカチに凍つてゐます。

麥なども十一月頃には、内地の一月末頃の大きさに伸びて居りましたが、今日此頃の寒さの嚴しさに、小さく黒く枯れたやうになつて居ります。

昨今人心も大變平穩になりました。住民も歸つて生業に就くやうになりましたが、町の物價の高いのには驚きます。

如何に戦地とは云へ、兵隊達相手に品物を高く賣り、一儲しやうと云ふ非國民が、第一線にダニのやうに喰付いて歩くので感じが悪いです。

國を擧げての非常時に、兵隊を送り出して銃後の護を固めてゐるのに反し、斯かる不良分子(支那浪人)の連中が兵隊相手に

十二月十二日

柳田秀夫君(出納係)

出征後早くも四ヶ月を過ぎ、戦線も大變落付いて参り、正月も戦地で迎へる事になりました。

當地は風さへなければ割合暖いやうですが、夜になりますと大陸性の氣候とて相當な寒冷を覺えます。小生は幸ひ感冒一ツひかす元氣で御奉公申上げて居ります。

太原にも行つて激戦の跡をいろ／＼見て参りました。有名な娘子關、井陘附近のトーチカ陣地も見参りました。山の中腹から頂上にかけて、谷間の道路や鐵路を、あらゆる角度から射撃し得るやう多くの銃座を構築してあるのには一驚致しました。これを攻撃した部隊は如何に難戦苦闘をしたか、其所此所に生々しい痕が見られ、到底筆や口で現はせない位です。

石家莊附近は暖かく風も少ないやうですが、太原平地から太行山脈の盆地や山間部落は風もあり、寒さが大分遠ぶらしく、川も全部氷結し、飛行機から見ると雪(まだ二、三度しか降りません)が山の斜面に残つてゐます。

太原の町は有名な閻錫山の城下で、近代式建築物多く町も大變立派です。我が砲撃を受けても大して破壊されず、空爆も頗る巧に不要な部分を見事に爆破させてあります。

暴利を貪り、私腹を肥して平氣でゐるなんて殘念でもあり、慨嘆に堪えません。

石家莊にも日語學校等が開かれ、小學生にも日本語を教へるやうになりました。然し大人の方は今まで排日抗日で叩き込まれてゐるので、一寸難しいやうです。

當地に來て以來、大分休養も致しましたので、又そろそろ活動する時機が來たやうです、其のうちに愉快な處を見られることと皆張り切つて居ります。

一月二十日

柳原五郎君(庶務係)

大册河で負傷致しましたが、幸ひ輕傷にて間もなく退院、再び第一線に参加して居ります。

大名の攻撃にも参加致しました。此處は宋哲元がその部下に死守せよと命令した唯一の根據地だつたそうですが、我が〇〇隊野州健兒の意氣天を衝かんばかりにて、城壁を爆破して突入、遂に占領してしまひました。

現在は城内に在つて休養を採りながら、次の戦闘の準備中です。近く南へ前進する模様です。

大名城は城壁も立派で、中學も女子師範學校もあり、綺麗な町です。然し鐵道から遠く、彈藥、食糧等の運搬も不便で、お便り

も二ヶ月位か、つて手に入る有様です。

此處に入城したのは十一月十一日の夜十時近い頃でした。それからもう二週間も経つてゐます。

十一月二十六日

柳林 敏君 (食料品 賣場係)

十一月〇日、臨漳、大名に向つて〇〇を出發す、此方面の敵は宋哲元を總司令とし、我が大隊は〇〇部隊〇〇隊に配屬を命ぜらる。

〇日、大名縣馬頭村へ前進中、先鋒の騎兵が襲撃を受けたので之を援護、交戦約二時間にして敵の第一線を突破せり、敵の戦死者約三百なり。更に之を追急すべく我が隊は前衛砲兵として前進す、之より又戦闘に入る、各所に銃砲聲盛んなり。

日本の兵士は彈丸が飛んで來て戦闘に入ると非常に喜ぶ、この精神からしても必ず勝つ譯だ。

敵は土塀の中に陣地を作つて射撃するから、小銃や機關銃では之を打破ることが出来ない、況して敵は抗日派の徹底した學生が相當に多くなかゝ頑強だ。

午後又交戦二時間、戰場は見渡す限りの野原で、友軍に取つては非常に悪い場所だ、夜は夜で、夜襲される處があるから、なかゝ安心して寝られない、一晩中銃聲、砲聲に脅かされる。

十加の有効なる射撃、工兵の決死的爆破、歩兵の突撃、遂に大名を占領す、交戦實に八時間半なり。

戦闘を開始してより四日にて大名を陥落せしむ。一晩中友軍の戦死傷者はドン／＼後方に運ばれて居る、實に氣の毒の至りだ。敵ながら實に侮り難く天晴れなものがある。友軍も小行李等は襲撃を受け多大の損害を被つた。

我が大隊も彈藥が乏乏したので、彈藥、食糧の補給を待つて更に前進せんとす。

(十二年十二月四日着信)

本日小包並御手紙到着拜見せり。

此の小包は自動車で往復一週間を費し受領して來たものである。何しろ第一線で、交通不便な地に警備中なれば致方がないと思ふ。この小包は早く到着した方で、遅いになると三月もかゝる始末だ。

娛樂とするものがない折柄……將棊、寒さに向つて……シャツ等御送り下され、非常に感謝、感激してゐる。

去る十二月中旬、衛河(註、衛河は津浦線に沿ふ白河の上流なり)攻撃に當り我が〇〇隊は〇〇團と協力すべく現在地を出發、衛河河畔に進出せり。

高射砲、輕機銃、重砲等、我が隊は氣球の觀測により一齊射撃だ。全く氣持ちのよいこと、敵兵はバタ／＼斃れる、家屋は崩

〇日、午前十時半頃敵の逆襲に遇ふ、友軍の小行李等を後退せしめ、我が大隊は直ちに敵陣地に侵入、此所に又戦闘開始、一望千里の平原に於て歩兵の散開、我が大隊の有効なる射撃によりドン／＼敵を追ひ詰める、敵は地理に委しいだけ戦法上甚だ有利なり。

我が大隊は彈丸を打つて打つて打ち捲くり、遂に彈丸缺乏し、最後の突撃に依つて敵陣地を占領す。

其の夜は占領した敵陣地に宿營することになつたが、我が砲彈の爲めに家屋は破壊され死人の山で寝る處がない、こんな事なら餘り家屋等は破壊するのでもなかつたと思つたが後の祭だ。

〇日早朝敵を追撃すべく大名に向つて出發す、友軍の死傷者もどん／＼後方に運ばれて居る、此頃より友軍の戦車、飛行機等も盛んに活躍を開始せり。

夜は彈丸で死んだ牛を料理して久振りで御馳走になる。逆襲を豫期して宿營したが、豫想通りヤツて來た、待つてました！とばかり應戦、難なく撃退せり。

〇日、午前十時四十分を期して大名の攻撃を開始す、右縦隊は〇〇部隊、左縦隊は〇〇部隊、我が大隊は左縦隊に屬す。

大名の城壁は物凄く堅固なもので幅約三メートル位、煉瓦で築かれ其前面には戦車壕等がある、我が大隊の射撃開始と共に歩兵の散開。城壁、家屋はチャン／＼崩れ敵はバタ／＼斃れる、氣持のよいこと——續いて火災が起る。敵味方入亂れて大砲、小銃、機關銃の猛撃、戦車の活躍、飛行機の爆撃、野砲、重砲、

れる、觀測所から此の有様が一目瞭然だ。潰走する敵の退路を遮断すべく追撃戦に移り、吾々の有効なる射撃と〇〇部隊、〇〇部隊の突撃によつて衛河河畔を占領す。

唯、寒さに身を斬られるやうだ。敵前のことなれば火を焚く事も出来ぬ、敵陣には恐れはないが、寒さにはやられて仕舞つた。

去る十日頃、南京陥落の報一たび傳はるや、支那民衆は旗行列等を催し大變な騒ぎだ。又近頃は維持會の幹部連が率先して北支獨立を叫び、その宣傳ビラや、假政府を代表する五色の旗が各所に掲げられてゐる。

本日護國の鬼と化した田口少佐以下の英靈に參拜し、亡き戦友達の冥福を祈る。

北支が獨立して、日本の爲め貢獻する處大なるものがあつたら、地下の戦友達も定めし満足のこと、思ふ。

十二月二十二日

共同戦線を張つて居た〇〇師團が、後方へ集結中にて、全面的に手薄となり、敗殘兵が鐵道の破壊、糧食の奪取等各地各所に出没する爲め、我々は歩、砲協力して之が掃蕩中なり。

皇軍の向ふ處敵なく、破竹の勢を以て北支、上海、南京と攻略せるも、我々の任務の重大なるは、猶今後にあるのではないかと思ふ。

北支、南支、中支の建設に、蘇聯を隣國に控へ、遠く英國を脱

むで、今後の情勢に最適の處置をとらなければならぬと思ふ。北支に於ける政治工作は、先づ宣撫班を中心に皇軍と協力せしめ、民衆安定策として治安維持會を設立するのである。人心が安定し、住民が平和状態に復歸した處で復興計劃を進め、鐵道、道路の愛護運動を起し、日本軍との積極的協力へ、——今や其の第一歩を踏み出してゐる。

既に北京、天津方面は臨時政府が樹立され、又京漢線方面に於ても、彰德、大名、臨城、磁縣、邯鄲、順德、石家莊、保定と各主要都市は皇軍の指導に依り治安維持會の設立を見て居る。然れども未だ一國一城の如き觀あり、北支建設の爲めには、これが統一されなければならぬ。而も其の統一には尙一段と日本の力に待たねばならぬ。

之が完成の曉には、護國の鬼と化した幾多の英靈も定めし満足して瞑することであらう。

第一線方面にも滿洲國軍が出勤し、我が軍に協力して居る、彼等の主なる仕事は人民の取締と糧食の輸送等である。

支那民衆の状態は食料其他被服等、所謂金目のものは悉く支那軍の爲めに徴發せられ、其日の生活に困難してゐる。病氣の者などは我が野戰病院にて診察してゐる有様で、實に氣の毒の至りである。

一月五日

同様舉行致しました。

昨今占領地域は各州各町共、自治會なるものを作り、避難民の復歸と復興事業に専念し、戸毎に日章旗を掲げて気分も明朗となり、各商店もポツ／＼開業して居ります。今月末には電燈もつくやうになると思ひます。

只今各部隊共戦闘は停止、來るべき戰鬥の準備並に休養に勉めて居りますが、毎日午前午後二回教練演習をやつて居ります。休養は一週に一日位の豫定です。

上海は各商店とも開業、多忙を極めて居ります。營業時間は午前九時より午後六時頃迄、飲食店は午後十一時迄許可され、何れも繁昌して居ります。

上海は水道、瓦斯、電氣、皆平常通りに復活致し、各商店の景氣は上々、破竹の勢で奮闘して居ります。

我が部隊の現在地より上海迄、自動車にて六時間で到着します。一週に一回位各中隊交互に公用にて二泊位の豫定にて往き、其都度野戰郵便局にて皆様から御送り下さる郵便、小包等を受領し歸隊するといふ有様、隊では自動車の歸りを今か今かと、首を長くして待つて居ります。自動車が歸れば、夜中でも郵便物は分配し、兵を喜ばせて居ります。

私も如何なる困苦缺乏に遭遇するとも、只勇往邁進、皆様の御期待に副はんことを、此處に堅く御誓ひして置きます。

一月十九日於常州

柳澤政吉君(庶務係)

昨年十月末、上海方面へ轉戦を命ぜられ、十一月〇日〇〇出帆、〇〇日上海上陸、直ちに第一線に向ひ、十一月十五日より南京陥落まで全く不眠不休、前進又前進、重砲兵隊として華々しき戰鬥振りを示し、遂に軍より感状を拜受するといふ現在にて、部隊將兵共、皆喜んで居ります。

南京陥落後、十二月〇日、常州迄後退し、只今は待機姿勢にて各部隊とも次の戰鬥準備旁休養して居ります。

以上、偏に皆様の御後援の賜と重々感謝して居ります。

一月十五日

上海上陸後、南京陥落に至るまで追撃又追撃にて、何としても部隊では郵便物は全然取扱はず、且又之を認める暇もなく、知りつゝも御無沙汰勝になりました。厚く御詫申上げます。

南京陥落後、去る十二月十四日夜より中山門外の中山陵(紫金山々嶺、有名なる孫中山先生の陵墓、實に廣大なるもの)に滞在中、〇〇日更に常州迄後退を命ぜられ、同日午後七時頃常州城に到着、現在猶滞在中です。

一月元旦には午前十時、部隊全員博愛門城壁上に整列、遠く東に向つて遙拜式、次で天皇陛下の萬歳を三唱して式を終了、一月四日には勅諭奉戴式、一月八日には陸軍始の閱兵式、内地

山谷研二君(マークット係)

過ぎし一年前、病魔に取りつかれ、長らく田舎にて靜養中、突然召集を受け、周囲の人々から不安がられながらも、目出たく入隊することが出来ました。

そして勇躍敵地に上陸してから、最早や五ヶ月となります。

我が部隊は前線へ糧秣を輸送する任務にて、上海戦線に於ては恰も雨量の多い季節に當り、毎日雨中、泥濘の行軍にて、實に辛苦を嘗めました。恐らく皆様方の御想像も及ばないこと、思ひますが、私達にとつては、一生の思ひ出となる尊い從軍の経験でありました。

十一月中旬、南京方面への追撃戦となつてから、糧食を運びながら移動に移動を重ね、寒氣と降雨に悩まされて、漸く句容まで前進致しました。

十二月下旬、句容を出發、元日も行軍を續けて、南京東南方六十五里、蘇州城に到着、只今その警備に當つて居ります。

蘇州は近代的國際都市で、上海より汽車にて三時間半、南京から五時間の距離、江南戦線京滬鐵道の重要地であります。近くに太湖を控へ、運河と蘇州河の合流點に位し、浙江省の首都杭州と相並んで、東洋文明の粹を誘ふ天下の遊園地として有名です。人口は二十五萬市街は巨大な城廓によつて包圍され、城内外には日本人の專管居留地もあり、僅かながら日本人商店、ホテル等もありますが、然し多年抗日の風潮に押された爲めか、

目醒ましい發展の跡も見られません。

蘇州の蘇州たる所以は、例へば日本の京都の如く古蹟名勝に富めることで、有名な張繼の詩「月落烏鳴霜滿天」の國寶寒山寺を始め、道教の大寺院報恩寺、西園寺等、流石に佛教國支那の而も最も古き歴史をもつ蘇州たるを思はしめるものがあります。私も先日戦塵を洗つて、報恩寺の九重の塔に昇つて見ました。巨大なる城廓、數層の青樓等しく水に臨む、その優雅な風光は到底内地では見ることの出来ない偉觀で、紅燈の下、絃歌さんざめきし昔日の姿を想ふ時人をして恍惚たらしむるものがあります。

敵將蔣介石が一時、此處に足を止めて督戦したのは、唯單に戰略上の問題のみならず、恐らくこうした史蹟を日本軍の砲火に荒らされたくなかつたからでせう。

今では町にも治安維持會が組織され、半壞の家屋を繕ふ暇もなく、隨所に商店の開業を見るまでに至つて居ります。軒毎に「日本軍大歓迎」と大書し、民衆一人残らずと云つてよい位、日の丸の腕章をつけ、日本兵とさへ見れば、一々擧手の禮を捧げます。

こうした市民は日頃横暴なる自國軍閥の重壓に苦しみ續けて來たのであります。何んの貯ひもなき身に、爆彈や砲彈を見舞はれた農民の姿、非戦闘員でありながら、否、寧ろ内心日本に好意を寄せながらも、一家生活の支柱たる男子を、強制徵募されて路頭に迷へる婦女、一瞬にして最愛の妻子を失ひ、泣くにも

泣かれぬ哀れな小市民、擧げて數ふればこれ等は幾千萬の多きに達するかも知れません。

だが、誤つた爲政者の指導下に、多年排日、侮日を叫んで來た彼等に、天の課したる罰として當然の運命でありませう。さりながら、敗戦國の慘憺たる姿を現實に見ては、敵國とは云へざる哀愁と同情の念禁じ難きものがあります。

唯希ふ處は、敵國支那が翻然として善に歸り、東洋永遠の平和の一日も速かに確立せられん事でありませう。

一月二十九日夜

山崎七五三君 (販賣係)

江灣鎮出發以來十日目、只今杭州城内にて警備中です。

去る十二月二十五日〇〇右翼獨立〇隊として此地を占領後、西湖右岸に集結し、殘敵を掃蕩しつゝ、良民を保護して居ります。この度の戦闘には我が軍の損害は割合少なかつたやうです。西湖は非常に景色よく街も整ひ、洵に浙江財閥の根據地たるを思はせませう。廿八日は夜來の雨、雪となり二寸位積つたでせう。在支數ヶ月、生活もすつかり變化し、戦友も支那臭いのが多くなりました。軍隊の支給品は不足勝ちで、下着は支那服、飲物は五加皮酒、老酒、チャンチュウ、飯は南京米といった具合ですから――。

牧が元氣一杯で應召出來ましたのも、偏に皆様の御奮勵の賜と存じ厚く御禮申上げます。

只今は軍律厳しき中にも朗かに出征の日を待つて居ります。銃後家族に對しては、お店の方から絶大な御援助を下さいますので、心置きなく身を挺して皇國のために盡します。何卒後々のこと伏して宜しく御願申上げます。草々

十月二十一日

城内には若い女など見當らず、皆汚い野郎ばかりうよく、してゐます。

南船北馬とはよく云つたものでクリークが無數にあり、一寸そこまで人殺しに舟で……と云つた具合です。

Kさん、いゝホソが居りますよ、木綿針を曲けて、太い縫糸で、餌は残飯でもなんでもよい、尺から尺五寸位のがチャン／＼上ります。

Yさん、Mさんなどが飛びつきさうな麻雀……

Cさんが持つたらよく似合さうな二尺もある煙管……

支那なか／＼面白い處あります。

Sさんに似た大人が多勢居ります。みんな良民あります。

オヤッ！何處かで機關銃を撃ち始めやがった。

失禮

十二月廿八日

牧 三之助君 (商關係)

愚かなる我が子ながらも國の爲め

召されて出づる今日ぞうれしき

私が入營の當時亡父が詠んだ歌です。それより數へて十六年目、今日こそほんとうにお國の爲め、君のため身を捧ぐる秋が來ました。

腰部隊でした。

杭州城内の滞在六日にして、又々上海と杭州とを結ぶ滬杭甬鐵道の斜塘江橋の警備を命ぜられ、元日匆匆行軍を起して、去る八日任地に到着しまし。

た斜塘江は河幅約二百米、太湖に通ずる大河です。北方太湖方面の山嶽地帯には、多數の敗殘兵が居り、夜間など部落を襲撃

するらしく、間近に銃聲が聞えます。そして背から胸へ突き抜けるのではないかと思はる、寒風に、堪えられない氣持をヂツと忍んで、歩哨、警戒の任に就いて居ります。

食料の配給も届かぬ第一線の迎春は、屠蘇もなく雜煮もなく、酒は勿論のこと、僅かな支那酒に南京豆一握りの御馳走でした。我〇隊〇〇名、東天に向つて遙拜し、食事も鶉呑みで任地に向ひ行軍を起したのが元旦の朝でした。

元旦の朝から行軍十里なり、

戦さする身の夢は我が家で屠蘇をのみ、

行軍は足より勝が前に出る、

任地では鐵道警備の他、附近に點在する村落へ出かけ、敗殘兵の有無や民情を調査し、或は村民の宣撫をやつて居ります。同文同種のことゝて通譯もなく、紙とペンと手眞似で話も通じ結構用も足りません。

村落へ出掛ける時は銃剣をつけて、少々薄氣味悪いやうな思ひで出かけますが、村民は何れも譯の分らぬことを叫びながら逃げ出します。

「僞們不要嗜怕」(皆心配しなくてもよい)

と呼びかけてその中の一人を捕え「僞識字的來」と言つて字の讀める者と呼ばせ

「大日本皇軍貴村保護一般人民安心就業」

と筆談すれば、彼等は兩手を袖に合せ片足をついて三拜九拜、我々の敵意なきことを了解して大聲に叫びますと、老人、子供

焼け落ちたる人家、我が軍を悩ませる縦横のクリーク、海岸線に連る網の如き鐵條網、支那正規兵の屍體にて埋まり居る散兵壕など、敗殘支那の悲惨な姿は到る處に見られ候

其後同地點より移動仕り、現在は虬江碼頭と呼ぶ黃浦江上の波止場にて作業致居候

上海は昨今早くも明朗化致し、虹口附近、日本租界附近にも支那士民が歸還し居り、吳淞路にある日本人街も日一日と繁盛致居候

南京城も陥落致し、やがて我々部隊も移動する事と存候。その後の國際情勢は如何かと存居候も新聞も稀に見るのみにて、唯作業の連續に有之候

出征以來多大なる御援助には嘗つて背かざる覺悟に有之、第一線部隊の如き赫々たる武動は無之候も、小生の有する全力を以て、皇軍の一員として恥しからざる行動可仕、馳て凱旋仕候節は御禮の爲め眞ッ先に馳參じ可申候

一月五日

昨年十月〇〇日入營以來、廣島、佐世保、朝鮮〇〇を経て、初めて杭州灣より敵地へ上陸、現在上海より一里離れた虬江碼頭に居ります。

さうして早や夢のやうに丸三ヶ月を過してしまひました。寒暖の烈しい氣候、飲みたい飲みたいの水もなく、クリークの溜り

まで一人寄り二人寄り、次第に大勢となつて我等を取圍み、今度は此方が逃げ出したい位の不安の中にも、猶筆談を交します。歸るときには「借光」「謝々」と言ひながら見送つて呉れます。昨今は巡視に出かけると覺えの早い子供達は

「お早う!」「ありがたう!」

など、言つて親しさうに近寄つて参ります。又各部落からは大猪、鶏、煙草、燒酒等を「献上」と書いた目録をつけて駐屯所まで持参し、兩手を袖に合せ片足をつけて頭を下けます。その有様は、昔、三韓征伐の折、高麗人が貢物を献納したことなど思ひ出されて誠に感慨無量です。これ等は眞に御稜威の然らしむる賜で、皇國に生れあはせた我々は其の幸福を感ぜずには居れません。

一月十五日

牧田 魁君 (通賣係)

去る十月廿一日東京出發、杭州灣より初めて敵地上陸仕候當日は暴風雨を衝いて上陸を敢行、泥水を分けて前進致し焼け落ちたる民家に一泊仕候

上陸地は浙江省〇〇縣にて此處を中心として金山衛城、金山嘴鎮と作業を續行致し保定陥落の名譽ある〇〇部隊及び〇〇、〇〇部隊の將士と共に最も張切つた日を過し候

水で飯盆炊事、むせるやうな支那民家の中で藁を敷いて睡眠を採る、晝は物凄い繩に苦しみ、夜は疲れ切つた手足に夜冷が迫ります。

約三ヶ月近く連日晝夜兼行の作業ばかりで、朝は七時半より夜は眞夜中の四時過迄も、或る時は彈藥を背負ひ、泣きたい氣持、放り出した氣持で膝まで海水につかつて作業しました。

特務兵二等兵のことゝて、我々以下は一人も居りませんから「可愛い新兵さんには暇がない」の文句通り、作業が終れば掃除、掃除が済めば炊事、たまには便りをと思つても、作業で疲勞し切つた五體は、只眠るだけ、この一睡が全く我々の天國でした。私達は今、黃浦江岸に居ります關係上、よく赤十字船に乗つて看護婦達を通るのを見受けます、丸で小粒に見える其等に向つて手を振る我々、材木を肩にし、炭を運搬して眞黒けになつた顔に汗一ぱいで、滅茶苦茶に手を打振る我々、美しい外國船が通り、支那特有の乞食船が通り、

やがて美しいもの、總てを失つてしまつたやうに、茫然として立止まる時、空には無数の鳥と、我が軍の飛行機が飛んで居ります。

支那の天候は我々に幸ひして、毎日麗らかな好天氣です。我々も又張切つて支那士民を後棒にして材木かつぎの競争です。支那正規兵も使つて居りますが、士民と異り態度からして非常に敏捷です。

大男の然も長腰の支那人、ほろ服とカンカラ罐を持つて殘飯を

食べる支那人、撰たれては撰たれては奇妙な聲で反駁する支那人、大毒と腐れか、つたやうなとても臭い支那人、兎に角毎日三百人許りの支那人を使つて作業して居ります。

私達は上海へよく出懸けます。日本人の居る吳淞路の租界を除いては、人通りも絶え焼盡した民家ばかりです。陸戦隊の警備兵と、我々のやうな上海近郊の部隊の兵と、ほんの少々の商賣人と、日本人租界に居ると云ふ名目の支那人と、泥水女ばかりです。

美しかつた目貫の支那街も、その人情風俗までも凡て失せ果て見る者は我々のやうな兵隊ばかりです。英國の警備兵も隣合せで居ります。

南京へ南翔へ鎮江へと、我々と共に居た部隊の者も移動して居ります。戦局も又一六轉換して、〇〇へ移つて行くかのやうに思はれます。

一月十六日

丸杉喜代太郎 (賣場係)

私へ来る手紙が一番多いので戦友から羨しがられてゐます。北支は既に雪です、五、六回降りました、非常に寒いです。現在本隊は京漢線と津浦線の間、河北省と山東省の境〇〇(威縣の南方)に居ります。

十二月二日

十二月十五日大名にて本隊に追ひつき、支那二十九軍の泥の兵舎に十日餘りを過して、此處を出發、廣平、成安を経て再び邯鄲に参りました。

人馬の髭も、水筒の水も凍り、アイス飯を食ふことを餘儀なくさせられます。薪が一番不自由で、之が發發に小隊を編成して二、三里位行軍します、寝具は毛布一枚に外套だけです、夜明けなどとても眠られませぬ。

慰問品の數々、一つ一つに熱情のこもつた品を戴いた嬉しさ、ほんとうに皆様の御厚意は終世忘れませぬ。皆様からこんなに送していただく私は幸福者で、戦友の羨望の的(め)です。厚く御禮を申し上げます。私だけで独占するのは勿體なく、慰問袋の入手も出来ない、淋しい氣の毒な戦友に頒け、ともに喜んで皆様の御志を感謝して居ります。

第〇〇團は順徳に集結、〇〇隊は第一線に待機して居りますが目下休戦状態です。只今は餘り不自由な品もなく、漸くのんびりした氣分になれます。唯、薪と水だけには困ります。

お正月は邯鄲に迎へます。只今既當番で焚火の光でこの手紙を書いてゐます。石家莊に松坂屋の酒保があり、名古屋から出張してゐるとのことでした。お店の方にも二、三遭ひましたがお

本隊は毎日の行軍で、兵士の靴下、手袋は破れ衛生材料も缺乏、現在の防寒具ではとても來るべき寒氣に堪えられぬ爲め、私は隊より選拔せられた八名の中に加はり是等の運搬と郵便連絡の任務を帯び八、九十里の道を戻つて只今石家莊に参りました。

順徳より南和、平郷、威縣への輸送は吹雪の中で、それに加へて車軸を埋むる泥濘路、飢と寒氣に馬は進まず疲勞困憊、遂には戦友と共に茫然自失、男泣きに泣きました、一と思ひに彈丸が飛んで來て命中して呉れたらと幾度願つた事です。

此地方は河北省排日の根源地と謂はれ、女子供に至る迄抗日意識旺盛にて最も危険なる爲め、南和鎮守備隊長は斷乎市中の掃蕩を決意、吾々兵站輜重にも協力を求められました。

私は眞先に志願して掃蕩隊員となり、十一月十八日私としては最初にして最後の支那人斬殺の體驗を得ました。

同日午後〇時半頃城壁と池の間葭の中に五十歳前後の不審な男を發見したので、特に分隊長に願ひ、戦友から借りた日本刀で斬殺しました。

私は自宅に同居してゐた木原君が上海にて戦死し、従弟が重傷した復仇のつもりでやりました、なか／＼思ふやうに斬れるものではありませぬ、最初に肩へ——眼を閉ぢて斬付けました、(首は地につけて斬らせないので)あとは思ふ存分斬つたり突いたり——殺人の手際は下手でしたが仇は討ちました。

入店日淺き私が皆様より想像以上の御面倒を見て戴く事は終世忘れませぬ、しつかりやります。

れも支店の方ばかりでした。

十二月廿八日 北支邯鄲城外陣中にて

松本源藏君 (庶務係)

南京攻略後、直ちに杭州攻撃を命ぜられて前進中、同地は第〇〇團第〇〇〇團により十二月廿七日に占領せられし爲め、我が第〇〇團は途中から湖州警備を命ぜられ其任務に就きました。愈々是からは生命には心配なしといふことになり、又通信等も便利で、手紙を書く暇位はあるやうになりました。

これから上陸以來の戦況概況を申し上げます。先づ十月〇〇日午後四時〇〇港出帆、杭州灣金山衛城上陸の目的でしたが、上海の背後を衝くべく我が矢ヶ崎部隊の〇〇隊

〇隊、及び〇〇部隊、〇〇部隊等第〇〇團全部が上陸することを知つた上海の敵軍は總崩れとなり、我々の攻撃を待たず、〇〇部隊だけに占領せし爲め、第〇〇團は嘉興、湖州、長興を占領更に南京目指して猛進を續けました。

一方矢ヶ崎部隊〇〇隊即ち我が隊は〇〇砲兵隊と共に上陸すること困難の爲め上海に廻りて、同砲兵隊を援護して上陸するや直ちに南京攻撃の命を受け、途中殘敵を掃蕩しながら南京を目標に本部隊と合流すべく急進しました。

愈々十二月九日南京總攻撃、第一線に進出して敵のトーチカを

真正面に猛撃中、不幸にして矢ヶ崎部隊長は迫撃砲弾の破片にて頭部及脚部に重傷を負はれ、歩行困難となりし爲め、擔架の上から指揮を続けられました。これは、當時新聞紙上にて御承知の事と思ひます。

明ければ十二月十日、我が隊は第一線に急速進出すべしとの命令下り、敵前二百米の地點に散開、前進しましたが、敵は堅固なるトーチカ陣地に據り、此處を最後とばかり、迫撃砲、重機銃、小銃等を猛射して頑強に抵抗するので、我が軍も前進困難となり堆土を利用して停止中、又も迫撃砲の集中射撃を受け、見る／＼戦死六名、負傷七名を出し、已むなく一時、二千米許後退しました。

其際私も右手に軽傷を負ひましたが、先日も申上げました通り今は全快いたしました。

その後、戦況は愈々我が軍に不利にて後方より援護射撃中の砲兵すら後退の已むなきに至り、我が隊は餘り負傷著多き爲め遂に豫備隊となりました。

翌十一日午後八時、再び第一線へ進出命令あり、田の畦傳ひに前進、敵弾は全く雨霰の如く飛來し我が戦友を各所に倒し、實にこの進出は困難極まるものでした。

此時又も私は右足に軽度の擦過傷を負ひましたが、夜間のこと、て見る／＼とすらすら出來ず、巻脚絆の上から纏帶して置き、翌朝見ましたが幸ひ大したことなく其儘前進を続けました。

愈々十二日拂曉より猛撃又猛撃、大激戦の後、午後二時、遂に

願へば「必死」の一語に盡きる緊張で御座いました、然し戦死傷者數多き中に、私は微傷だに受けず第一期戦を終へたることは、皆々様の加護と天祐によるものと深く感謝して居ります。十一月第二期戦に入りて山西省に轉戦、娘子關の南方約十里、大行山脈の最大難關たる九龍關を抜き、多くの尊き犠牲を拂つて、共産黨の本場昔陽城に入城しました時の喜びは、眞に譬へやうも御座いませんでした。

其の間、零下五度以下の寒さに焚く木切れもなく、又飲料水もなく、戦闘と追撃を重ねて、山西入り以來十八日目に太原の警備に就きました。

昨今は治安も回復され、避難民も追々と歸來して首義門(北門)前に溢れて居ります。大道に物賣る商人の呼聲も高らかに、日章旗、五色旗の風に翻る光景も誠に意義ある如く感ぜられます。然し未だ敗殘兵出沒し、之が討伐に参加して居ります。

山西、河北二百有餘里に亘る山野を、敵と戦ひ悪路と闘ひ、あらゆる戦争の苦難を経験したのですが、今は其の苦痛も過去の思ひ出となりました。けれども今にして腦裡を去らないものは敗戦國の哀れなる姿と、戦場と化した國土の慘状とです。

決して敗戦國となつてはならぬと深く感じ、又日本國民に生れた有難さを痛感して居ります。

十二月廿六日

南京占領の目的を達し、思はずも涙を流しました。

十二月三十日

松本久男君(庶務係)

天津出發後、河北省の南和を經由二百里以上の行程にて、去月以來山西省の首都太原の警備に就き、郊外の晉綏陸軍教導軍官學校に宿營致居り候。

此處は首都だけありて、電話、電燈もあり近代化致され居り候も、戦後の悲惨なる市街の有様は敗戦國のみじめさを物語り居り候、昨日は自治復活國民大會にて旗行列、夜は提灯行列等催され候。

天津出發以來僅か二、三日の雨と雪と有之候のみ毎日快晴續きにて至極凌ぎよく候へども、山西省特有の砂塵に吹きまくられる時は仕事も出來ず相成候。

十二月廿三日着信

九月〇日天津より追撃に追撃を重ね、平漢線高邑より七、八里南方の唐山にて一戦後、始めて十日間の休養を與へられ、一ヶ月目に漸く戦塵を洗ひ落しました。

松澤正男君(庶務係)

小生宿泊地は目下内地の十一月初旬の如き氣候にて案外の感致居候。

小生の部隊にては年賀郵便は全然中止せよとの命令有之候爲め意外の失禮仕候何卒事情御諒察被下度候。

南京陥落後〇〇地へと我が軍の猛進は全く驚く程にて、我が隊も晝夜を分たず任務に服し居候。南京陥落の節は盛大なる祝賀會を舉行仕候。支那人も他人事の様にて我等と共に喜び居候有様を見ては、彼等の心理果して奈邊にあるや、敗戦國の人多くを語らずと雖も、眞に意外の感に打たれ候。當地方は平和氣分満々たるも、戦は猶擴大致候由にて候。

我が隊にも多數の敵正規兵を收容致居り、あらゆる任務に従事致させ居候。

一月四日

小生最初の戦闘地帯金城内外には澤山の畠有之、附近に住む土民の家屋は内部は皆土間に、片隅に板を打付け、中に布を張りたる寢床あるのみにて候。日本家屋の如く座敷などは全然無之、一寸晝休み時などは土間に藁を敷きて休む有様にて候。これ等の家には嬰兒、子供、老人が居住致居り、十五六歳以上三十五、六歳位迄の婦女子は一人も居らず候。之は土民共が晝

間だけ納屋の地下道内に隠し居るか、或は他に逃げたるものにて候

或る時、或る家にて、嬰兒が居り母親の居らざるは不審なりとて家内を搜索せし處、遂に穴を發見致候 其の穴と申すは竈の下に作られ居り、その上にて火を焚き居り候が、竈の前の土が色枯く少しく盛り上れるを不思議と存じ、銃剣にて突きしところ蓋がはづれて穴が現はれ出で候 直ちに戦友に見張りをたのみ他の戦友と共に穴の中に入りしに、穴は後方クリークの下を過ぎて畠の一端に抜け居り候 内部は三人位並びて歩行し得る程にて、時には此處に銃機、彈藥等の隠匿され居る事も有之候 住民は我が兵の近づくるを見るや、一齊に日の丸の旗を持ちて出迎ひ、紙片或は布きれを見せ候 之は金山城を取締る憲兵曹長の「回歸人士民章」にて善良なる土民との意味を記したるもの候

又彼等は五錢或は十錢白銅貨の穴に紐を通して之を頸に吊し居り、この紙片又は白銅貨を我々兵に提示して自己の悪意なきを表明致居候

然し支那人は我々の後姿を見せし所を狙つて發砲する事あり、危険なる爲め一定距離まで前方を向きたるま、後退すること、致居候 後姿を見せし爲め射撃せられ負傷せし兵も三、四有之候

或る時、我々が土民の家に参り候處、恰も晝飯時にて、南京米に甘薯を入れ、鹽にて味をつけたる粥を、眞黒な器に入れて茶

ふと云ふだけの新年でした。

然し正月二日に戴いた慰問袋に依つて大いに元氣づけられると共に一入内地の正月が懐しくなりました。

今、自分達は鎮江といふ街（人口十八萬とのこと）に警備して居ります。此處は爆撃されなかつた爲め、電氣もあり、立派な建物もその儘で、先づ野戦宿營地としては申分のない處です。然しこんな處は、割合に永く居られないもので、全く意地の悪いものです。

内地は何景氣といふか、お店もなか／＼成績が良いとの話、陰ながら御喜び申上げます。

自分の今の最大慾望は……

- 一、良い音楽映畫を見たいこと。
 - 二、安心して飲める生水を腹一杯飲んで見たいこと。
 - 三、疊の上でぐつすり眠りたいこと。
- 先づこんなものです。戦地に來てから全く子供になつて仕舞つた自分の心を、自分ながら可笑しく感じます。

一月十四日

船 木 信 三 君（雜貨賣場係）

十一月六日附御手紙十二月五日拜見致しました。

小生等の部隊は過日北京を出發以來、行軍又行軍、只今は山西

と共に我々の前に出されし時は、全く閉口致候 何卒食して呉れとて一家總出の歡待には空腹も一瞬にして満腹致候 これは全く我々共の口には適せざる代物にて候

行軍の途上、クリークの中に我が兵に刺殺されし者、或は戰鬥の際流彈に斃れし者等の屍體無數に浮べるを見候 我々も便衣隊と覺しきもの四、五名を銃殺致したること有之候 彼等便衣をまとへる敗殘兵を發見する一番の早道は、その手と頭部顯顯の所、或は胸に残る彈帶を負ひし痕等を見ることに候 斯様にすれば如何に便衣とは云へ土民ならざるを知り得べく、直ちに一發のもとに銃殺致候

これ等は近距離にて射つ爲め百發百中、其の倒れて苦しむ有様を見る時は聊か痛快に候

或る時、部隊の宿泊せし家より機密箱と稱する小箱が現はれ候 その中には地圖有之、東京、横濱、神戸、門司等主要都市の上に赤線をひき、要所々々に記號を附したるものにて赤線の範圍内は空爆すべき都市として記載され居るを見たる時は、實に彼等支那人も相當なるものとの感に打たれ候

一月廿一日

松 波 一 二 三 君（新宿支店）

樂しかるべき正月も、野戰にては何の興味もなく、全く歳を拾

省の清源といふ町に來て警備に就いて居ります。

此處は太原の西南方約二十里の最前線です。此の間百二十里餘命懸けの戰鬥と行軍を續けました。最初は米もなく畑に行つては薯をかぢつたこともありましたが。砂糖や味噌など全然なく毎日豚を殺してたべて居ります。

最近では南京米があたるやうになりましたが、それも今では少しになりました。

最前線へは通信など勿論、食糧さへ満足に運送出來ないので煙草も勿論ありません。

こんな所ですから小包や慰問袋等、いつ手に入るやら判りません。最近では毎日歩哨と討匪戦ばかりです。

戰場では自分の隊のことだけで、世間の事は全く不明です、戦況のニュース其他をお知らせ下さい。

今後又前進する様子ですから、當分通信出來ないかも知れません。

十二月六日

小生も皆々様御後援の下に、相變らず元氣旺盛で、現在も北支山西省の最前線に於て。敗殘兵や匪賊の討伐を、間斷なく敢行して居ります。

一方、地方住民に對しては、正義日本軍の行動を了解せしむる爲め、宣撫工作を續行して居ります。此頃では附近一帶極めて

平穩で、住民も我々によく親しみ、各自商賣や仕事の傍ら何事によらず手傳ひをして呉れます。

寒氣は昨今零下二十五度内外で、雪は降りません。此處は山西の奥地とて、従軍記者など勿論來らず、郵便物等も。内地から十月頃差出したのを今頃入手する有様です。

斯く交通不便な現地第一線に於ても、正月には内地の御馳走や御雑煮など澤山に戴き、皆喜んで故國の思ひ出話に花を咲かせました。

無敵皇軍の後に、力強い國民の援助あるを思ふ時、衷心感謝に堪えない次第であります。

只今執筆中、店の國防婦人會御一同様からの慰問袋を受取りました。分隊員一同にも分けて戴きます。どうぞ呉々もよろしく御傳へ下さい。

一月十六日

伏木保男君(銀座支店)

去る九月十三日永定河の戦鬪が始つて以來、九月二十六日保定に入城までの十四日間は、短くてそして又頗る永い十四日間でした。激戦又激戦、晝夜の別もなく、食はず眠らずの戦鬪が十四日間續きました。

私は食物の關係か、強行軍の爲めか、飲むだ泥水のせい、保

内地も正月までに三旬程、九時から九時迄、皆様の御苦勞もよく知つて居ります。九時々のあとに、楽しい正月が控へております。

十二月十一日

私達にも苦しいあとに、楽しい凱旋があるでせう。

北支の正月も内地と同じだ。

一寸心配してゐたお雑煮も、元旦の朝大きな奴を三切か四切か食つた後で幾らでも附焼でも餛飩でも食へると云ふ譯にはいせんが、戦地の正月に雑煮も祝ひ、きんともあり、君の好きな鯛、蜜柑もあり、贅澤過ぎる位だ。

暮の〇〇日に〇隊全部、大名(註、河北省南端に近き處)へ移つて來た。大名は〇隊主力の在る處で、到着した日、久振りに軍旗も拜した。

〇〇驛から約二十里、二泊行軍だが、行軍は九月末以來久し振りなので参つたね。此處へ着く日、足をまめだらけにして、フウ／＼云ひながら歩いてゐたら、本店の高橋源次郎君(計算係)が追ひついて來て、一時間ばかり話しながら歩いた。高橋君は飯野さんの息(誠、雜貨仕入係)にも逢つたそうだ。七中隊と八中隊なので隊に居りさへすれば會ふ事がある、遠い他國で知人に遇つた時の氣持は想像に任すよ。

〇〇君や君達とキャンプなんかに行つた時は、俺はそんなに足

定に到着と同時に、すっかり脚氣にやられて、我慢にも中隊に追及して先へ行くことが出來ず、とう／＼九月二十八日に保定の野戰病院に入院し、次で北京へ後送となりました。一時は可なりの重症にて内地送還説もありましたが、若し内地後送にでもなつたら、それこそ銃後の方々に何と申譯が立ちませう、我れながら沈痛な思ひで居りましたが、北京へ來てから日に日に快方に向ひ、此分ならばと軍醫の注意通り、食餌療法其の他氣をつけて養生した爲めか、幸ひにも全快いたし、只今は順徳に於て日毎々々の勤務に就いて居ります。

順徳は駐屯守備ですから、激しい勤務の辛さもありますが、無勤務の時は天下泰平で、内地の人達の想像もつかない愉快な出來事もあり、割合に暢氣な面白い日が續いて居ります。

北京から一人で中隊を追つて順徳へ來る途上、貨車の中で本店五十番の丸杉喜代太郎君と云ふ人に偶然會ひました。私は知りませんでした。この貨車に三十人程の將兵が居り、隅の方でデパートとか、百貨店とか云ふ聲や笑聲がします。何の氣なしに聞いておりましたら、特務兵の丸杉君、少尉で上野松坂屋の店員、工兵上等兵で白木屋の店員、それに私と、デパート店員が混合の將兵の中に四人も居り、廣いやうでも狭い北支だと云つて大笑ひしました。

退院以來、勤務々々で忙しい日を送つて居りますが、もう、すっかり元氣です。御安心下さい、どんな戦鬪にも参加が出來ます。

の弱い方でなかつたが、軍隊に來て全く弱いのには驚いたよ、他と同じ行動を取らなければならぬから、随分苦しい時もある、まあ、せい／＼ハイキングでもやつて足の鍛錬でもして置くことだよ。

一月元旦

俺はお蔭で元氣だ。何か變つた事があつたら、知らせてくれ給へ、元氣でやれよ!

御多忙中を色々、我々出征兵に對しての御心盡し、全く御禮の申上げ様もありません。

此の處別に申上げる程の事件にも出くはしません、昨日久しぶりで、現在地より北方四里の地點に討伐に出動し、數十の數を倒して之を北方に追撃して引揚げました。

此の日起床は午前二時半、闇を衝いて私の中隊と〇〇砲隊、〇〇銃隊が戦友に見送られて出發しました。夜の白々明けに、目的の地より三里半前方の〇〇店に到着、部落より敵の亂射を受け直ちに應戦して之を占領し、猶も逃げゆく敵を部落から部落へと追撃して四散せしめ、凱歌を揚げて引揚げました。

幸ひ我が方に戦死者はありませんでしたが、指揮をして居られた〇〇隊長殿が、右腕に貫通銃創を負はれて、今日入院されました。軽くあれかしと祈つております。隊長殿は去る九月二十三日、大冊河の激戦以來、二度目の戦傷です、私も御蔭で終

始第一線で敵と銃火を交えましたが、無事でした。

此頃ではすっかり馴れつ子になり、敵弾下で伏せながら、戦友と顔を見合はせ笑ふゆとりも出て来ました。まだ、周囲の敵も相當にあり、油断とはなりません。

昨今は支那の臭い食物にも馴れて、何んでも食べます。大蒜も馴れ、ば落花生の味位あります。すっかりニヤヤ臭くなつてしまひました。チャン酒、幾らでも買って、飲めます。

「出動！」「そら討伐だ！」今日あつて明日無い命……

酔つぱらつてぐすつても戦には強い日本兵です。

無精髭は生やしても銃と劍の手入れは怠らず、よく行届いて居ります。

三日月に歩哨の誰何やえ渡り

今晚は満月ですが、雲が出て時々闇くなつたり、明るくなつたりします。昨日討伐に行つた名残り、兩股殊の外痛し、往復十里餘、一寸こたへます。

嗚呼：戦場の月：感激は、思ひ出は、やはり東京の空へ……此の月を内地の皆様は又違つた氣持で見居る、こととせう。餘りセンチになりますから、此の邊でランプの火を消しませう。

一月十五日夜

した。其の後松井様や渡邊様の御便りにて漸く所在が分りました。

十二月上旬着信

小林 安 三 君 (吳 賣場 係)

永い間汽車に乗つて、十二月二十日夜漸く北支の〇〇驛に着きました。實に廣い平野に人家も少なく、聞いたよりはまだ、大陸的な光景です。

驛には殆んど物貰ひのやうな人ばかりで、女の姿は見えない。處々に土を盛つた墓地があり、其他は土や石造りの家ばかり、河は堤防がないのでいやに廣く見境がないから、何となくだしがない。

〇〇驛も大きい電燈が少なく、それに苦力が多勢ゐて彩りもなく眞暗な感じは、それには驚く、小ざつぱりした人間が居ない、皆バタヤの格好で兵隊の残飯を貰へば上等に心得てゐる、全く負けると哀れなものです。

此處は食料、日用品等充分で、酒保へ行けば何でもあります。學校は皆石や煉瓦造りで、小學校、中學校など日本の大學位、良く出来てゐて一般民家に比して驚く程立派です。

小林 岩 次 郎 君 (吳 賣場 係)

懐かしい御便りを有難う御座いました。

十一月十一日附の御便り十一月廿七日〇〇にて入手、之が最初のもので御座いました、それ前にも〇〇隊宛で御出し下さいました由誠に有難う御座います。

第一線に出ましたのが十月十九日、一日も早く部隊名をお知らせ御禮を申上げるべきでしたけれども、敵弾の飛來する場所では思ふに委せず、又後方へ下がつても夜分は蠟燭をつける事も出来ず、眞闇です。

然し皇國に報ゆる爲めには少しもつらさなど考へません、自分の體の續く限りやります。

戦線に於ける或る一時、亡き戦友の靈安かれと祈つて、遙か東京の方に向き直り、皆様の御無事を祈ると共に「小林も元氣で居ります、どうぞ御安心下さい、力の限り戦ひます」と心に叫びながら熱涙にむせんだ事は何度とせうか。

センチな事を申上げて済みません、御許し下さい。十月廿九日の讀賣新聞千葉版に私の寫眞が出て居ります。それは戦友の妻君が戦地へ送つて呉れたので初めて知りました。皆様！大場鎮の一番乗りは我が〇隊です。

それから有田(眞啓、吳服賣場)君の事ですが、戦友が十一月廿五日追撃砲彈の爲め左手をふき飛ばされたので、四里後方の〇〇部隊まで運びました時、色々尋ねたけれども分りませんで

新聞がないので、其後の戦況は全く不明、東京の方がよく判ります。

北支へ来て東京を願へば實に有難く、こちらは總て五、六十年遅れてゐるやうです。自動車などはなく、東京邊では捨てるやうな自轉車を大事さうに乗つてゐます。人力車が交通の大部分を占め、五、六臺位走つてゐる時は、淺草田圃でも通るやうにハ、ホ、と掛け聲で、面白い光景です。

十二月廿二日

賀 正

千里離れし戦地にて元旦を迎へ誠に意義深きものがあります。大陸の寒風吹きすさび一回の雨もなく、黄金色の砂が飛ぶ其中を、支那人は平氣で大道に食物を出してたべてゐる。實に普通では考へられない位です、顔も眞黒く着物も黒く家は灰色にて、何となく陰氣臭く亡國の感じが濃厚です。

駱駝が五頭十頭と荷物を運んでゐる様は、又實にのんびりとしたものです。

一月三日 (北支より)

小林 弘 道 君 (銀座支店)

御無沙汰いたしました。御變りは御座いませんか。

小生南京まで参りました。晴れの入城式（十七日）に上海から約八十里、乗馬で行軍いたしました。元氣で 宮殿下の許に働いて居ります。

どうぞ皆様によろしく……呉服の中村君に會ひました。

十二月十九日

皆様御元氣ですか？ 小生も元氣で新年を迎へました。

戦地の正月も早や半を過ぎました。静かな荒都、全く感慨無量です、現在は砲聲も轟かず寂しい位です。

何れお目にかゝれるチャンスが来れば、ゆつくり御話し申上げます。

一月十八日

小林 喜 作君（庶務係）

昨午前中より降り出した雨は雪となり、南京城内一帯綿帽子の風景となりました。

前駐地上海は、一ト冬に雪を見るのは四、五回位とのことですが、南京はそんなわけには参らず、幾分か寒さも厳しいやうに思はれます。

上海出發以來五日間、松江、金山、楓葦鎮、嘉善、嘉興、平望

水は上海邊りよりはすつと良いやうです、上海附近はアルカリ性水質なれど奥地（西方）へ進むに従つて飲用に適する井戸が多くあります。この手紙の届く頃には又上海の悪水の御厄介になるかも知れません。

支那人が毎日使役に来てゐますが、文盲が多く、中には「蔣介石」を知らない人間がゐます。歸りには残飯を持たせてやりませぬ。

僕等は支那に生れ、支那に育てられないで、實に幸福である事がよく判ります。全く日本の有難さが身に沁みて参ります。

十二月廿三日午前三時三十七分

小 貫 一 郎 君（外賣係）

我が部隊も急激なる前進攻撃により戦闘開始以來二ヶ月餘、既に北支平漢全線を占領致候。友軍にも相當犠牲者を出し候得共支那兵の戦死傷者は八萬を超ゆるとの事に候。到る所死屍累々として、野犬の之を喰へる様を見ては、眞に亡國軍の哀を感じ候。

我が部隊は要所々々の守備に就き、本部隊は只今〇〇に入城の上休泊、待命致居候。

本日午前二時頃、突然宋哲元麾下の敗殘兵約三百、闇を衝いて

鎮、朗溪、溧水と新軍工路線を、自動貨車で行軍して参りました。途中、悪天候、悪道路と焼失せる橋、各所に潜む敗殘兵の來襲とに悩まされながら、去る二十五日午前十一時過、南京南門外へ到着、午後〇箇小隊の自動車（約〇〇〇臺）で入城致しました。

城内の要所には高射砲が土囊の中から首を出して、我等の入城を迎えてくれるかの感がありました。

現在は西門に近い中央政治學校に居ります。隣には第〇〇團第〇野戦病院が開設されて居りますが、患者は〇〇〇名足らずです。當部隊では〇〇日現在收容患者〇〇〇〇名を算する状況です。〇〇日第〇〇團編成の兵站病院が参りましたので、近い中に城を明け渡し、再び上海に歸還、待機する筈です。

南京へ来てから手紙が一本も来ないので、今日午後でも有無を確める爲め、下關碼頭まで連絡に出したいと思つて居ります。

酒保は移動式で、支那風の幌型ポロガタ自動貨車でブウ／＼やつて来ては兵に物を賣つて行きます。兵站部へ行くと裏長屋のやうな所で酒保を開設してゐますが、高いので閉口です。

理髮は支那床で丸刈顔剃で十五錢とのことです。隊へ二人位床屋を連れて来て、五錢位に値切つて斬髮をやらせたいと考へてゐます。學校の構内には、色々の建物があり、理髮室も完備してゐます。

〇〇日は朝香宮殿下が御出でになるので、午前中に早く雜務を整理したいと思ひます。

迫撃砲、機關銃を以て我を襲撃し來り候。我が兵は無慘にも故郷の夢を破られ、俄破！と跳起きて直ちに之に應戦、夜のしままを破つて戦闘三時間、東天漸く白む頃、敵は我が猛射に堪え兼ねて退却致候。敗殘兵は食糧缺乏の爲めかちよい／＼オツな眞似をやらかし候。

封筒品切にて之は拾ひし支那封筒なれば、御連名何卒御許し被下度候 敬具

十一月十二日

戦野と化した北支にも、太陽の昇るが如く刻一刻、日一日と以前にも増して平和な境地在り居ります。

私達が磁縣に入城してより早くも一箇月半、暴戾なる支那軍に追はれた市民も、漸次我家に歸り嬉々として働いて居ります。

自分の郷土は戦禍の巷となり、兩軍の砲火の爲め或は破壊され或は燒盡された家や財寶を思ふ時、彼の支那人特有の心情から推して、如何に残念であらうか、思へば實に哀れな人達です。

敵國とは云へ一般民衆は皇軍の敵ではありません。今日では臨時政府が出来、過ぎ去つた兩軍の戦も忘れたかの如く、日本軍を信頼して各自業務に精進して居ります。

南京陥落に際しても、自分の國が破竹の勢の皇軍に撃滅されやうとしてゐるに拘はらず、我々にお芽出たうと言はんばかりに旅行列や、提灯行列で祝つて居ります。

自分の國が攻められつゝあるのを知りながら、皇軍の戦勝を祝ふといふことは、ちよつと不思議であります。然し日本軍は暴虐なる支那軍と異り、心からなる愛情を以て民衆の保護に力を盡して居りますから、皇軍の勝利を祝するのは、寧ろ當然かと思はれます。

生みの親より育ての親のやうに親しみ深いものと思ひます。兵隊を見ると、ぶる／＼慄へてゐた老幼男女も、近頃では日本の兵隊さんと戯れて居る有様です。何んと和やかな光景ではありませんか。

一日も早く東洋の平和を齎し、益々國威を海外に宣揚しなくてはならぬと思ひます。

十二月廿四日

小宮意三郎君（庶務係）

遠く故郷を離れて早や五ヶ月、幾多難關を突破して困苦缺乏に堪え、我々砲兵の全力を遺憾なく發揮することが出来ました。これも皆様の御心盡しによるものと、今更ながら深く感謝致して居ります。

皇軍向ふ所敵なく、世界に誇る無敵陸軍の實力は、どんな難攻不落と頼む敵陣地も、我々の巨砲の一斉射撃には一とたまりも

なく、陣地も塹壕も火に包まれて黒煙天を覆ふその中に、やがて翻瀾とひるがへる日章旗を見る時、我々は思はずも萬歳を叫びます。

然し又昨日までの戦友は今日は歸らぬ護國の鬼となつて、新しく建てられた墓標に墨黒々と書き残され、誰ともなく野花を手向けてあるのを見る時、何かしら熱いものが胸に込み上げて來ます。

今日も朝から降出した雪は、家も樹木も廣い平野をも埋め盡して一望の銀世界となりました。

こんな時一人歩哨に立てば、遠い故國のことなど女々しい様ではありますが、次から次と思ひ出されます。

私こと出征以來、砲撃、追撃又追撃、この里程實に二百數十里幾多の戦闘に参加して露營の夢を結ぶ事既に五ヶ月、只今は北支山西省〇〇方面に於て待機中でありませぬ。

一月十五日

小山隼人君（庶務係）

お蔭様にて頗る壯健、軍務に邁進致して居ります。

去る九月〇〇日より第一戦部隊として、死物狂ひの敵を追撃し十七日涿縣に入城致しました。

二十二日は保定附近の〇〇と云ふ部隊にて、敵の大部隊と交戦

掩蓋、銃座、銃眼の設備實に無數に點在する陣地に夜襲を敢行し、敵は無數の屍體を残して退却致しました。敵の屍體を見ると胸部に抗日青年、抗日學生と記入してありました。

敵が非常に日本語を使用するのには驚きました。

十月一日保定發、途中渡河戦、朝露の棉畑を轟々たる何臺もの戦車が進撃する有様は陸の戦艦のやうです。

十一日石家莊に入り、十二日午前三時半平漢線の列車追撃、十八日河北省と河南省との境にて敵の軍官學校の生徒と戦ひました。折柄敵は給料分配中にて、我軍は此時とばかりに夜襲敢行自兵戦にて敵を刺殺し、その屍體は山の如く積まれ砲車も前進出來ぬ位、實に壯烈でありました。

十一月四日河南省の重要工業地彰徳も落ち、黄河の線も眼前に在り、路は南方に赴くに從ひ濕地や河川が多くなり行軍に惱まされます。

食するに米なく飲むに水なく眠るに暇なきも、吾々は皇軍の一員であるとの尊き使命を感じる時何んの苦痛もなくなりませぬ。

十一月十一日初めて内地の便りを見ることが出来ました。三ヶ月振りにて入浴し、冬服も支給され、人間生活を味ふことが出来ました。

過ぎし戦に隊長殿を初め多數の犠牲者を出し誠に哀惜に堪えませぬ。只今は休養中、明日の弔合戦に奮闘致す考へです。

各部落には皇軍を歓迎する意味のポスターがあります。

◎日軍的新鋭軍機舉世無雙。

◎日軍的勇敢善戰所向崩潰。

◎日軍對中國之國民毫無仇親深望提携。

◎一人護路、萬民享福。

◎謀華北之永久和平福社現代爲千載一遇之機會。

◎打倒聯俄共之國民政府。

以上のやうなもので御座います。

昨今投降兵の多いのには驚きます。

十二月十八日着信

小坂橋五郎君（庶務係）

出征以來長期に亘り、御通信に御慰問品に、其他家庭御慰問等に至るまで、種々御後援を賜り、唯々感涙の外ありません。

私共北支派遣軍人も寅年に因みて元氣満々たる中に歳を迎へました。

支那は舊正月ですが、日本を祝する意味に於てか、各戸毎に五色旗を出し、敬意を表して居ります。

此頃は本格的の寒さとなり、零下二十度位まで下ります。私はおかけ様にて何の心配もなく、本當に安心して大元氣で自己の本分を盡すべく努力して居ります。乍他事御安心下さい。

一月十一日

一泊露營の夢を結んだ上海を後にして、長途の行軍と寒い假寝の夜を過しながら、閘北、龍華鎮、松江を経て當地金山に到着日夜不休の警備に當つて居ります。

敗色支那全土を覆ふ今日、殘敵襲撃の不安も逐日減少しつつ、あります。廢墟と化したこの町にも土民の復歸するもの急速に増加し、捕虜を役使して恢復に奔走する皇軍の努力と相俟つて、治安維持會も組織されました。

元旦には土地の要人十數名が「謹賀新禧」の名刺を持って挨拶に来る、子供等はお祝の花火を揚げて喜ぶなど、我々にも好感を與へて居ります。

宋美齡夫人も金山の出身とか？此の町は小さいながらも由緒ある町ですが、銃砲彈の洗禮を受けた今日は、見渡す限り燒野原となり、敗戦の慘狀を如實に物語つて居ります。

斃れた敵兵や軍馬は道路その他到る處に横はり、紛々たる臭氣を放つて居りますが、今では、これを見ても無神經になりました。屍體の浮ぶクリークの水も煮沸さへすれば平氣で飲めるやうになり、一人前の支那人になつた積りで居ります。

正月は老酒に豚汁で祝ひました。寒さは焚火と老酒で凌ぎ、寢床は藁とボロ着物で作りました。

我々の〇隊は〇〇名宛に分散し、松江より嘉興に至る約二十里の間を警備して居ります。

上海上陸以來、二回ばかり命拾ひをしましたが、皆々様に詳しいお便りをする時間のないのが残念です。

一月四日

後藤嘉一郎君（庶務係）

扱て我が部隊は去る十二月半過ぎ、上海の宿營地より太湖の南岸吳興（湖州）まで出動、途中大部隊の敗殘兵に襲撃を受け候へしも、幸ひ當方には何等の損害もなく擊退して使命を達成し上海に歸還仕候

其の後休養の暇もなく南京に前進、蕪湖、宣城（寧國）方面に度々出動仕候 同月三十一日、宣城を去る八軒の地點に於て、又々敗殘兵の襲撃に遇ひ、交戦、敵に相當の損害を與へ、これを潰走せしめ候得共此の戦闘に於て上等兵杉山氏（牛込出身）は胸部に貫通銃創（一ヶ所）を受け、當中隊最初の名譽の戦死を遂げ申候

想へば當中隊は北支各地に於て、幾度か危機に直面せるも一名の犠牲者もなく完全に其の使命を遂行、他中隊に比して幸運なりしを喜び居候へしも、此の戦闘にては遂に尊き犠牲者を出し一同暗涙に咽び申候

斯かる中にも小生は不幸病魔の冒す所と相成り、残念ながら入

院するの已むなきに至り、兵站病院にて専心療養中、更に内地送還と決定、表記病院に收容せられ候

二月二日（廣島陸軍病院にて）

近藤銀平君（庶務係）

戦闘の曉にも露營の夕にも、此の力ある御後援に勵まされ、泥濘馬脚を没する惡路の進軍も、貴座萬丈たる平原の苦闘も、勇氣正に百倍して敢行仕候

大場鎮、上海の激戦後、退却する敵軍を追撃し、友軍が蘇州河を強行渡河してよりは所謂破竹の勢を以て前進又前進、何れの部隊も晝夜兼行の連續強行軍、斃れし愛馬に涙の花を手向け、傷ける戦友を勞りつゝ、田も畠も工兵隊の假の道、惡路の難行に下馬、曳馬も幾度にて候へしか。

二十里、三十里前進するも敵影を認めず「かくも逃げ併ひられは此方がもたぬ」など、勇ましくも嬉しさ溢る、不平も或る戦友の口より洩れ候

南京へ……南京へ……上海より八十餘里、七寸の軍靴に之を征

服して、十二月十三日には蒋介石が背水の陣を布きたる首都南京も遂に陥落、十二月十七日硝煙の餘香猶新なる城壁の下、中山門より堂々入城、上海方面軍司令官松井將軍以下多數將星の勇姿を迎ふるの光榮に浴し、洵に感激に堪えず罷在候 我々の先輩が、日露の役に奉天を陥落せしめ、武勳赫赫として入城せし當時の戦記、歴史畫等を想起して、實に爽快に堪えず存候 かく意想外に南京の陥落せしは、大元帥陛下の御稜威によるは勿論なれど、皇軍を助くるに鐵石の如く堅き銃後の諸兄ある事を思ふ時、全く感謝の涙を繰返すのみに候

入城式後、敵の捕虜約七千の護送さるゝに遭ひ、烏合の衆の餘りに多きと、其の暢氣なる態度等に驚き候

十二月廿五日鎮江に移動、目下警備に服し居候 鎮江は揚子江岸に在る水陸交通の要地に候 工兵隊、鐵道隊の活動により、上海南京間の汽車輸送も復舊し、内地との通信も餘程時間の短縮を見る事と相成候

陣中に於ける元旦、出生以來内地にて繰返したる三十幾回の正月とは凡そ趣を異に致候 七時、ラッパ起床、營庭に整列、黎明の風清き東方に向ひて皇居遙拜、部隊長の發聲にて江南の地も裂けよ、内地へも響けよとばかり、陛下の萬歳を三唱、午後には故郷の便りを讀むに忙しく過し候 一月四日 勅諭奉戴式隊長が朗々と奉讀せらるゝ勅諭

「朕、汝等を股肱とたのみ……」

に至つて感涙數行、凍りつく靴の指先も、燃ゆる血潮に熱く相

成一層環圍の念を固め申候
勝つて兜の緒を締むるは大丈夫の常、一層軍紀、風紀を嚴肅にし、以て明日の戦鬪に備ふべく、飽くまで蔣介石の長期抗日の迷夢を醒まして、銃後の方々の御期待に副ふべく緊張罷在候
當市在住支那人も相當多く、日本兵に親しみ、滿洲國の如き樂土の、一日も早く實現せんことを希望致居候
營庭の彼方なる丘陵に朝日を拜む時、平野の果に夕日の沈む頃等しく故國を偲び、皆様の御健在を祈居候
一月十四日

近藤直一君（庶務係）

御無沙汰して居りますが何卒御諒承願ひます。

一別以來已に四箇月、望郷の念切なるものが御座います。然し敷島のやまと心の雄々しさは

ことある時ぞ現はれにける

御安心下さい、決して日本男子として恥るやうな事は致さぬ覺悟で御座います。

小生お蔭様で健在、南京攻略後は、此處南京から約二十里下流長江に臨んだ〇〇市外に駐屯、待機して居ります。皆様御大切に……

一月十九日

出村信一君（仕入係）

布陣地以來、内地よりの慰問品は御送附のものが始めてにて、思はず歡喜の聲を擧げ申候

今迄は臺灣、朝鮮等殖民地よりの發送品にて、其の上、慰問文の冒頭に曰く「北支の兵隊さん」と……聊か憂鬱氣味に相成候御惠與の品々は何れも三越のマーク入りにて誠に結構、内容の潤澤なる——班長を始め一同羨望致し居候

連日の降雨も漸く晴れて、早くも戦線は活況を呈し空爆、砲聲相續いで聞え居候

陸軍の砲聲も遙か地平線上に聞え、吾等が試練の時期も近からんと想像致居候

十月十二日（上海より）

寺島吉三郎君（銀座支店）

過ぐる日の壯行會の嚴肅さ、出發當夜上野驛頭の感激的場面等今尙折に觸れては思ひ出され、恰も昨日の如く眼前に髣

髴として、感激新たなるもの有之、小生を鞭撻激勵する無形の咎と相成居候

既にラヂオ又は新聞紙上にて御承知の如く、皇軍の神速果敢なる進撃の前には、さしも執拗頑強なる支那軍も殆んど黄河以北の地區より敗退し、華北五省は漸次明朗化せられつゝあるも、却々おいそれと直ちに平和樂土となるものには無之候 今猶鐵道沿線乃至幹線道路より遠隔の地には、敗殘兵或は土民の匪賊化せるもの多數集結潜伏致居り、隨所に出沒して我が軍を惱し居る狀況に有之候

去る十一月〇日にも我が部隊は河北省大名の北方四〇軒の地點に在る邱縣及び廣平に於て、迫撃砲數十門を有する正規軍の敗殘兵數千と遭遇、激戦の後、之を撃退致したるも、我が部隊よりは今迄になき多數の犠牲者を出し候

斯くの如き掃蕩戦は日々諸所に展開せられ居候 北支全土に亘つて、明朗なる樂土となす迄には、容易ならざる辛苦と日子を要する事と被存候

過ぎし日、〇〇及び〇〇經由にて豐臺に下車し、戦線に第一歩を印して以來、夜を日に次いで強行軍、北支平野を踏破すること實に二百五十餘里、誠に「遠くも我は來つる哉」の感を深く致候

今後、黄河の線に到りて止むか、將又、長驅黄河を越えて敵地に突入するか、我等兵の豫知し得ざる所に候
戦鬪は、よし、二年三年繼續するとも、抗日支那國民政府と中

央軍が覺醒悔悟せざる限り、飽くまで膺懲の聖戦を續行する決心に有之「千萬人と雖も我往かん」との言葉こそ、實に我等出征將士の許らざる心境に有之候

十二月七日 山東省臨清にて

去る十一月〇日から約二十日間は、連日の戦鬪で、〇〇日には山東省と河北省の境にある邱縣の戦鬪が始まりました。

此の日、小生外四名は突撃路の搜索任務を帯びて斥候に出ました。城壁の銃眼から盛んに射出す敵弾の中を前進するのは一ト通りの苦痛ではなかつたです。

約三時間で此處を占領しましたが、この時は我が〇〇隊が一番乗りで、秋空高き城頭に日章旗を翻した時、始めて我に返り「まだ生きて居るのだな……」と思つた程無我夢中でした。そして戦友同志相擁して、うれし涙にくれたのでした。

四日餘り此地の警備に當り、後續部隊の來着を待つて臨濟に入城しました。此處で休養中御手紙を落手しました。一通の分厚い封書は何かしら、御守でも送つて呉れたのかと、首をかきけながら開封すると、出て來たのがチョコの箱、イヤ！ 之は有難い、久し振りに森永のチョコにあり付けると思つたのも束の間、何んとそれは常々喫みたい、のみたいと思つてゐたチェリイではないか……聊か面喰ひました。流石はS兄らしい送り方だと感心致しました。

その時は丁度夕食を済ましたばかりで、戦友十名ばかり、焚火を囲んで、内地からの便りを讀合つてゐたので、惜しかつたが「戦友だ、何時別れるか解らないのだ」と思つて一本づつ、仲よく吸ひました。其の味！永らくまづい支那煙草ばかり吸つた後で、何とも云へぬうま味があり、チエリーはこんな美味い煙草だつたかしらと、今更ながら驚きました。戦友からも宜しく御禮を申して居りました、重ねて厚く御禮申上げます。

その後辛縣、朝城、南樂の敵を追つて清豐に入り、此處で最後の戦鬪を交え、敵を完全に黄河以南へ撃退して引揚げ、只今は京漢線邯鄲にて休養して居ります。

今日もまだ東南方に砲聲が聞えて居ります。いつになつたら止むことやら……

十二月二十五日

青山捨治君（外賣係）

現在僕は正太鐵路の沿線、壽陽といふ山間の町に居ります。石家莊を出て井陘、陽泉、壽陽、太原に至る間、山又山で道らしき道もなく、駄馬編成にて實に困難致しました。今は鐵道も通じましたが、一米軌道の玩具のやうな汽車にて、峠を喘ぎ喘ぎ登る始末、然も一日一回の連絡なので糧秣すら思

此度は残念にも御奉公中途にして、充分なる功績もなく、右手首銃創の爲め内地へ後送せられ、銃後の皆々様の御期待に相添はず、面目次第も無之候

病床に在りても思ふは、遠く異國の地にて日々の困苦缺乏に耐え、露營の夢を結びつゝある戦友の上にて、唯々その武運長久を祈るのみに御座候

それにつけても一日も早く全快し、一死報國の念を深く深く胸に刻みて再び戦線に立ち、江南の華と散りし部隊長を始め戦友達の恨を露らし度存居候

何分にも右手不自由の爲め、思ふに任せず、亂筆御目にかけて失禮の段御許し被下度候

十二月廿三日（東京第一陸軍病院にて）

浅見幸三君（賣場係）

- ◎幾日か江上に船はとまりつつ上陸命令をひたに待ちをり
- ◎朝まだき甲板にいでて大陸を渡れる風は寒しと思ふ
- ◎空襲の恐れは既になき如く上海の埠頭われは下り立つ
- ◎戦ひにわれ來たれども銃持たぬわれはさびしく軍に従ふ
- ◎碇まりるる船に傷兵の乗り來りその夕ぐれに命絶えにし

十二月一日

ふやうに運べず、郵便物などは勿論遅れ勝ちです。壽陽は人口三千、山間の部落否、高原の町と云ひたい處で寒氣厳しく、鶏卵、飯、柿實まで凍る有様です。

娘子關の新關、舊關では〇〇兵團の鯉登部隊の〇〇〇として、城壁下に〇〇中佐と〇〇中佐二柱の墓標が木の香も新らしく建てられて居り、此所を通過する部隊は、皆黙禱を捧けて行きま

す。

河北、山西兩省の境は山嶽重疊し、之を横斷する正太鐵路沿線の全山には、閻錫山が八年の歳月を費して築いたトーチカがあり、旅順を凌ぐ要塞と謂はれ皇軍も多大の損害を被りました。戦争一段落の今日でも猶ほ小部隊の通過は、頗る危険で討伐にも苦心をして居ります。

此の附近には良質の無煙炭を産し、畠土二、三尺位を掘れば炭層の頭角が現れます。

今後は正太鐵路により、この附近で一番氣候のよい石家莊は大いに發展すること、思はれます。

色々珍しい事物に觸れてお話の種も澤山ありますが、書き盡せませんのでお土産話にして置きます。

一月二日

有田眞啓君（賣場係）

新春を迎へ、謹んで皆様の御多幸を、戦陣中より御祈り申上げます。

歡呼の聲に送られて早や二ヶ月。上海上陸後は直ちに蘇州へ出動を命ぜられ、當地に野戦病院を開設、寸暇なく活躍して居りましたが、南京陥落以來は傷病兵も激減しました。

當地は御承知の如く山紫水明の處、然も美人の産地と聞いて居りますが、現在自治委員會の努力にも拘はらず、殆んど其の片鱗さへ認められません。商賣も行商或は露店にて行はれ、夜間の通行は堅く禁ぜられて居ります。

一月六日夜

浅野龜造君（計算係）

出征以來六ヶ月餘と相成候 此間皆様よりの多大の御後援を戴き感謝に不堪候

敵は長期抗日を計劃し居る様子にて、目下開會中の議會に於ては巨額の豫算審議中の由、是非とも此際徹底的に暴支膺懲が東洋平和の爲め重要事と信じ居候

現在當地方は匪賊横行し、被害甚しく、時々討伐を實施致居候南支方面より入港する船舶にて抗日分子の潜入するあり、之等

の檢擧にて繁忙を極め居候 従つて思ひ乍ら御無沙汰勝ちに付
不惡御諒承被下度候
氣候も二、三日前より大分軟らき凌ぎよく相成候 白河の流氷
も減少致候

二月二十日

安藤 懺爾君 (計算係)

帝都の生活は翌日の新らしきエネルギーを與へるべき多くのもの
があります、此方は全く殺風景と云ひますか、視界には只
廣漠たる平原に處々小高い丘や山があるのみです。人家も數へ
る程にて、それも戦の跡生々しく煙にくすぶつた廢家です。
此處一ヶ月は追撃に次ぐ追撃にて、日に十里餘の強行軍は普通
の事、全く正直な所、生色ありません。
願へば三ヶ月の間何をして居たか夢のやうです。夜の明けぬ中
に宿を出で、足を引づつて月明りを便りに宿を求めると、戦
争ならでは味へぬ事です。支那婦人や若い者は一人も眼に入り
ません。皆敵兵に徴發されたのでせう、民家の廣告などを見て
慰めて居る始末です。
全く楽しみは酒煙草のみで、疲勞を癒す唯一の物です、食糧な
どは一ヶ月許り全く配給なく、民家から〇〇〇給して居りま

ひなき射撃をするので友軍は非常に惱まされました。

我々の部隊は、一昨日より南京常州方面より後方、蘇州に續々
集結して居ります。當分此の地に宿營警備に當り一月〇日頃よ
り〇〇方面に異動致します。

蘇州は最早自治委員會が開かれ、蘇州人の警官も選任されて住
民も陸續と復歸して居ります。

又各所に賣店、市場等を見るやうになりました。(蘇報)新聞
紙も發行されて居ります。

十二月廿三日

本日は皆様からのうれしい御便りを、再三繰返して拜讀致しま
した。

皆んな愉快にモナミでやつたさうですね、實に羨ましい、然し
戦地の豚の丸焼も實に野趣たつぷりでうまいです。

吾々は何時又何處へ行くか分りません。内地のニュースが不明
で、兵はいろ／＼な事を云つて居ります。ニュースがあつたら
御知らせ下さい。小生も元氣です。

一月十九日

安藤 季鷹君 (銀座支店)

任務の性質上止むを得ざるとは謂へ、武運拙くして、一として

す「兵隊さんはキャラメルが好き」とはお伽噺と思つて居りま
したが、實際奪合ひの有様です。

慰問袋等は一回も廻つて来ません、内地からのものは、一ヶ月
以上も経つて手に入る始末です。

では！ 自動車 came しましたからこれで失禮……〇〇へ移動行軍
途中……

十二月廿三日着 (上海より)

雨森 秀樹君 (新宿支店)

私事本月初旬上海に上陸、直ちに南京に向ひ、無事入城するこ
とが出来ました。

目下交通は單線の鐵道にて、常州まで漸く運轉するやうになり
ました。線路も汽車も全部、鐵道隊により内地から運ばれたと
の事です。

吾々は上海より約百三十里の行軍を續けて南京に参りました。

此の途中は各所に、敵の屍體又は軍馬の死骸が累々として山を
なして居りました。

夜營の時、クリークの水で飯盒炊飯をし、翌朝見ると、その附
近には敵人馬の屍體が澤山浮いて居りました。

友軍もこの邊で澤山死んで居ります。敵は精巧な兵器を以て狂

華々しき戦績もなき自分の報告が、如何に辱しきものである
を思ひ、自然に筆が鈍り申候

皆様のお便りにて、缺員の儘或は特休を廢しての御奮闘と御緊
張の模様を承り、唯々感謝の念に堪えず、安んじて軍務に服し
つゝ、ある自分の幸福をしみ／＼と感じ申候

勇躍故國を出でしより既に四ヶ月餘、此の間晝夜兼行、惡天候
と惡路に惱まされ、進まんとするに道なく、人馬共に倒れて、
一進一退の窮地に立つ事幾回なりしかを覺えず候

十一月下旬北支より轉戦し、不相變不眠不休の連續行動を取り
特に南京攻略戦に際しては、晝夜を分たす奇襲する數千の敗殘
兵を隨所に撃退し、一路軍需品の輸送に當り、遂に十二月十九
日南京へ入城致候

目下南京に滞在、漸く戦暇を得たりとは申せ、未だ今後の豫測
を許さざるもの有之候

我が部隊に於て、南北支の兩戦に斃れし軍馬の數は〇〇〇頭に
及ぶべく、これより推して其辛苦御想像願上候

一月二十三日着信

第三次策戦に入り、〇〇日南京出發、上海より再び大連に移動
致候 〇日、半日の外出を許され支店を訪問致候處、支店長殿
を始め各位の御款待を受け、すつかり面目をほどこし候

其の上後援會よりお土産を頂戴仕り、出征後の御店の様子等も

承り感謝に不堪存居候
翌○日貨車積込を了し、夜七時出發、尙數日を要する○地に進行中に候

つひ先頃迄想像致居候滿洲の寒さ、今現實にそれを味ひ、實に驚くの外なく、聊か今後の不安を覚え申候
今(正午)車中にてペンを採り候處、インキが氷結してその用をなさず、水筒の水も凍りて呑む能はざる状態に有之、一方防寒具としては、唯帽子を支給せられしのみ有之候
進行中の列車内、意を盡す能はず、簡單ながら右御報告申上候
皆様の御健勝を御祈り申上候

乗込んで居る車は貨物車で、アンペラ一枚敷いた上に四十名程、貨物のやうにほうり込まれて居ると云つた方がよい位です。

呉服の中村芳藏君とは、初めから同じ小隊で、常に同一行動を取つて居ります。兩人とも元氣一杯、何卒御安心下さい。

二月三日

佐藤澄夫君(外賣係)

故國を出づる時、一切の心情を捨て、一死報國を誓ひし身なれど、南京城頭高く日章旗ひらめきて、廢墟に等しき敵地にも平和の氣漲り、野邊の草木にさす日影もなつかしく感じる様にな

に待つてゐると申します。之を聞く僕達は、ほんとうに心からして彼等住民に對し同情の念が湧いて來ます。然し未だ或る方面に於ては、盛んに排日運動をやつてゐるとの事で、決して油断は出來ません。

相當持久戦になる様ですから、吾々も警備旁次期戦闘の準備を怠らず、大いに士氣を肥して何時、何處へ出動命令が降らうとも、萬差支なきを期して居ります。

新聞紙上や御便りで拜見致しますと、帝都其他各所に於ては、陥落祝で大變に賑ひ、灯の海、旗の波と云つた催しがありました。如何に銃後に固き護りがあるかを察せられます。

一月十日

坂本二郎君(家場係)

只今南京を距る六十里の地にて警備に就いて居ります。城内にはもう自治會も出來、支那人もどん／＼歸つて來て居ります。理髮屋その他二、三商賣を始めた家もあります。街を通行する支那人は、兵隊を見ると立止つて敬禮をして往きます。それが又とても面白いです。

警備に就いてからは、今迄のやうに藁の上で寝たり、野天で寝たりせず、久し振りに家の中で蒲團にくるまつて寝られるあた

りますと、速く皆様のことも想ひ出だされてなりません。戰場心理とでも申すのでせうか。

熱誠以て銃後の陣を守らる、皆様を思ひ出す時、感懷亦新たなものが御座います。

御蔭様にて小生も、城外の蔣介石の邸宅とか云はる、廣壯な廢屋に、内地の兵營生活のその如く、元氣にて軍務にいそむで居ります。

東洋永遠の平和の爲め、皇軍の一員として一層努力する考で御座います。

一月十五日

佐伯敏雄君(銀座支店)

南京攻略に於て見事中山門を占領し、入城後も引續き殘敵掃蕩に任じて居りました。

○部隊の私達は、思出深い首都南京を後にして蘇州に向ひ、元日も行軍中に過して一月○日、無事蘇州市に到着、只今その警備に當つて居ります。

昨今は避難民も殆んど我が家に戻り、生活線へ乗出しました。街の辻々には支那人の警察隊員が立つて交通整理に當つて居ります、よくも分らぬ片言交りの支那語で、住民に聞いて見ますと、彼等は、一日も早く戦争が終つて、平和の來るのを樂しむ

り、軍隊で云ふ満點です。

此のお正月は常州といふ所で迎ひましたが、行軍中のこと、忙しかつたです。亂筆失禮致します。

一月十日

境田生駒君(庶務係)

永らく失禮した、案じて居たこと、思ふ。

其後も益々健全にて軍務に服して居る、便りを差出さうといつても思ひながら、敵を追撃又追撃で大變忙しく手紙など書いてゐる事は出來なかつた。この度の追撃は何分にも道路が悪く今迄の内が一番苦しんだ、畑の中ばかりであつた。

十一月○日に石家莊を出發、山西省の太原に往く積で井陘と云ふ所迄行つたが、太原が落城した爲め、命令が變り又石家莊に歸つた。只今は南下して鐵道沿線の○○に滞在して居る。此處で冬營しお正月を迎へる積らしい。

現在の處で、去る廿三日夜中に突然銃聲が起つた、それは敗殘兵の襲撃であつたが、一時間半位で撃退した。我が兵に負傷一名を出し殘念であつたが、自分は何事もなく済んだ。

近頃は大變寒くなつて來た、内地よりは半分寒いのだが、平氣である。我々のこの身で大日本帝國の爲め、東洋平和の爲め又

世界平和の爲めに盡せるのだと思ふと、どんな事でも面白い。寒さは何んともない、この頃益々身體は丈夫になり、一日に十里や十五里の行軍は何とも面白いやうだ。寫眞を撮る事が出来れば、此の健康體で面白さうに働いて居る姿を見せたい氣がする。

廿四日に稜子の寫眞を受取つた、大變大きく成つたのに驚いた。だき度くなつた、今は又それ以上に大きくなつた事だらう。

二十三日に三越國防婦人會様より慰問品を頂戴した。廿五日三越出征軍人後援會様よりも慰問品を送つたと通知があつた。實に何んとも御禮の申上げ様もない、うれし涙が落ちる。

出征中は大三越の代表軍人と思ふて尙一生懸命に御奉公致すことが御恩返しと思ふ、凱旋したら三越の爲めに大いに働いて御禮申上げやう、筆先では御禮の言葉も書き切れぬ、この身體で御禮を致さう。

三越の方に面會したら呉々もよろしく申上げて呉れ。稜子に注意致すやう頼むぞ……

一月十日着信

西條 留 吉君 (庶務係)

去る〇〇日、吳淞の任地出發以來、士氣頗る旺盛、上海、南翔

賊に襲はれ、幾度か生命の危険に迫り敵彈を浴びながら任務を遂行致しました。

本月三日、佳節の拂曉戦より、果敢勇猛なる皇軍は自然の要塞山嶽陣地を誇れる敵に對し、涙ぐましい攻撃により遂に之を走らせ、早くも六日には太原城に肉迫し、敵軍は之をも支ふるこ

と能はず遠く黄河の邊に退却致しました。

只今の處敵兵もなく毎日朗かに任務に就いて居ります。

當地は大分寒くなつて参りました、去る十七日より十九日までチラ／＼雪が降り、蒙古風モンゴル風に吹き捲まくられました。その後晴天續きなるも雪は解けもせず、毎朝零下十八度内外、地面は凍結して日中でも相當の寒さです。

私も今では大分慣れ苦にもなくなりました。

十一月廿六日

當地は通過部隊多き爲め、僅少なる日本品も内地の五倍位の價にて、それも瞬く間に賣切れ、又酒保にも品なく、物資は甚だしく缺乏し、日用雜貨類などは絶無の状態じょうたいで御座います。

處へ、皆様方よりの慰問品を拜受し、吾々戦友五名、小おどりして喜び、早速開封して久振りに茶話會を催しました。皆様はお笑ひになるかも知れませんが、ほんとうに子供のやうに喜んで居ります。戦友一同も宜しく申添へて下さいと言つて居りま

蘇州、丹陽と總攻撃の命を受け、數十里を日夜急追、敵を徹底的に膺懲致しました。

その後南京の東北約三十里、揚子江岸の鎮江鎮にて第一線の本部隊に合隊致し、更に揚子江を渡りて義徵、六合、滁縣と敵を追撃、轉戦數日間、去る日朱瀾橋といふ部落で警備致すこと、なりました。

昨元旦早朝より〇〇方面の總攻撃に参加、殘敵は皇軍の士氣物妻き爲め退却の體形となりました。

一月二日

北村 政 雄君 (庶務係)

又出征後は家族の者が、殊更に御親切なる御援助に預り居ります由承りまして、遠い北支に在る身の唯々嬉しく、毎朝夕東の空を拜み心から感謝致して居ります。

私は今北支の果、太原近くに参つて居ります。

何分にも第一線に出て働くことを許されませんが輸送監視隊のこと、赫々たる功を樹てる事も出来ませず残念に思つて居ります。然し私達はこれ等第一線部隊の直ぐ背後に在つて、總ての補給に任じます重大なる任務で御座います。

去る日、源平鎮より太原方面に於ける戦闘の際は、敗殘兵と匪

す。早速今晚は將棋の會を開いて居ります。

(註、慰問品中に玩具の將棋あり)

昨日はお店の國防婦人會分會より澤山慰問の品々を戴き亦今日も……まるで盆とお正月が一度に來たやうにて、永らく甘いものや日用品に不自由をしておりましたのが初めて満たされ、こんな嬉しいことはありません。重ねて厚く御禮を申上げます。

北支も此頃は殆んど戦ひもなく、到る處、町も村もよく統治され、平和な日が続いて居ります。住民も日増しに多くなり、皇軍を信頼して業務に就き、大道、街角の往來も繁く、日支親善の微笑ましい情景が見受けられます。

私も今では比較的安全なる後方、大同城内に居ります。別に後顧の憂もなく、皆々様の周到なる御援助のお蔭にて、一意専心任務に當れますことを幸福に存じ、この御厚意の萬分の一にも報ひんものと、日夜精勵致して居ります。

寒さは夜分零下二十度内外にて、今日などは日中にもビールもサイダーも凍つて居り、卵など割りましても、うで卵の様に固く凍つて居ります。

初めて北支で冬を迎え、ほんとうに恐ろしい氣候だと思つて居りますが、吾々は軍より毛の厚い防寒着、帽子など、不自由なく支給されて居りますから、寒さに對しては一向苦痛とは思ひません。

十二月十九日夜

水越嘉長君（外賣係）

十月〇日敵前強行渡河の際、不幸敵の一弾を足部に受け、涙を呑むで一時後方に退つて居りましたが、經過良好にて十餘日にして再び前線に出て働いて居ります。

敵もよく抵抗し天晴れな奮戦振りです、陣地はソ聯式トーチカ（鐵骨コンクリート）の小憎らしいまで堅固なもので、小銃など受付けませんから重火機、空爆、突撃戦です。

戦友も殆んど失ひましたが、敵の屍も亦無数です、大場鎮攻撃の時など敵の屍體で足の踏み場もない位でした。

上海も既に我が軍の手に歸しました。然し猶も攻撃をゆるめず追撃又前進、敵の本據たる首都南京に迫つて居ります。やがて南京に日章旗の翻る日も遠くはないと思ひます。

これも偏に皆様の力強き御後援の賜と深く感謝して居ります。

十一月二十五日

水野亮太郎君（雜場係）

南京陥落で戦線が擴大した爲め、各部隊は夫々變つた配置に就いたが、私は現在龍華鎮に居ります。

昭和十二年十一月三十日御發送の慰問品が、昭和十三年一月十四日正に届きました。

發送案内は早く届きましたので、首を長くして待つて居りました。丁度伊東部隊が移動中の所へぶつかつたので、整理が出来ず下積になつたらしいです、でも内容には異常なし、皆様の熱誠が守つて呉れたのでせう、厚く厚く御禮を申上ます。

羊羹は早速戦友が攻撃を開始しました。戦友も喜んでゐます。此の前に我々が復旦大學に居た時「手紙の花束」に感激した連中ですから、凱旋したら早速三越へ、御禮に行くと申してゐます。御婦人の方々はトーチカでも築いて置かぬと大變ですよ。

現在私の居る處は多摩川のやうな所で、河は隅田川より大きい黄浦江が近くを流れてゐます。カーネーションや、菊のやうな花を作る畠や、野菜畑が附近一帯にあります。

支那民の居ないのに、畠にはホーレン草、杓子菜、キャベツ、人参等が出来てゐて勿體ないから、私達が採つて来て喰べてゐます。畠から早速食卓（飯盒）へ新鮮この上なし。

水は相變らず悪く沸かさないと飲めません。ホーレン草を喰べてそれで生水が飲めれば「ボバイ」のやうに強くなれるのだが残念……。

一月十四日

此處には立派なお寺と塔があり、支那の歐亞航空所もある。格納庫は大したものので「ダグラス」機があつたことは確實だ。その翼だけを見ました。

上海が東京とすれば、龍華鎮は羽田に當る所です、里程も同じ位でせう、そして桃の名所ださうで、附近には桃の木が澤山ありますから多摩川にも似て居ます。黄浦江が傍を流れて居ります。

私のお正月はどうやら此處で迎へることになるらしい。軍隊のことは三十分先の事も豫知出来ない場合もあるが、然し私は龍華鎮が今迄に宿營した内では一番氣に入つた。

水は相變らず悪い、濾して煮沸しなければ生命が危い、水道はあつたのだが、皆破壊されて居るから駄目、電氣も駄目、出征以來まだ電燈のある所へ行つたことがない。變電所がベケになつて居るから、配線と電球が残つてゐても置物同然だ、今電燈の使用出来るのは佛蘭西租界と共同租界内の日本人街だけと思ふ。

日本人街へは一度行つたが、今は寂しい。夜は燈火管制で誰一人表へ出るものは無い、晝間だけの街だ、事變前ならば反對に夜の町だらう。今我々將兵が内地の感じを求めるのは、日本人街より外にない、龍華鎮から約四里だが、乗物のない現在では一寸往くの時間に掛かる。

十二月廿三日

水谷喜代一君（受渡係）

皇軍向ふ所敵なく、今は首都南京も陥落して我が軍の士氣は世界に輝いて居りますが、私達は先月二十三日、内地〇〇に歸つてより今日迄、艦體の修理等に平凡な日を送つて居り残念でありません。

第一線の勇士や皆々様に對しても、何等の功もたてず早く内地に歸つたのが申譯なく思ひます。

然し今後は我々に與へられた艦體修理の任務に全力を注ぎ、次の戦争には立派な働き出来るやう、毎日職工さん達の様に眞黒になつて居ります。

昨今、青島方面の空氣が悪化して居りますので、各艦船では早く出動命令のあるのを首を長くして待つて居る次第です。私達も任務中、この青島の沖合に永く居つたことがありますので、今更ながら残念で堪りません。

私達は、揚子江より塘沽までの海岸線封鎖及び陸軍の輸送護衛に従事してゐましたので、餘り華々しき働きも出来ませんでした。若しも支那に強力な海軍があつたなら、少しはらしい戦争も出来たこととせうに残念です。

店よりも三百名程の人が應召せられました由、南支北支に戦功をたゝて居られる事とせう。又戦死傷者もあつたこと、思ひますが、私はこれ等の戦友に對し、充分なる御奉公の出来なかつたことを御詫び致しますと共に、戦死された方々の御冥福を御

祈り致して居ります。

十二月廿一日

湊屋 國次君 (受渡係)

本月〇日第一目的地に向つて進發、十餘日の難行軍を続け、〇日無事〇〇に到着致しました。目下當地に滞在中なるも、近く第一線へ出發することになつて居ります。

當地は非常に暖かく、丁度内地の十一月頃の氣候で、幸ひ行軍中は雨にも降られず將兵一同欣んで居ります。行軍の沿道には敵の屍體累々として山をなし、臭氣紛々鼻を衝き、軍馬も顔をそむけて通る有様、最初は變な感じでしたが今は猫の死骸のやうにしか感じなくなりました。

哀れなのは我が軍馬の死骸の相當多いことで、遙か遠い母國から將兵と共に幾多の勞苦を嘗めて征途につきしものを、行軍の途中病氣の爲めに斃れたものと思はれますが、當隊の軍馬も既に三十頭餘り倒れました。

今迄は敗殘兵の襲撃もありませんでしたが、これから第一線に向つて任務に就きますので、戦はこれからと思つて居ります。

十二月十六日夜十時半

を襲撃して來ましたが、文字通り破竹の勢を以て敵彈雨飛の中を突破して無事杭州へ入城せしは、杭州陥落の翌日でありました。

浙江省の首府杭州は、蔣介石の郷里で商工業の中心地だけに、大會社大銀行が櫛比して居り、美しい市街なのに驚きました。支那へ來て驚いた事は人家は外見立派でも中へ入ると非常に汚い事と寢臺の綺麗な事と井戸が殆んどないことであります。杭州にも水道は勿論井戸もなく、矢張りクリークの水を使用して居ります。

此處に暫く滞在して居りましたが、去る十二月廿八日再び杭州を出發、又々行軍を続け、元日は長興の東方地點を行軍中でありました。

其後作戦の都合により〇〇に歸還、目下次の命令ある迄人馬とも待機中でありませぬ。

人も馬も數少なくなりました。僕はお蔭様で出征以來心身共に健全、最後まで本隊と行動を共にし得たことは神明の加護と皆様方御後援の賜と感涙に咽んで居ります。

一月十一日

源 音 松君 (庶務係)

留守中種々御厄介に相成、且つ御慰問金まで頂戴致したる由、

僕等の部隊は〇〇港出帆後、杭州灣に向ひ金山沖に停泊、四、五日船中で待機して居りましたが、上陸地變更となりて更に吳淞沖に向ひ、此處に於ても亦約十日間待機し、漸く黃浦江を廻り虬江碼頭に上陸、直ちに上海楊樹浦の支那人經營たりし紡績會社に到着、暫く滞留することとなりました。

十二月五日、此處を出發してより本日まで約一ヶ月餘、毎日平均十里、行軍又行軍、往復約三百五十里の徒歩を続けました。皇軍は連戦連勝、破竹の勢を以て前進し、僕等の部隊も浙江省太湖南方地區に於て第一線部隊と行動を共にし、彈雨の下に野營を続けながら長い兵站線を行軍いたしました。

松江、嘉善、嘉興を経て、太湖南方の湖州に着いたのは十二月十七、八日頃でありましたが、此處の兵站司令部で掲示を見て始めて南京の陥落を知りました。此處で更に杭州攻撃の命を受け、十九日未明出發、愈々敵の堅陣と頼む杭州に向つて軍需品の輸送を開始致しました。

杭州附近は三方山嶽地帯で、一步を誤れば、人馬諸共千仞の谷底へ墜落するやうな峻嶒な道なき路を過ぎ、橋なき河を渡り、加ふるに寒雨降りしきる中を三日三晩一睡もとらず、遂に食糧も缺乏せる爲め、支那民家に入り食物を探せども何もなし、據なく空腹の儘進軍を続けました。

この途中、名もなき部落に差懸りし時、一方は深き谷一方は見上ぐる絶壁の山中にて、敗殘兵に遭遇し、山上より僕等の部隊

家内より通知に接し、全く御厚情に對し御禮の言葉もありませぬ。遙か東天に向つて手を合せ、しばらく涙が止めどもなく流れ出で、戰友にあやしみ尋ねられる程、感激致しました。

四十日餘り前方に出で、本日歸つて手紙を見、この趣を知りました。厚く御禮を申し上げます。

一月下旬着信上海より

宮下 勘次君 (警防係)

御叮嚀なる慰問品御送り下され、二十六日正に到着、厚く御禮申し上げます。

早速戰友とも分けて戴きました。戰地では見られぬあの繪葉書並に懐しい店全景の寫眞も、皆が喜んで拜見致しました。

本年は東京地方は殊の外寒く感冒流行の由、新聞紙上で拜見致しました。折角御自愛の程御願申し上げます。

我等の戰地も一月に入つてから急に寒くなり、去る二十五日及び二十八日には降雪、〇下八、九度迄下りました。東京のあの空風が思ひ出されます。

我が大隊は目下〇〇鎮に集結し、一部の兵は列車の警乗に當り次の命令を待つて居ります。

去る二十三日は我が部隊の軍旗祭にて、茶菓の接待あり、兵隊

さんの藝人達が安來節、流行歌、軍歌、手品等の餘興にて頗る無邪氣な處を見せ、一日を楽しく暮しました。

一月廿九日 (中支より)

志村 信三君 (外賣係)

過日北支の大都天津に一泊、街を見物致しました。班長殿に引卒されて驛前の廣場に到り、幾十臺とも知れぬ人力車が列んでゐる前を、丁度通りか、つた邦人のトラックに乗せて貰ひ、十五分位走つて賑かな大通りへ出ました。先づ目に入るものは雑沓の中を走る電車でした、二輛連結で前後部を眞紅と黒に塗り分けた、如何にも支那好みらしい色彩でした。

街は殆んど洋館の大建物ばかりですが、何處か知ら支那臭の抜けきらない處があります。

暫らく徒歩、十字路の一角に冬の陽を浴びて光る金文字「中原公司環球貨店」といふ看板が目につきました。之が支那の百貨店で、ウキンドの裝飾も日本の百貨店と變りなく、店内一階は食料品、洋品、文房具、化粧品など美しく飾立てられ、六階までありました。店員は男(支那人)が多く、各階を通じて四、五人位しか女店員(支那チウさん)が居りませんでした。然し三

建設華北自治與和平樂土

信任日軍除暴安良之善意

保定滄州均已陷落

肅清華北業告成功

右のやうな文字が連ねてありました。

十二月十四日夜

清水 静雄君 (外賣係)

昭和十三年の元旦を異郷に迎ふ。感慨無量、之に過ぐるものなし。遙かに東天を拜し 大元帥陛下の萬歳を三唱す。征衣、戰塵に汚れたりと雖も、心氣清淨なり。祝すべき戦捷の春、されど征戦果して幾人か還る。上海戦線風徒らに寒し。迂生が心情御賢察を請ふ。

洵に残念ながら御期待の南京攻略には、當部隊参加致さず、上海郊外の警備を擔任して居ります。

十一月上旬蘇州河追撃戦の歸途、思ひがけなく二十九番の米元君(忠男、食料品賣場)に逢ひしも、お互に忙しき身として緩々話す暇もなく、健在を祈りつゝ別れました。

その後太倉へ追撃戦の途中、新宿支店の村串君(甚吉)に出

越の女店員のやうな愛嬌のある者は一人も居りませんでした。此處を出て日本租界に入りました、懐しい邦字の看板に「わたふとん」など、書いてあり「御待合一力」と書いた格子作りの前を水の滴れるやうな高島田に小粋な衿足をのぞかせた姐さんがチラホラと後姿を見せ、又日本租界の入口にある活動常設館では「南國太平記」で客を呼んで居るなど旅情をそゝるに充分なものがありました。

そうして種々の想を抱きながら行く十字路の角に、白木の一札が目につきます、此處よりは佛蘭西租界にて「武装せる軍人の入街を禁ず」といつたやうな意味の札ですが、親日家らしい警備兼交通官の計ひで特に見物を許されました。この街の華美壯麗なものには、只々驚異の眼を見張るのみでした。

只今は〇〇前線に參つて居ります。此の邊は極く田舎にて、殆んど住む者もない民家は、荒れるにまかせてあります、土塀には色刷りのポスターが到る處に張られ、皇軍の兵士が支那婦人の連れてゐる小孩(子供)を笑ひながら抱いて居る繪や、友軍機が盛んに爆弾を投下してゐる繪などです。

又三尺位の印刷したポスターには

謀華北之永久和平福祉

現在爲千載一遇之機會

日軍弔民伐罪掃除惡劣軍隊

從此以後華北再無軍閥流毒

脫離貪汚政權與赤化魔手

逢ひ、その元氣な姿を見た時の嬉しさは又格別でした。

一月七日

清水 代三君 (庶務係)

我々の船は神佛の加護により、海上一路、風雨もなく、〇〇日朝、國際都市上海に着きました。

各國の船が色とりどりの國旗を掲げて居るのが第一に眼にとまりました。

船内に二日間、〇〇日愈々今夕七時上陸との命令に、戦友達の元氣一杯に喜ぶ有様は、洵に日本國民の外には見られぬ處と思はれました。

上陸第一歩、自分達の先づ感じたことは、日本空軍の威力とその進歩の跡の著しいことでした。家並はあつて家根のない町、火のない町を行軍約二時間、漸く前部隊の居つた日本人經營の上海〇〇會社ビルディングの廢墟に到着しました。

菰一枚の上にゴロリと、戦友達と楽しく語りながら眠に就いた時は、菰一枚の寢床とも思はれませんでした。

此處に一日二夜を明かし、其の間、本部より配付された堅餅二切とぶどうばん二箇その他は出發の時用意せる飯盒米で待機す内、愈々命令來るの報と共に〇〇日未明、〇隊長以下〇〇

名、武装も際々しく、隊伍堂々出發、一線部隊を追つて前進し
午前十一時〇〇部隊本部に着きました。
營舎とは名ばかり、異國人の住つた家屋に待たる、我等の部隊
長〇〇〇大佐は、千軍萬馬の間に奮闘せられたやうな、誇ら
しき處は影だになく、さながら慈父の如き態度にて迎へられ、
傍の勇士に護られた軍旗を仰ぎ見た時は、自ら涙の下るのを禁
じ得ませんでした。

十二月四日夜ロケットの灯の下にて

柴崎 重太君 (警防係)

昨年十一月二十七日、南京攻撃の爲め行軍中、破損橋梁通過の
際、左脚大腿部前面中央に僅少の外傷を負ひ、即時看護兵の手
當を受けて、その儘戦闘に参加致候
然るに間もなく放置せし爲めか化膿して疼痛を覚え、止むを得
ず、十二月三十一日軍醫の診断を受けて手術を行ひ、一月二十
六日に至り再び手術を施し、其後経過良好に有之候
部隊は目前に強行軍を控へ居る爲め、二月二日滞在中の〇〇よ
り湖州野戦豫備病院に送られ、七日嘉興〇〇病院へ、更に九日
南市〇〇病院に送院せられ、目下専念加療に努め居候
一日も早く全快、軍務に勵むべく覺悟罷在候 多分此手紙の内

地に着く頃は、退院出來候事と思料致候間決して御心配無之や
う御願申上候

二月七日

篠崎 新一君 (賣場係)

既に北支には將來の全支に號令すべき新政權の發生を見、各地
の自治會は何れも其の傘下に續々として馳せ集り、明朝支那建
設の日近きを思はせ居候
とは謂へ、未だ各地に残敵或は匪賊の出沒するもの多く、比較
的復舊せる平津地方にも猶〇〇と敗殘兵ありと聞及び候 湖北
の寒風骨を刺す折柄之が討伐に向へる支軍の勞苦もさこそと思
はれ候

小生の勤務致し居る塘沽の對岸、太沽方面にも最近多數の敗殘
兵が入り込み目下討伐中に有之候

小生の任務は各兵器廠より送り來れる彈藥其他を受領、保管し
て、これを前線に配給し、或は戦利兵器を收容、保管又は内地
へ轉送する等なか／＼多忙に御座候

昨年十、十一兩月は最も多忙を極め候 苦戦の上海に於て俄然
我が方を有利に導きし杭州灣上陸兵團に對し、兵器彈藥を整備
供給せし折は全く文字通り不眠不休にて活躍致候

之を一轉期として其後多少閑散と相成候得共、今年初頭より又

々々多忙にて、恐らく當月も以前の如き大活躍を豫想せられ、
一段と緊張致居候

舊臘二十五日、小生達の事務所並に宿舍爆破の陰謀事件發覺し
なか／＼の騒動となり、小生も着剣物々しく非常警備に就き候
此の事務所及宿舍は事變前迄は、支那人經營の鹽及曹達の製造
會社にて、又當地一帶に、水及電氣を供給するもこの工場にて
甚だ重要な會社に有之候處、事變と共に我が軍の占領する所
となりし爲め(勿論軍にては相當なる料金を月々支拂ひ居候)
工場の作業も不能と相成、數百の勞働者は失業状態に陥り、其
の間不平分子も出來候事は又止むを得ざる所と存候

而して最近同工場は日本の某會社へ賣渡す事となり、技師が入
り込みて種々調査等致居候事が、彼等不平分子に益々拍車をか
くる結果と相成候 彼等は天津外國租界に潜む抗日分子と連絡
を取り、工場建物、發電所及清水タンク等を爆破し、以て我が
軍に危害を加へんと其機を窺ふ中、遂に我が憲兵隊に探知せら
れたるもの候

目下軍監視の下に作業を續け居り、抗日分子も時を移さず檢舉
せられ、次第に平穩に立ち戻り候へども萬一爆破が實行された
らんにはと思ひ及ぶ時、誠に慄然たるもの有之候

この事件に就ては淺野憲兵准尉(龜造、計算係)も大いに活躍
致され候筈に有之、同氏は老體にも不拘相變らず元氣にて、日
々治安維持に奮闘致し居られ候

當地は昨今零下十五度前後にて、寒風吹き荒み誠に堪え難く、

今月末より來月へかけては零下二十五度位に相成候由、聞くだ
に聊か寒氣を増し候 近くを流る、白河には流水夥しく、其の
間を汽船が突き進む様はなか／＼壯觀に御座候

先日支那人の婚禮行列を見て頗る面白く感じ候 嫁御寮は美し
く飾られたる四角な箱に納まり、外よりは全然見られず、屈強
なる若者達六人位にて恰も運臺の如くこれを擔ぎ、その後より
洋車にて家族の者が送り行くもの候

今朝、附近村落の匪賊討伐に向ひたる部隊は、二十七名の獲物
を得て只今立歸り候 彼等は何れも便服にて、中に一名の支那
警官ありしには一驚致候 何れも物凄き顔貌にて態度も不敵を
極め、天晴れなる度胸に見受けられ候

來る〇〇日には寺内軍司令官の巡視ある豫定にて、初めて見る
最高指揮官の英姿を偲び、只今より胸躍らし待望致居候

目下〇〇漕々と入港、十日間位は夜間作業も續行さる、事と存
候 今事變に始めて使用する彈藥多數ある中に〇〇式榴彈彈藥
筒の如きは實に恐るべき威力を有し〇國のトーチカの如きは僅
か數發にて木つ葉微塵に破壊さるるもの、由、甚だ心強く感ぜ
られ候 戦利兵器中には我が國製のもの多數發見せられ、自國
製の武器にて自國兵が殺されて居るのかと思へば一寸矛盾を感
じ候

昨夕匪賊斬りの現場を實見致し、日本刀の見事なる斬れ味には
感嘆仕候 匪は四人居り其中の一人は往生際恐るき奴にて、轉
々として哀願する有様は、深刻なる氣分中にも一種のユーモア

を感じ申候

出征以來早くも五ヶ月餘と相成候 戦局の前途猶遠、層一層心を引締め軍務に精勵する覺悟に御座候

一月七日

聞く所に據れば、この大同石佛は共產軍の爲めに打壞されるのを虞れて、我が軍は多大の犠牲を拂ひ、これを護つたとのこと只今でも〇〇名の兵により嚴重に監視されて居り、同地方感謝の的となつて居ります。これは大同市外三里の地點に在り、北支のメツカと謂はれて居ります。

小生〇〇日より十日間、彈藥の宰領兵として石家莊まで出張を命ぜられ、途上保定と石家莊の中間、新樂鎮附近に於て殘敵に襲撃されました。生れて初めて味はふ彈丸下のスリル、眞に無我夢中で銃の引金を引きました。

幸ひ暗夜であつたのと、附近の警備兵が逸早く應援に来て呉れたので、大した損害もなく済みました。後で氣がつくと外套の肩に敵彈が貫通してゐました。之がもう一寸も下方だつたら、名譽の負傷をしてゐたのでした。

まだ、保定以南は危險で、警備兵も容易ではないと思はれます。途中沿線の塹壕、トーチカ等、支那軍多年の物凄い軍備の

去る十七日には聯隊の慰靈祭、廿一日には師團の慰靈祭が、それ〴〵盛大に舉行されました。

南京攻略迄は當師團も多數の犠牲者を出しました。これ等護國の鬼と化した尊き犠牲者の事を思ふと涙が湧出て参ります。

先日も中隊長宛に

友人より主人の戦死の報をいただきましたが、信じられませんが、ほんとうか、嘘か或は病院にでも入つてゐるのか、どうぞお知らせ下さい。若し死にましたのなら國家の爲め名譽の戦死とあきらめ、後に遺る二人の子供はきつと、立派に育てます……

と云ふ意味の手紙を寄せた奥様がありました。中隊長は流れる涙を押し拭つて、早速同氏が名譽の戦死をされたことを細々と知らせましたが、吾々もこの手紙を見て、先般同氏の遺骨が戦友によつて内地へ護送されたことなど思ひ出され、眞實に泣かされました。

我々も、絶大なる銃後皆々様の御援助により、何等後顧の憂もなく、毎日感謝の念を以て、元氣よく重大使命を完ふして居ります。

一月三十日

平田道雄君（計算係）

跡が見られます。

一月二十六日

下田利吉君（家場係）

午前七時（内地の六時）起床喇叭、各兵は全部、本部横の廣場に集合、朝の體操を初めます。

あたりはまだ薄暗く、空には冷たい星が輝いて居ります。「今日も霜で眞白だな」「冷たいなあ」「なに元氣を出せ」。「これ位何んだ」と、指揮官の號令で體操開始、暫くして皆の身體は汗ばんで來ます。

これが終ると馬の手入れ、それから朝食を敷く、何から何まで規則が出来て、原隊に居る時と餘り變りません。

駐屯地は破壊された家屋も段々と取片附けられ、非常に落ついて参りました。各所に商店も開かれ相當賑かで、往來の支那人は皆日の丸の腕章をつけて忙がしさに歩いております。

要所々々は、我が軍の歩哨が、晝夜嚴重に警戒に當つて居ります。まだ太湖方面に、有力な敗殘兵が二、三千名位ゐるらしく目下隊の一部を以て討伐に出懸けて居ります。

近いうちに當隊營舎にも電燈がつけます。長い間のローソクとも縁を切る譯で、今から其時を楽しみに待つて居ります。

八月中旬天津着以來、殘念ながら第一線には参加出来ませんが、北支方面——豐臺、北京、南苑、長辛店、獨流鎮、馬廠等を驅廻りて歩、工兵を指揮し、時には僅か數名の護衛兵を連行して、數千人の苦力をおどかしたり、なだめたり、砲兵や輜重兵が無事に通過し得るやう、吾等工兵は新道路の改築、構築に生命を捧げて参りました。

然し幸ひ今日まで存命、元氣で活躍して居ります。之も偏に皆様の御後援の賜と深く感謝致して居ります。

現在は天津大水害地に於ける最後の防水作業に従事致して居ります。

南京も既に陥落致しました。然し問題は今後にかゝる事と思はれます。此時に當り内地に於ける皆様の團結力を大々的に世界に發揚して戴きたいと思ひます。

十二月十五日

廣瀬喜八君（食料係）

今度は蘇州河を強行渡河して、トーチカに據つて頑強にやつと敵の第二陣地攻撃だ。

噂によると相當な陣地らしいが、やりかゝれば直ぐ占據出来ると思ふ。但しその代り犠牲者も相當出るだらう、自分も其のう

ちの一人になるかも知れん?

敵の第一線陣地を完全に占據する迄に、當〇〇隊では合計〇〇〇名位の死傷者が出た。然し補充兵も先日來隊したし、元氣一杯で張切つとる。支那兵の奴ー 全く癪にさはるよ!

殊に敵陣第一線までの交通壕の中で、支那の女學生が彼方へ行つたり、此方へ行つたりして働いて居る。シヤクだから、バリ／＼やると、一線の支那兵ども我れ先にと逃げ出し、女學生の壕の中へ飛込んで頭さへ出さぬ。

支那兵の中でも一寸骨のある奴等は、生意氣に毎晩夜襲にやつて来ては何んでも取つて行く。

自分等正面の敵は只バン／＼と申譯の様に彈丸をうつてゐるが日本軍が突撃してワーツとやつて行くと無茶苦茶にうち出す、それも河や鐵條網を前にしてやつて居るのだから敵はん。

然し一度陣地に入つたら最後まで此方のものだ。銃劍術——日頃の腕前でやつつける。唯陣地へ入るまでに苦勞する。

今までの例に依ると敵の陣地にもよるが、具合よく行けば一日に一陣地を占據、普通で二日に一陣地を奪る位に前進して居る。但し追撃戦なら又別だ、騎兵で追捲くるから尙早い。

米元君(忠男、食料品賣場)も當部隊内でやつとるが、其後も元氣で居ることと思ふ。前線も後方も彈丸に當つて死ぬのは變らぬ。後方には砲彈が飛んで來るので心配になる。

昨日初めて慰問袋を貰つたが、中にキネマ(活動寫眞の雜誌)が入つて居た。見ると内地が懐しくなつてナ!

盛に頭を下げ「シンク」(御苦勞様の意)の連發で親善の言葉をかけて呉れます。

今後も此處に駐屯し警備の任に當りますが、今迄の如く砲煙彈雨の中を飛び廻つた、あの緊張した氣持は一寸も忘れては居りません、益々元氣よく最後まで努めやうと頑張つて居ります。

一月九日

次々と陣地を占領して、遂に朱宅まで前進して來た。

此處で塘北宅の敵陣地にぶつかつたまゝ、一週間も對峙してゐる、其の間三、四回に亘る攻撃にも、敵は逆も頑強で退却しない。

(註、塘北宅は大場鎮の北方約四軒、朱宅は更に其の北方約二軒に在り)

相變らず敵の砲銃彈は雨のやうだ、殊にバツ／＼と屋根にあたる音がやかましく煩るさい。大隊長は古ぼけた小さな椅子に腰をかけて、地圖を睨んだきり動かない。稍暫くして、

「オイ煙草があつたら一本呉れ!」
と傍の傳令に聲を懸けた。

「ハイ……煙草はもうなくなりました」「ア、そうか」

と云つて、又黙々として地圖に眼を落す。
蠟燭の灯はシュー／＼と音をたて、灯影が大きく又小さく、

普通なら何とも感じないものでも荒くれた戰場ではね。チウさんも何も影さへ見えんからな、見えるのは屍體ばかり。まあ元氣で居れば又遭へるだらう。

十月三十一日

長らくの戦闘に支那米や支那味噌を食料とし、犬か猫のやうに眞黒な顔や手、そのまゝで、首都南京へ入城した戰士の喜びやう……

全く一生を通じて忘れることの出来ない光景でした。

暫く南京に滞在して、十二月二十六日出發、十日餘の行軍にて蘇州に到着、以來當分我が〇〇部隊は此處に駐屯すること、なりました。

過ぎし十一月十九日かと思ひます、追撃又追撃より蘇州攻撃に移り、遂に此處を占領しました當時は。家屋も街も砲彈や火災にて散々に荒れ果て、住民は何處へ避難したものが影さへ見え、唯、敗殘兵や敵の負傷兵がフラ／＼して居たのみであつたのに引替へ……今日見る蘇州は——

街には飲食店や、油で鯛焼のやうなものをジュン／＼やつてゐる店なども出來、新聞紙も賣つて居り、又四つの門には支那巡查さへ立つて追々舊の蘇州に復りつゝ、あります。

今迄逃げ廻つて兵隊には近づかなかつた者も、此頃は傍へ來て

もう午前二時だ。

「全員準備!」

の號令に皆跳ね起きる。外は霧でほんやりと空には星が鈍く輝いてゐる。敵の射撃も幾分少なくなつたやうだ。

「敵の奴、夜中までも射つてゐやがる、だが、こんな都合のいゝ霧はないぞ!」

攻撃隊形をとりながら各隊は一つの集團となつて、靜かに前進する。敵の右背を衝くのだらう。左へ左へと迂廻して漸く或る小部落に着いた。

東の空が白々と明けて來た。幾組かの斥候兵がガサ／＼と草の音を殘して出て往つた。

「暫く寝ろ! だが、この部落から外へは一步も出るな……」
少數の警戒兵を殘して、一同はゴロリと地面に横になる。

今度の攻撃人員は各中隊とも〇〇〇名しか居ない。大尉と曹長の中隊長が二人、あとの中隊長は皆豫後備の伍長だ。とう／＼

午後二時になつた。

「さあ! 攻撃に移るぞ!」

飯は朝から一度も喰べぬが、暫く眠つた兵隊は皆勇み立つた。「敵陣まで七百メートル!」

五分間と止んだことのない敵陣は、どうしたのか一發の音もしなくなつた、不氣味な位だ。

「オイ! 命の欲しい者は此處に残れ! 此の〇〇中隊長と共に死ぬ者はついて來い……!」

ばら／＼と我れ先にと前へ出る。一人として残る者はない。自分の他五名の兵は聯隊本部から電話通信の命を受け、すうつと今まで電線を延しながら、大隊本部との連絡に當り、敵状を一々報告して此處までやつて来たのだ。

前方は一面に刈残された稲田だ。各兵はすつかり擬装に身を固め、ばら／＼と散開して飛び出した。

百米も前進したかと思ふ頃、敵は我が進出を知つたらしい……バリ／＼バリ／＼と物凄く稲の穂が飛散する。彈丸は非常に近い、遂に大隊本部も一齊に飛び出した。

我が通信有線班（六名）も延線本部に續行した。友軍の砲も機銃も盛んに我々の援護射撃をして呉れる。

靜かだった戰場は忽ちにして嵐となつた。敵の迫撃砲も飛んで来る。前線の各隊は煙幕を焚き始めた。

自分等も遅れじと、伏せる、走る、伏せる、走る……線を延しながらクリークに取附いたが、此の時、先に出た筈の大隊本部を見失つてしまつた。

「オイ！本部は何處へ往つたかナー」

「おかしいぢやないか」「オイ、オイ、電線が切れやしないだらうか？」

「しまつた！彈丸で切れたらしいぞ」

○君と×君は「俺が往つて来る！」と保線に駆け出した。と、之と殆んど同時に、○中隊長は血走つた眼をして、自分等の横へ飛んで来た。

「ハッ！少し早く出過ぎました」

「なアに！それ位の元氣でなくてはいかん！」

此の一言は先刻叱られたあとでもあり、とても嬉しかった。

★ ★ ★

それから數分後、突撃だ！戦友はバタ／＼と倒れる。皆は倒れる戦友を見て口惜しがつた。間もなく日章旗は翻翻として塘北宅の一角に揚つた。

此の時、敵中に突込んだのは十六名の兵と、電話機を擔いだ通信兵六名とであつた。

大隊長以下、涙を流して喜んだ。

「あゝ！よくやつて呉れた。よくやつて呉れた……」

あの時叱つて呉れた○中隊長の姿が見えない。どうしたのだらう？

「オイ通信！電話を聯隊本部へたのむ！」

「ハイ！聯隊本部を呼出します」

ズリ／＼と電鈴が鳴る。それから長い間、聯隊長と大隊長の話が續いた。

夕陽を背から一ばいに浴びて、電話機にかぢりついて居る大隊長の其の姿！自分は今でも猶忘れられない。

一月廿七日上海にて

「中隊長殿！大隊本部の位置は何處ですか？」

と尋ねた。

「なにッ！貴様等行つて探して来い、通信本部を見失つて、どうするかッ！」

と、ひどく怒りつけて又飛んで往つて仕舞つた。

「やられたッ！」「ウーン／＼と重苦しい唸り聲がする。

あゝ自分等は叱られた、悪い……申譯ない……と齒軋を嚙むで振ひ立つた。○君は「よし！俺が本部を探して来る！」と、

雨霰の如く飛來する敵弾をくゞつて飛び出した。

この瞬間、自分は生温い空気を全身に感じたと思ふと、忽ち體

はギョツと地面に押し潰された。ドカーン……と落雷のやうな地響と共に砲弾が炸裂した。

はつと氣がついてあたりを見れば、横に居た戦友も我に返つて首を上げる、自分は黙つてをうつと體に觸つて見たが何ともない。唯耳がジーとひどく鳴る。

砲弾は自分等の前方約二米に落ちたのだが、敵の掘り残して逃けた壕に命中したばかりに命拾ひをしたのだ。

「チエツ！生意氣な○奴！」「エツ蕪ッ！○奴！」と奮怒の聲がもれる。

★ ★ ★

大隊長と本部下士官が自分等の前へ

「おゝ！通信はもう此處まで来てゐたのか、御苦勞、御苦勞」と笑ひながらやつて来た。

廣瀬 誠 毅 君 (外賣係)

當部隊は只今上海市に居ります。

後方勤務ではありますが、第一線と直接關係ある彈藥、兵器を補給し、直ちに前線の要求に應じて誤なからしめる重大な任務であります。

昨今新聞も見られませんので、戦況もさっぱり判りませんが、然し南京方面の部隊が彈藥を補給せぬ所を見ると、落付いたやうにも思はれます。

小生はアマアチユアとして習ひ覺えた寫真が役に立つて、只今支那兵の押収品や戦利品等の参考資料となるもの其他、軍の行動等を撮影し、現像から焼付一切を自分で致して居ります。

御承知の如く、此の邊の水は揚子江の水同様で、井戸は二十五米も掘り下けても良い水は出ません。勿論生水は到底飲めるものではありません。寫真にはどうしても清水が必要なので、ほんとうに苦心致します。

此の外に自動車係も命ぜられて居り、晝夜の別なく忙しいので遂御無沙汰致して居ります。

一月十七日

百瀬 琢郎 君 (マーケット係)

啓、北支の秋は實にすばらしい。

曠野は限りなく遠く延びて柳、アカシヤ、ポプラは今や紅葉の眞最中、遙か彼方に太原方面の山々が低く見える。

此處は石家莊の片田舎、平漢鐵路沿線の鐵橋畔です、恐らくこの地で越冬することです。

新聞なし、ラヂオなし、少數の土民は居ても言葉は通ぜず、全く「陣中曆日無し」です。

小生幸ひ無事、〇〇名の兵と共に守備するこの鐵橋には敵兵は一人たりとも近寄せない。御安心あれ。

寒さが加はりますから御自愛の程を……

十一月下旬着信

不

當隊はこの地に本陣を置き、各所に分れて半徑二十里近くの範圍内を守備して居ります。

小生は本陣に最も近い鐵橋の警備をして居ります。遠く太原方面の山間に討伐に行つて居る同隊の人々は、實に辛苦を舐めて居ります。

一度敗れても日本軍に對する敵愾心の旺盛なる正規兵が、各所に分屯して冬籠りの仕度をし、各部落民と連絡をとつて、日本軍少數なる地と見るや、必ず夜襲し來り、爲めに我が方としても相當手強い戰鬥をして居ります。

〇〇を共に元氣よく出發した者の内に、只今までに戰死一名負

奮闘下さる皆様の御様子を遙かに伺つて、我々は非常な心強さを感じさせられます。

小生はその後當部隊本部で酒保をやつて居ります。

小生はこんな樂な事をして居りますが、他の人々は當地から十里、二十里と離れた高邑、行唐などいふ處へ討伐に行つて居ります。

先日松本出身の伊藤信彦上等が戰死されましたが、同君は中隊の兵約〇〇名と共に〇〇から六里ばかり奥へ討伐に出懸けて

日中に敵を山の彼方まで追ひやり、夜十時頃疲れた體を〇〇村の空家に假寝の夢を結び、二ヶ所に下士哨を出して居たさうです。

處が夜半一時頃、勇敢にも敵の襲撃があり、拂曉四時頃まで戦つて敵は遂に退却したさうですが、この時伊藤君一人が頭部に敵彈が當り、眼が飛び出て斃れたとのこと、又下士哨に出て居た上沼伍長は敵の手榴彈を受けて、病院で遂に左手を切除したとのことです。

以上は其の戰鬥に参加した小生の友人久保田伍長（島木赤彦氏の息）が一夜小生の處で泊りながらの話でした。

戰鬥の翌日、遺骨が〇隊本部へ戰友に守られて來た時、小生は早速支那人の店から線香を買つて來て、酒保から菓子（それも兵隊の喰べるパン）と果物を御供へして、皆と共に燒香をしました。

この中隊は今度は又正太線の〇〇の山中に約二千の敗殘兵が居

傷六名を出しました。

支那の戦法は各部落の若者を集め、之に手榴彈を持たせて最前線に立たしめ後に正規兵が重機關銃、輕機關銃をもつて構へ、所謂督戰隊となり前線の俄兵をして決死的行動を採らせませす。

そして日本軍の直ぐ近く迄來て手榴彈を投げさせるのです。去る十一月廿二日の戰鬥に於て、腰を撃たれて歩けぬ支那兵が我が兵を目がけて手榴彈を投げんとした處、間髪を入れず飛込んだ曹長が刀で斬り殺したさうです。恐らく二、三秒遅れたら曹長自身やられてゐたこととせう。

こんな勇敢な兵があつても、統卒されて居ない支那兵の事として最後の突撃をすることがない爲め、思ひの外、我が軍には損傷が少くない譯です。

何んの廻り合せか、同じく召集されて出征した者でありながら小生は未だお話し申上る程の戰鬥に参加して居りません。然し遠く北支まで出征した兵士として、命せられたる任務に對しては懸命の努力を致して居ります。

十二月三日

一度軍隊教育を受けました小兵等が召に應じて戦地に働くことは、元より覺悟の上であり、東洋平和の爲めに、この身が少しでも役立つならば、光榮の上もない事と信じて居ります。

然しながら内地に在つて銃後の護の爲め一致團結して、毎日御

るのを討伐する爲め昨夜十二時トラックで出發しました。久保田伍長は出發に際し「若し俺が戰死したら、この品は私物だから君が好きなのだけ取つて、後は焼却して呉れ」と言つて一包的品物を預けて行きました。今晚迄には現地に着いて、飛行機と共同して攻撃する筈ですが、今その飛行機の飛出す爆音が盛んに聞えます。

戰友よ無事で居て呉れ——と心に念じつ、この筆を止めます。

十二月十八日午前八時

諸角 一雄君（新宿支店）

昨日は十五日附の新聞を御送り下さいまして、誠に感激の外御座いません。戰友一同と大喜びで讀合ひました。銃後の皆様の御熱誠に對し、深く感謝いたします。

歩兵第〇聯隊も、陣中にて第六十四回の軍旗祭を催しました。當日は無禮講にて、久し振に長閑な一日を送りました。

この手紙の着きます頃は、初春になることかと存じますが、何卒よきお年をお迎ひ下さるやう遙かにお祈り致して居ります。

十二月廿四日齊々哈爾にて

北支も酷寒となりました。

先月十九日から雪が降り出しましたが、その翌日元氏を出發、吹雪の悪路に難行軍をして、三日無事順徳に到着、更に〇〇日〇〇方面の任務に就きました。

此頃の寒さは生れて初めての事です。河は瀬の早い所だけ残して氷結し、かけてゐるマスクも固く凍り、風に當る頬に手を當てれば感じがなくなつたやうで、又痛いやうにも感じます。

十二月九日、〇〇方面からの歸途、東参召村にて部隊員一同晝食中、突然起る激しい銃聲、土匪が我が部隊を指して襲撃して來たのです。土匪の好意ある報告によつて、大體の情況を知り、之を撃退すべく命令一下、交戦しました。

土匪(三十二軍、二十九軍の敗殘兵及び一部土匪)は約三百、戦闘二時間、遂に敵は算を亂して潰走しました。此時捕虜十三人、敵の遺棄死體二十七、軍馬四、分捕り品は輕機關銃一、小銃二十三、拳銃一、青龍刀三、小銃彈三〇一發。

〇〇は部隊員一同の目前にて〇〇〇、生れて初めて軍刀の斬れ味を見ることが出來、痛快な氣持でした。

我が隊には幸ひ一人の負傷者もなく、萬歳を叫んで、無事目的地に歸りました。

十二月十日

大晦日は年越しの御祝酒を戴きました。

元日午前零時起床して、遠く東の空を拜んだです、いかにもその夜は寝つかれませんでした。誰もがです、懐しい故國の思ひ出は走馬燈のやうに頭腦の中を廻りました。唯靜かにしてゐると犬の遠吠が耳につくばかりです。

起床喇叭……陣中に意義ある正月を迎へたです。先づお雑煮ですが、餅は澤山に出ました、班員各自思ひくくに煮たです。世帯持ちも子供同様、お雑煮の香に大はしやぎです。

先に出來たのを失敬して貰ふ者、フォークを持つて見つめてゐる者……みんな美味く戴きました。

午前十時、部隊としての式を舉行しました、朝日に輝く一同の顔「國の鎮め」の喇叭と共に伊勢大廟を遙拜、「君が代」の喇叭に宮城遙拜、そして部隊長の發聲で 天皇陛下萬歳を三唱し、北支の平野を震はせました。

私は、否……皆險に熱いものを出したです、こんな感激は初めて、陣中に在るもののみ知る事を得ると思つたです。

二日には私は衛兵勤務でした。陽が上つて十時だと云ふのに、寒氣は強く寒暖計は零下五度を示してゐました。

一月五日

本日は誠に結構なる慰問品を御惠送下さいまして、有難う御座います。

私一人で戴きますのも勿體ないと思ひましたので、家内一同(目下私の家族は六十三人)に對し

「抑! これなる品は我が大三越の華麗なる諸嬢より成る國防婦人會より老兵に贈られましたものでありまして……」

と一席辯じた上に、頷ち與へました、皆から大變に喜ばれました。

隊往く駒の足速み、應召以來既に半歳の月日が流れやうとして居ります。灼熱地獄も斯くやと思はる、烈日の下で、東奔西走したのも今は夢、蕭々として霜枯れた北支の曠野に、裸となつた揚柳の梢を吹き鳴らす寒風、時に雪を交えて兵馬の頬を横ざまに撲ちます。

朝夕寒暖計は零下十餘度を示し、愛馬の渴を癒さんものと汲み上げた井戸水が見る見る結氷するなど、一寸内地では見られぬ光景です。

さうかと思ふと、日中南國を想はせるやうな、暖かいこともあり、老兵シャツ一枚になり「どれ一寸洗濯を……」と云ふやうな日もあります。

然しこれは極めて異例で、大陸的の寒氣は森々と身に迫り、國境警備の歌「極寒零下三十度……」も、もう遠くはないでせう。

私は相變らず第一線に〇〇の輸送に任じて居ります。輸送のない日には冬營の準備に多忙です。

炊事當番氏は……さてお正月の御料理は——三越の蒲鉾に二幸の詰合せ——いや之は皆様のプラン……野戦にありましては、先づ豚君の焼肉、甘藷のきんとん、豆の煮べと云ふ處です。

それから秘に新年演藝大會の計劃も進められて居りますので、僕も重大決意の下に、即ち猛勇を奮つて、「ソレよい……」

三越音頭を一舞ひする事に致しました。

皇軍は連戰連勝、上海を始め主要都市を悉く攻略し、首都南京も遂に陥落と聞く、更に彼等が唯一の力綱と頼んだ九ヶ國會議も、正義日本の前には、掌中一吹き灰たるを出せず、反つて皇威を宣揚誠に御同慶に存じます。

去月二十九日内地新聞の發表に、敵の損傷八十萬と出ておりました。アそれなのに、性蛇の如く執念深く、痴鈍にして龍車に向ふ蟻螂の愚を未だに悟り得ざるか、〇〇〇奴! 時々ドドーンと大砲を射つてよこします。

陣中の事は眞に奇、紙一重右すれば傷き、左すれば仆る。幾度か危地を脱し、今尙瓦全たるを得るのも、又何等後顧の憂もなく、任務の遂行に全力を傾注することの出来るのも、皆銃後に於ける皆様の御援助の賜と感謝致して居ります。

母國を離れて九百里、身は北支の曠野に在りて、爾後の動きすら豫期し得ぬ忙中閑のひと時、私の腦裡に浮ぶものは、大三越の盛況と、錦上花を添へる皆様の麗姿とで御座います。嗚かし歳末賣出しの大活動でおつかれのこと、御推察致します。

只今年午後十時、私は内に戦友の重爆(いびき)を聞き、外に北

支特有の寒風に交つて来る犬の遠吠を聞きながら感謝のペンを走らせて居ります。

十二月十一日

須藤 榮三君 (家賣場係)

(1) 道路と氣候

當地方は全く降雨なく、毎日好天氣続きで、たまに雨が降れば下水設備もなき市中のこと、て、道路はまるで「しる粉」の様になり、城外の野道は猶更それ以上です。晝間は割合温度高く、夜間から明け方は、相當寒氣を感じます。

(2) 犬と鳥群

野良犬の多いのには驚きます。大きい犍猛な奴がノソリノソリと溫和さうに歩いて居り、夜になれば、此處彼處で遠吠が聞えます。

(3) 食 事

支那人は大人も小人も皆大きな井を片手に、自家の軒下に出て腰をおろし、バクリ〜と……あちらこちらを眺めなが

ゆるなど終日を愉快に過し候
十二月二十三日 (北支より)

杉山 忠藏君 (庶務係)

昨日は皆々様の心からなる慰問袋を有難く頂戴致しました、厚く御禮申上げます。故國を遠く離れて身は戦場に在る時、内地からの便りや慰問袋は何よりの楽しみです。

そして「战友の歌」の如く
それから後は一本の煙草も二人で分けてのみ、着いた手紙も見せあふて……

事實その通りです。淡い蠟燭の灯影にて戦友達と分け合ひ、互に喜んで故郷の話に花を咲かせます。

全く皆々様の熱誠こもる御後援には感激の涙の出づるを如何とも出来ません。

皇軍の將士は寒氣凛烈たる中にも益元氣旺盛、日夜不眠不休の奮闘を續けて居ります。百雷の如き砲聲、大空に飛ぶ飛行機の爆音は寒氣など追ひまくつて、我等の意氣を一層破舞させて呉れます。

郷里の人には二三逢ひましたが、松本源藏さん(庶務係)には

ら喰べて居る様は實に長閑なものです。戦争など、どつちどうならうと、我不關焉と云ふ感があります。

(4) 陣中にて感激

○縣を取圍む古き城壁、その東門樓上にて部隊長殿以下吾々にまで
聖上陛下より「御賜」の御酒を謹んで戴き、遙に皇居を拜して其の光榮に感激す。

(5) 軍樂隊の慰問

戸山學校軍樂隊の慰問を受けて、陣中、久振りに種々のメロディーを楽しみ、最後に國歌「君が代」の演奏に當り、全員起立、嚴肅の裡に合唱……感涙に咽ぶ。

十二月十日

○○日、陣中に吾等が軍旗、拜するだに畏し。
第六十四回の祝祭を迎へ、同時に吾が石黒部隊に對し○○軍司令官閣下より感狀を賜り候
過去の日露役以來第二回目との事にて、祝賀も一層盛大に行はれ、午後は餘興の假裝行列等々、○縣市中はこれ等祝祭氣分の兵一色に塗り潰され、その中より柔かに華かなる東京音頭も聞

残念ながら逢ひません。又いつか逢ふ機會があると思つてゐます。
十二月一日 (上海より)

鈴木大四郎君 (銀座支店)

私も第一線に活躍する機會に恵まれ、戰場へ來てから早くも二ヶ月餘を過しました。

最早戦陣生活にも馴れ、緊張の中にも心に餘裕が出來て参りました。

我々工兵隊は大體に於て、後方任務が多い爲め、歩兵の如き華やかな場面に直面する事も少なく、今までも大した事に出會つて居りません。

今や北支も時々刻々、更生の道を辿り、明朗なる社會の建設に努めて居ります。

私は今、德州(註、津浦線、河北、山東省境に近し)に來て居ります。此處も最早や平和の姿に立歸り、避難民も殆んど戻つて各自の職業に就き、戦争など忘れたかの如く暢氣な光景を畫いております。

氣候も内地より暖かく、未だ雪も見ず、大變住みよい處であります。

十二月十三日

砂原鴻之助君 (庶務係)

我が隊は〇〇日南翔通過、敵のトーチカは我が砲弾に跡形もない程に打破られ、塹壕や路上は屍の山を築いて居りました。十五日間も降り続く雨にて泥濘甚だしき中を前進、〇〇の地點にて敵砲兵を全滅、實に痛快の至りです。

銃後の御聲援誠に心強く、邦家の爲め益々奮闘、卓怙極まる支那兵を全部かたづけける覚悟で居ります。

十一月廿一日 (南支より)

杉山 勳君 (外賣係)

私共部隊は豊臺より廣溝橋を経て、涿州、保定の會戦に参加し或る時は粟飯、棗の實などに飢を凌ぎながら、追撃又追撃、石家莊、滹沱河附近の戦闘にも加はり、連戦連勝、遂に舊關を越えて萬里の長城に到達致しました。

當地方は難路の上に飲料水もなく、兩三日間は飯も炊けず、乾パンのみをかぢりつゝ、太原城を攻略致しました。

平定附近の戦に於て私共部隊も〇〇餘名の戦死者を出し、軍馬の戦死も〇〇頭を算しましたが、將兵能く協力の結果、寡兵を以て大敵に當り、僅々數時間にして之を撃退せしめました。只今は太原近くの〇〇といふ部落にて待機しながら、土民の宣傳工作に奔走致して居ります。

一月元旦

杉田 京 造君 (外賣係)

我々東京部隊は去る十一月追撃戦に参加して、一度上海市外〇〇に反り、十二月上旬再び南京方面の〇〇へ殘敵掃蕩に出發しました。

小生等は後發せる爲め數日の隙を得まして、苦心の結果別葉の如きニュース寫眞を送りする事が出来ました。(註、巻頭に収録せるもの)これ等は何れも敵弾の飛來する中で撮影したもので、時には空襲を受ける等、そのスリルを感じつゝ、一、二分の間にカメラにキャッチする——その豪快なる氣持こそ「動中静あり」と云ふ處です。

小生の持参しましたカメラは古いほろ／＼のベストコダックです、面白きニュースを送れとお言葉に對し、小生の愚作中幾分でも戦地の氣分を御傳へするものがあらば幸甚の至りと存

じます。

最近敵はソビエトの飛行機を以て、久方ぶりに我々の頭上に飛來、爆彈投下をやりますが、神の子たる我々には決して命合せず、四千米位の上空を女々しくも逃げ去ります。

この空襲も敵國支那の最後の華であらうと思ふと、寧ろ哀れを感じます。

銃後——我々の後援會の皆様、我が皇軍の意氣を……我々東京部隊の勇姿を……どうぞ思ひ浮べて下さい。

小生は今、ローソクの灯の下で、遙か東方——日本の空から美しい光をさしてゐる星を見ながら此の便りを書いて居ります。

では！三越の皆々様に對し、萬歳を叫ばせていただきます。

十二月十三日夜

此の手紙が東京へ着く頃は、既に新しい昭和十三年の春が訪れて、大日本の國土に明るい光がいやが上にも輝いてゐる事と存じます。

戦地の私等は昭和十二年も餘すところ一週間となつた今日、別に何等心に響く事もなく、明けた日が何日であるかをさへ忘れて居ります。

去る十一月十二日附の消印ある慰問袋、昨廿六日無事御受け下さる事が出来ました。

防寒着や懐かしい三越の寫眞や……嬉しくてうれしくて……何

時までも、何時までも何度も、何度も繰返し拜見して居りました。そして東京の皆様を色々と連想致しました、何卒後援會の皆様によりしく御願ひ申上げます。

〇〇部隊は湖州から杭州を占領し、現に猶殘敵掃蕩中です。南京陥落の今日も未だ盛んに我が空の無敵軍が、勇ましい姿で爆撃をして居ります。今迄〇〇から來た重爆機も既に完成した〇〇の大飛行場から、大鷲の如く大陸の碧空へ飛び出して居ります。

最近では面白い事に、上海市政府附近の道路は、すっかり改名されて居ります。例へば近衛通り(國政路)明治通り(江灣路)松井通り(黃興路)加納通り(其美路)等、市政府を中心に改稱されてゐます。そして附近には白い標柱に「戦勝記念塔建設敷地」「兵營敷地」など、まるで新日本を想はせるやうな色々なものがあります。

此度新たに上海警備司令官にならせられた 朝香宮殿下の御邸も既に出來て居ります。

十二月廿七日

杉本 勇 助君 (新宿支店)

皆々様の神佛かけての御祈りで、元氣に戦線に居られる事を、

毎日感謝致して居ります。

私は今太原に居ります。客月二十八日此處に到着、其の夜は支那兵營に宿泊しました。戦地は寝るにも夜具なく、着のみ着のままに毛布一枚だけ、ストーブもなく焚火です。

起床は午前五時、六時過ぎて初めて薄明るくなる、時々流弾が飛んで来ます。太原城は見る影もなく破壊され、友軍の猛烈さを思はれます。

上陸以來、三日雪が降つたきりで晴天続きです。朝晩は實に寒く、日中は内地と大差なきやうに思はれます。私は大隊本部に勤務せる爲め、餘り寒さも感ぜずに居ります。

太原城は周圍が約四里強もあり、奥支に於ける相當な都です。南京も陥落して、内地に於ては旅行列など賑かに催され居ること、思ひます。私も來年三月頃には或は凱旋出来るかと思つて居ります。就きましては私も三越の従業員の一入として、兵隊さんから凱旋の土産品を依頼されて居ります。出来るならば御註文致したい考ですが、御引受下さるならば、三越の延長とも申しませうか、其積りで註文を取りませう。只今の處、十名程註文したい人が居り、折角申されるので、駄目だとも申兼ねて居ります。

十二月九日

支那事變應召者氏名

本店

飯野誠	(補、砲、二)	雜貨仕入
井出次郎	(補、少尉)	吳服賣場
井上有次郎	(豫、歩、少尉)	食料品仕入
伊藤博文	(補、砲)	計
伊藤寧	(補、補、特)	庶務
伊藤孫藏	(後、歩、大尉)	受渡
伊藤義忠	(補、工)	家具賣場
石川光一	(豫、歩、少尉)	吳服賣場
石山儀一郎	(後、歩、一)	同
板橋政次郎	(航、少尉)	雜貨賣場
生田秀之	(補、歩、二)	圖書賣場
泉亮	(後、航、一)	庶務
今井彌次郎	(後、歩、伍)	出納
今井哲夫	(補、歩)	吳服賣場

(イロハ順)

(○印ノ勇士ハ其書信ヲ本紙ニ收録シタルモノ)

服部廣	(補、特)	雜貨仕入
服部光成	(補、特)	食料品賣場
萩原清四郎	(豫、歩、上)	外賣
濱田通	(豫、歩、曹)	庶務
林登	(補、特、二)	受渡
伯ヶ部喜一	(補、歩)	雜貨賣場
星野哲雄	(補、歩)	計
星野量藏	(豫、歩、上)	外賣
堀田右八郎	(後、歩、上)	庶務
堀田大介	(豫、歩、二)	通信販賣
本田仲雄	(後、歩、上)	警防
細谷不二雄	(補、砲)	家具賣場
轟木不二雄	(後、歩、伍)	受渡
大瀧新夫	(豫、歩、少尉)	食器賣場
大谷拓二	(補、歩)	受渡
大西功二	(補、工)	家具賣場

十一月十九日出征途上廣島ニテ死亡

十二月廿五日召集解除

大竹秀夫	乙川文作	渡邊三千	渡邊源吉	加藤利三	加藤信一	加久田謹治	加納幸藏	金子三郎	金子三郎	勝本典二	川名浩二	片山真雄	上條伍一	片柳隆一	春日修	柏谷菊松
(豫、砲、少尉)	(後、歩、上)	(補、輔、特)	(補、輔、特)	(後、歩、上)	(補、輔、特)	(補、歩、二)	(後、補助看)	(豫、歩、二)	(後、歩、二)	(補、歩)	(後、歩、一)	(一等航)	(後、經理伍)	(補、歩)	(歩、一)	(後、砲、二)
洋服賣場	庶務	外賣	庶務	出納	吳服賣場	庶務	計	吳服仕入	庶務	洋服仕入	仕入部長附	洋服賣場	出納	洋服裁方	吳服賣場	庶務

唐津敏雄	米元忠男	高地德治	高山正元	高野寅次	高橋源次郎	高橋富士雄	高田憲政	竹腰金三郎	竹内安一	田中八一	田中憲之	土屋政	鶴岡房夫	根本一郎	中村吉惠	中村喜三郎	中村泰雄
(豫、歩、上)	(豫、輔、特)	(後、歩、曹)	(砲、上)	(海軍一等看)	(豫、歩、上)	(歩、伍)	(補、歩)	(衛、伍)	(豫、砲、上)	(豫、歩、少尉)	(補、歩、二)	(後、工、上)	(豫、衛、伍)	(豫、歩、上)	(後、輔、特)	(後、騎、一)	(豫、歩、上)
食品賣場	同	庶務	受	食器賣場	計	圖書賣場	雜貨賣場	洋服賣場	外賣	受	考	庶務	同	雜貨賣場	外賣	吳服仕入	花小島賣場

中原金次郎	長沖吉二	長澤吉三	成木廉三	内藤一年	村上富一	上原正直	生方博	野村光平	野津浩爾	野崎與一	山崎七五三	山田龍一	山谷研二	山林敏二	柳原五郎	柳澤政吉	柳田秀夫
(後、歩、一)	(海軍二等水)	(補、歩)	(歩、伍)	(後、歩、一)	(衛、上)	(補、輔、特)	(後、輔、伍)	(後、砲、一)	(豫、主計少尉)	(後、歩、一)	(豫、歩、一)	(補、歩)	(補、特)	(豫、砲、上)	(後、歩、一)	(後、砲、准尉)	(豫、歩、少尉)
庶務	雜貨賣場	受	雜貨賣場	庶務	洋服仕入	受	庶務	同	廣告	庶務	通信販賣	仕入部長附	マーケット仕入	食品賣場	庶務	同	出納

八木米作	矢島敏郎	松本茂留	松本久男	松本源藏	正木助雄	松原幸二	松澤正男	松本大次郎	丸杉喜代太郎	牧田三之介	牧田三之介	船木信三	藤田定一郎	深田精一	小林精二	小林岩次郎	小林安三
(航、伍)	(補、歩)	(豫、主計伍)	(後、衛生、一)	(後、歩、伍)	(歩、伍)	(後、歩、一)	(補、輔、特)	(主計、少尉)	(輔、特)	(後、歩、一)	(後、歩、一)	(歩、二)	(後、歩、上)	(後、砲、一)	(補、助看)	(豫、歩、上)	(後、騎、一)
雜貨仕入	吳服賣場	受	庶務	同	出納	庶務	庶務	洋服賣場	吳服賣場	通信販賣	商品試驗	雜貨賣場	庶務	同	外賣	吳服賣場	同

井上幸義 岩本正啓 西村江啓 堀江與啓 貝瀬守 神長忠 川邊清 田邊森 村串甚 朽木重 山本軍 松波一 後藤秀 雨森樹

新宿支店

望月靜馬 杉山忠藏 杉山動藏 杉山京助 砂原鴻之助 須藤榮三

貨納 服務 貨護 貨務 貨渡 貨務

森角熊男 諸本助 杉勇一 泉松象三 塚耕春次 尾島耕象三 脇島耕象三 横尾島耕象三 武田三郎 中村慶三 中村慶三 倉橋彦三 伏木保三 小島弘三 寺島三郎 安藤三郎 佐藤三郎 宮川三郎 鈴木三郎

銀座支店

貨納 渡貨 品貨 品服 品服 貨務 貨務 貨

小林喜作 小橋五郎 小宮意三郎 小貫一郎 小島鈴太郎 近藤銀平 近藤直平 兒玉惟一 後藤嘉一 江口寶一 出村信一 青山捨信 淺野龜捨 安藤真造 有田真啓 淺田真啓 境見幸三 坂本生三 西條留吉

佐藤澄夫 才木光雄 北村政雄 水野亮太郎 源屋國次 源越香松 水谷喜代長 宮下勘次 柴崎重太 篠崎新二 清水靜雄 志村信三 清水信三 清田代三 下田利三 平田道雄 廣瀬誠毅 廣瀬喜八 廣瀬廣吉 百瀬琢郎

昭和十三年三月廿八日 印刷
昭和十三年三月三十日 發行

(非賣品)

編輯兼
發行者

東京市日本橋區室町一丁目七番地
株式會社 三越

玉井肇

印刷所

東京市神田區神保町一丁目四四ノ二
戶根木共榮堂印刷所
電話神田 25) 三六八三番

發行所

東京市日本橋區室町一丁目七番地
三越應召軍人後援會

終

